行き過ぎかてぬ。妹が家のあたり

下野ノ國の歌（二首）

3424 下つ毛野御鴨ノ山の小楢のす、まぐはし子ろは、誰が餉か持たむ

3425 下つ毛野安蘇ノ川原從、石蹈まず、空從と來ぬよ。汝が心告れ

陸奥ノ國の歌（三首）

3426 會津嶺の、國をさ遠み、逢はなはゞ、偲びにせむと、紐結ばさね

3427 筑紫なる匂ふ兒ゆゑに、陸奥の香取處女の結ひし紐解く

3428 安達太郎の嶺に臥す鹿の、ありつゝも、吾は至らむ。寢どなさりそね

譬喩の歌

遠江ノ國の歌

しまふ事が出來ない事だ。いとしい人の家の邊を。

3424 下野の御鴨山の小楢の樣に、美しい人は、誰の旅歸りを迎へるとて、飯を盛つてゐる事だらう。外の人の爲ではなく、私の爲だ。

3425 下野の安蘇の川原を通つても、石も蹈みつけないで、心は空になつて、やつて來た事です。何卒、お前の心を仰つしやい。

3426 會津の山が人里離れた樣に、國の遠さに、人々に逢はずに居る樣にならば、其間の思ひ出す種にしようから、紐を結んで置いて下さい。

3427 九州に居る、美しい娘さんの爲に、東國の地方の果ての、香取の里の娘が結んだ紐を、解いていらつしやるよ。きつと。

3428 安達太郎山の峰に寢てゐる鹿ではないが、この儘で、私が通はう。私の寢場所をとりのけてくださるな。

3429 遠江引佐細江のみをつくし。吾を賴めて、あさましものを

駿河ノ國の歌

3430 信太ノ浦を朝漕ぐ船は、よしなしに漕ぐらめかもよ。よしこさるらめ

相摸ノ國の歌（三首）

3431 あしがりのあきなの山に、引こ船の後引かしもよ。許多來難に

3432 あしがりのわをかけ山の穀の木の、吾をかづさねも。かづさかずとも

3433 薪こる鎌倉山の木垂る木を、待つと汝が言はゞ、戀ひつゝやあらむ

上野ノ國の歌（三首）

3434 上つ毛野安蘇山つゞら、野を廣み、延ひにしものを。あぜか絶えせむ

3429 遠江の引佐細江にある水標ではないが、いとしい人の心は、自分に賴りに思はして置いて、何うやら、褪せて行きさうな容子だ。

3430 志太の浦を眺めてゐると、朝漕ぎしてゐる船が見える。あの船も、漕ぎよせるあてなしに、漕いでゐる事だらうか。そんな事はない。漕ぎよせるあてがあるのだらう。わたしも、お前に逢はうとて來る。

3431 足柄山脈のあきな山で造へて、引き卸す船ではないが、心殘りがして、後へ引かれる樣な心地がする事だ。ひどくやつて來にくい爲に。（偶に逢うた時は。）

3432 足柄のわをかけ山の穀の木ではないが、私をば親の處から、拐かして逃げて下さいよ。拐かし難くあるにしても。

3433 私は鎌倉山に生えてゐる、枝の垂れるばかりになつた古い木ではないが、待つとさへお前が、一言言うてくれゝば、此樣に焦れ續けてゐようか。

3434 野一面に、上野の安蘇山の葛が生え擴つてゐる樣に、私は心に深く、お前の事を思ひ込んでゐたのだものを、今更何うして、とぎれてしまふものか。（疑ふには及ばない。）

3435 伊香保ろの岨の榛原。我が衣につき
よらしもよ。たへと思へば

3436 白砥掘ふ小新田山の守る山の、うら
がれせなゝ。とこはにもがも

陸奥ノ國の歌

3437 陸奥の安達太郎檀、はじき置きて、
反しめきなば、弦刺かめかも

雜の歌（國の知れぬ）

3438 つむが野に鈴が音聞ゆ。上信太の殿
の仲男し、鳥狩りすらしも

3439 鈴音の驛亭の包み井の、水をたまへ
な。妹が直手從

3440 この川に朝茶洗ふ子。汝も吾も、同
年兒をぞ持てる。いで、子賜りに

3441 間遠くの雲居に見ゆる妹が家に、何

3435 伊香保山の崖にある王孫の原の、染色が自分の著物に付く
様に、いとしい人の心が、何うやら自分に、靡き付いて來
さうである事だ。ぢつと辛抱して、思うてゐる内に。

3436 山番の付いてゐる山の、あの新田山が、梢が枯れてくる様
に、何時迄も離れないで、始終わたしの許へ通うて欲しい
ものだ。

3437 奥州の安達太郎山の檀で造へた弓をば、うつかり弦をはづ
して置いて、そるに任せて置いたなら、後には、弦を懸け
る事が出來ようか。（油斷して、女をうつちやつて置いて、
氣がかはつて後に、取り戻さうと思うても、其樣事は出來
るものか。）

3438 つむが野で、鷹に付けた鈴の音が聞えてゐる。上信太の御
屋敷の、仲の坊つちやんが、鷹狩りをしていらつしやるに
違ひない。

3439 この街道の、うまつぎの屋敷に在る、閼をした井戸の水を
下さいよ。いとしい人の直の手から。

3440 此處の川で、朝のおかずの菜を洗うてゐるお方よ。お前さ
んも、私も、同年程の可愛い人を持つてゐる。さあ、其人
を交換して頂戴よ。

3441 遠くの方の地平線の邊に見える、いとしい人の家へ、早く

時か到らむ。歩め。吾が駒

3442 東路の田子の呼坂、越えかねて、山
にか寢むも。宿りはなしに

3443 心もなく吾が行く道に、青柳の萌り
て立てれば、物思ひづゝも

3444 きはつくの岡の莖蒜我摘めど、籠に
も滿たなふ。夫なと摘まさね

3445 水門のや葦が中なる玉小菅。刈り來。
吾が夫子。床の隔しに

3446 妹なろがつかふ川門のさゝら荻。あ
しと一言語りよらしも

3447 くさかげの安濃な行かむと墾りし
道。安濃は行かずて、荒草だちぬ

3448 花散らふこの向つ峯の、をなの峯の
ひぢに著く迄、君が代もがも

3442 行きたいものだ。とつとゝ歩け。吾が馬よ。
今夜は、東國地方の怖しい傳へのある、田子の呼坂を越え
きれないで、山中で寢ようよ。泊る家がないから。

3443 何の氣なしに、自分の歩いてゐる道に當つて、青々とした、
若い柳が芽を出して立つてゐたので、忘れてゐた戀ひを思
ひ出した事だ。（佳作。）

3444 きはつくの岡の莖蒜を、私は摘んでゐるけれど、なか〳〵
籠に一杯にならない事だ。あなたも私と一處に、摘んで下
さいよ。

3445 川口なる葦の中に生えてゐる、美しい小菅をば、刈つてい
らつしやい。あなたよ。床の上敷きの敷き物に。

3446 いとしい人が、神を呼び寄せて、誓ひを立てる川の渡り場
の、小さな荻を立てゝの占ひには、どうやら、今夜逢ふの
は悪い、との只一言のお告げを、語り寄せるやうに見える。

3447 安濃の里にゐた昔の人が、思ふ人の許へ通ふ爲に、切り開
いた此道よ。安濃壯夫が通はなくなつた爲に、荒々しい草
が茂つて立つたことだ。

3448 茲の向ひに立つて居る山なる、をな山が低くなつて、土に
屆く程になつて了ふ迄、年永く尊いあなたの御齡が、あれ
ば好いが。

3449 白栲の衣の袖をまくらが從、海人漕ぎ來見ゆ。波立つな。ゆめ

3450 をぐさ男とをぐさ次男と、潮舟の竝べて見れば、をぐさ傾めり

3451 さなづらの岡に粟蒔き、かなしきが駒はたぐとも、我は叱と追はじ

3452 おもしろき野をば、な燒きそ。古草に新草まじり、生ひば生ふるかに

3453 風の音の遠き吾妹が著せし衣。袂のくだりまよひ來にけり

3454 庭に立つ麻布小衾。今宵だに、妻よしこせね。麻布小衾。

相聞（國の知れぬ）

3455 戀しけば來ませ。吾が夫子。垣内柳末抓み枯し、吾立ち待たむ

3449 著物の袖を枕にすると言ふ語に緣のある、まくらがの里の邊をば、海人の漕いで來るのが見える。波よ。決して立つな。

3450 私の處へ通うて來る、あのをぐさの男と、同じをぐさの若者とを竝べて見ると、どうやらをぐさが傾いて居る。卽其方に、自分の氣が引かれる。

3451 自分はさなづらの岡に、粟を蒔いて居るのに、譬ひ、可愛ゆい人が、其粟畑に馬を、手綱をはいでやつて來た處で、私は、しいとも追はずにおかうよ。

3452 面白い眺めの、野を燒いてはならない。去年からの古い草に、新しい草が交つて生えれば、生えるやうに、任せておいたがよい。

3453 遠くにゐるいとしい妻が、私に著せてくれた著物の袂の、下りが綻れて來たことだ。

3454 麻布蒲團よ。せめて今夜にでも、いとしい夫を、私の方へよこしてくれ。麻の蒲團よ。

3455 戀しくあるなら、入らつしやいませ、いとしいお方よ。私は屋敷内の柳を、さきを摘み枯し乍ら、何時迄も立つて待つて居ませう。

3456 うつせみの八十言のへは茂くとも、爭ひかねて、吾を言なすな

3457 うち日さす宮の我が夫は、大倭女の膝枕く毎に、吾を忘らすな

3458 汝夫の子や、とりの岡路し、中だをれ吾を哭し泣くよ。息づく迄に

3459 稻搗けば皺る吾が手を、今宵もか、殿の若子が、とりて嘆かむ

3460 誰ぞこの家の戸おそぶる。新嘗に吾が夫をやりて、齋ふこの戸を

3461 あぜと言へか、眞實に逢はなくに。ま日暮れて、宵なは來なに、明けぬしだ來る

3462 足引きの山さは人の、人澤に、まなと言ふ子が、あやにかなしさ

3456 世間の人々の、澤山の評判はうるさくあつても、其爲に、それに抵抗しきれないで、私の名前を口に出しなさるな。

3457 御所に宮仕へをして入らつしやるいとしいお方は、美しい大和女の膝を枕として寢る、いつも〳〵、私のことを忘れないで、思ひ出して下さい。

3458 いとしいお方よ。其人はとりの岡の路が、中窪になつて居るやうに、中途で撓む心持ちになつて、私を甚く泣かすことだ。こんなに溜め息吐く程に。

3459 始終いねをついて居る爲に、皺の切れた私の手をば、今夜あたりは、御殿の若樣が、可愛さうだと手にとつて、お嘆き下さることだらう。

3460 誰だ。この內の戸を押してあけようとするのは。今日は新嘗祭りの爲に、家中はすつかり、吾が檀那迄も外へ行かして、私が愼んで、籠つて居る家の戸を、叩くのは誰だ。

3461 どうした訣であらうか、眞實逢ふまいと言ふ心か。日が暮れて、宵の中には來ないで、夜の明けた時分に、あの人はやつて來ることだ。

3462 山澤人で、人澤に卽、澤山の人に媾會すると言はれてゐる浮氣な人が、不思議にいとしいことだ。

3463 間遠くの野にも逢はなむ。心なく里のみ中に、逢へる夫なかも

3464 人言の繁きに依りて、蒋薫の同じ枕は、吾は枕かじやも

3465 狛錦紐解き放けて、寢るがへに、如何せろとかも、あやに愛しき

3466 まがなしみ寢れば言に出。さ寢なへば、心のをろに乘りてかなしも

3467 奥山の眞木の板戸をとゞとして、我が開かむに、入り來て寢さね

3468 山鳥の尾ろの秀尾に羅麿懸け、捉ふべみこそ、汝によそりけめ

3469 夕占にも今夜と告らろ。吾が夫なは、何故ぞも、今夜寄しろ來まさぬ

3470 逢ひ見ては千歳や去ぬる。否乎諾乎。

3463 人里離れた野でゞも、出會うてくれゝば好いのに、氣なしにも、里の眞中で私に出くはした、いとしいお方だこと。

3464 それでは、話も出來ません。人の噂がうるさい爲に、蒋薫で拵へた一つ枕を枕として、一處に寢ることをしないで居ようか。

3465 下裳の紐を解き放つて寢て居るのに、其上まだ、如何せよと言ふのか。無上に可愛ゆくてならないことよ。（此人が。）

3466 いとしさに共寢をすると、人の評判に言ひ出されるし、それかと言うて、寢なければ、心のさきにのしかゝつて來て、離れないでいとしいことだ。

3467 奥山の檜で拵へた板の戸を、どん〳〵とお叩きなされば、私が開いて差し上げませうから、這入つて來て、お寢みなさいませ。

3468 山鳥の尾の前の尾に、羅麿の蔓を打ち懸けて捕へる樣に、おまへが私の手に、つかまりさうだつたからこそ、お前に心を寄せて居たのだ。

3469 夕暮れの辻占にも、今夜はお出でになる、と告げがあつた。それに、いとしいあの方は、どうして今夜、此方へ立ち寄つて入らつしやらないのだらう。

3470 あの方に逢うてから後、千年も立つて了うたのか、それと

吾や然思ふ。君待ちがてに（人麻呂集に見える。）

3471 暫らくは寢つゝもあらむを。夢のみに、もとな見えつゝ、我を哭し泣くる

3472 人妻と、何故か其を言はむ。然らばか、隣りの衣を借りて著なはも

3473 佐野山に打つや斧音の、遠かども、寢もとか、子ろが俤に見えつる

3474 植ゑ竹の本さへとよみ、出でゝいなば、何方向きてか、妹がなげかむ

3475 戀ひつゝもをらむとすれど、ゆふま山隱れし君を思ひかねつも

3476 宜、子等は吾に戀ふなも。立と月の、流なへ行けば、戀ふしかるなも

3471 一寸の間は寢てゞも居たいのに、夢に許りいとしい人が、氣懸りに見えて來通しに來て、私をひどく泣かせることだ。

3472 人妻だと言ふので、怎うして、それを觸つてはいけない、と言ふ理窟があらうか。若しそれが、ほんとうならば、隣りの著物をば借りて來て、著られない訣だ。

3473 故郷の上野の國の佐野山に打つ斧の音が、遠く聞えるやうに、遠くに居るのだが、今夜幻に、いとしい人が現れたことだ。あれは、私と共寢をしたいと思ふ心が、やつて來たのであらう。

3474 庭に植ゑた竹の本迄、ゆすつてひどく鳴るやうに、家の人人を騷ぎ立てゝ出かけて行つたら、何方の方を向いて、いとしい人が、私を慕うて嘆くことだらう。

3475 焦れ乍らも、辛抱して居ようと思ふけれど、ゆふま山に隱れて行つて了うたあの方を思うて、辛抱しかねることだ。

3476 ほんにいとしい人は、私に焦れて居ることだらう。やつて來る歳月が、どん〳〵流れて行くので、定めて私のことが、戀しくあるだらうよ。

3477 東路の田子ノ呼坂越えて行なば、吾は
戀ひむな。後は逢ひぬとも

3478 とほしとふ古奈の白峰に逢ほしだ
も、逢はのへしだも、汝にこそよさ
れ

3479 あかみ山草根刈り退け、逢はすがへ、
爭ふ妹しあやにかなしも

3480 大君の命畏み、かなし妹が手枕離れ、
役立ち來ぬかも

3481 あり衣のさゑ〳〵しづみ、家の妹に
物言はず來にて、思ひ苦しも（人麻
呂集に見える。）

3482 韓衣襴のうちがへ、あはねども、け
しき心を吾が思はなくに

3483 晝解けば解けなへ紐の、我が夫なに

3477 東國地方の田子の呼坂を越えて、向うへ行つたら、譬ひ後は、廻り會ふとしても、お顏も見られないから、私は焦れることであらうよ。

3478 古奈の白峰に生えて居る羊齒ではないが、逢ふしだ、即逢ふ時も、逢はないで居る時も、決して二心はない。一途に、あなたに心を寄せて居るのだ。

3479 あかみ山の草の根を刈り擴げ乍ら、逢うて置き乍ら、人には逢はない、と言ひ爭うて居るいとしい人が、無上に可愛ゆいことだ。

3480 天皇陛下の御命令を畏つて、可愛ゆい妻の手枕から離れて、賦役にとり立てられて、來たことだ。

3481 さや〳〵と騷ぐ心をおし鎭めて、家に居る妻に、物も言はないでやつて來て、思ひなやんで居ることだ。

3482 韓衣の襴のうちあはせではないが、合はずには居るけれど、變つた心持ちをば、私が思うたこともありません。

3483 晝解かうとすると、解けない所の上裳の紐が、今不圖解け

相寄るとかも。夜解けやする

3484 麻苧らを桶にふすさに績まずとも、
明日來せざめや。いざせ。小床に

3485 劍大刀身に副ふ妹をとり見かね、哭
をぞ泣きつる。手兒にあらなくに

3486 かなし妹を、弓束並べ捲き、もころ
男の事とし言はゞ、いやかたましに

3487 梓弓末に玉纏きかくすゝぞ、寢なく
なりにし。おくをかぬ〳〵

3488 生ふしもと木の下山のましばにも、
告らぬ妹が名、象に出でむかも

3489 梓弓由良の山邊の繁かくに、妹ろを
立てゝ、さ寢處拂ふも

3490 梓弓末はより寢む。まさかこそ、人
目を多み、汝を半に措けれ（人麻呂

3484 そんなに、麻の緒をば桶にたつぷりと績まないでも、明日が來んではあるまいし。さあ來なさい。寢床へ。

3485 自分の身に離さずに居た、いとしい人と別れて、旅に出たので、その人の世話も出來ないで、ひどく泣いて居ることだ。自分は赤ん坊でもないのに。

3486 弓束を捲き並べて獲物を爭ふ、同じ位の男どうしのことであるならば、どんなにしても勝つて見せうのに、いとしい人には敵はない。

3487 梓弓の尖に、玉を捲き著けて、末を大事に斯うし乍ら、とうとう、共寢をしなくなつて了うたことだ。將來のことを思ひ〳〵して居て。

3488 木の下山の柴ではないが、ちよくらちよいとには、人に言はなかつた、いとしい人の名前が、占ひの方に、怎うやら出さうである。

3489 （自分は、山邊に山稼ぎに來て居る。嬉しくもいとしい人が、尋ねて來てくれた。）此由良の山の邊の木の繁みにいとしい人をば立たせて、寢處となるべき場處を掃うて、寢る用意をすることだ。

3490 將來は互ひに、寄り合うて寢よう。今でこそ人目がうるさいので、お前を中途はんぱに、うつちやつて居るけれど。

た。いとしいお方に、寄り逢ふと言ふのか。それで、今夜解けるのだらう。

集に見える。）

3491 柳こそ伐れば生えすれ。世の人の戀ひに死なむを、如何にせよとぞ

3492 小山田の池の堤に插す柳。なりもならずも、汝と二人はも

3493 晩早も汝をこそ待ため。むかつ峰の椎の小枝の、あひは違はじ

3494 子持山若楓のもみづ迄、寢もと吾は思ふ。汝は何か思ふ

3495 いはほろの岨の若松、限りとや、君が來まさぬ。うらもとなくも

3496 橘樹のこばの童女が思ふらむ、心うつくし。いで、我は行かな

3497 川上の根白高萱。あやに〳〵、さ寢さ寢てこそ、言に出にしか

3491 柳は成程、切つたら跡から生えるが、さういふ訣に行かない、此世界の人間の私が、死なうとして居るのをばうつちやつて、如何せよと言ふのですか。

3492 山の田の池の堤に插した柳が、根がつくやうに、果して二人の仲が、成就するかしないか、何方にしても、お前と二人は仲好くして居よう。

3493 譬ひ早からうが遲からうが、何時迄もお前を待つて居よう。向ひの山に生えて居る椎の小枝ではないが、逢ふと約束した時を、間違へはすまいよ。

3494 子持山の若い楓が、黄葉する時分迄も、寢て居よう、と自分は思ふが、お前は如何思ふか。

3495 伊香保の山の崖に生えた若松原で、茲からは山の限と言ふやうに、二人の間も此限りと言ふのか。其で心細くも、あの方がやつて入らつしやらないのであらうか。

3496 橘樹の郡のこばの村の小娘が、自分を思うて居る心が、可愛ゆい。どりや私は、逢ひに出かけませう。

3497 川の上の、根の眞白に顯れた、丈高い萱のやうに、幾夜も幾夜も共寢をして、其上でなら、つひうつかりと人に洩しても遺憾はない。其上にしたいものだ。

3498 海原の根柔小菅。數多あれば、君は忘らす。我忘るれや

3499 岡に寄せ我が苅る萱の、さね萱の、誠、なごやは寢ろと言なかも

3500 紫は根をかも終ふる。人の子のうら悲しけを。寢を終へなくに

3501 安房峰ろの峯ろ田に生はるたはみづら。引かばぬる〳〵、吾を言な絶え

3502 吾が目妻。人はさくれど、朝顔の年さへ夥多吾はさかるがへ

3503 あせか潟。潮干のゆたに思へれば、尤が花の色に出めやも

3504 春べ咲く藤の末葉の、うら安にさ寢る夜ぞなき。子ろをし思へば

3505 うち日さつ宮ノ瀬川の貌花の、戀ひて

3498 海原の里の、根の柔かな小菅の床のやうに、柔かな處女が澤山あるので、あなたは、わたしを忘れて入らつしやるが、私は、怎うして忘れませうか。

3499 岡に寄せ掛けて、自分が刈つて居る萱の、其さね萱のやうに、眞實底から、柔かにうちとけて、寢ようと言はないことだ。

3500 紫草は根をばちぎつて、きれさせることだ。處が、私は他所の娘の可愛ゆい人を、共に寢ることを遂げないで居ることだ。

3501 安房の山の山田に生えて居る、たはみづらではないが、いとしい人も、私が袖を引いたら、ずる〳〵と寄つて來て、私に便りをきらしてくれな。

3502 吾が愛する妻よ。おまへはどうしてかう、つれなくしてゐるのか。あの時、譬ひ人は二人の間を切り離しても、そんなに長く、何年も〳〵長い間、私は、引きさかれて居ませうか。

3503 あなたは、顏色に現して人に悟られたのを咎めなさるが、あせか潟の潮が引いたやうに、落ちついて、よい加減に思ふことなら、怎うして、顏色に現す、と言ふことをしませうものか。

3504 春に咲く藤の末葉ではないが、うら安即、心おちついて、寢る晩がないことよ。いとしい人を思うて居る爲に。

3505 旅に居る人は、此宮の瀨川の貌花のやうに、わたしをば焦

か寢らむ。きぞも、今夜も

3506 新室の鑿時に至れば、はだ薄ほに出し君が、見えぬ此頃

3507 谷狹み、峯に延ひたるたま蔓。たえむの心わが思はなくに

3508 しはつくの三浦崎なるねつこ草。會ひ見ずあらば、吾戀ひめやも

3509 栲衾白山風の寢なへども、子ろが襲衣のあろこそ、吉しも

3510 み空行く雲にもがもな。今日行きて、妹に言問ひ、明日歸り來む

3511 青峰ろにたなびく雲の、いさよひにものをぞ思ふ。年の此頃

3512 一嶺ろに言はるものから、青峰ろにいさよふ雲の、よそり妻はも

れて、寢て居ることであらう。昨日の晩も、今晩も。

3506 新しく建てた室で作る鑿の、飼養時分になつたので、私が意中を表した御方が、會ひに來て下さらない此頃よ。

3507 谷が狹いので、峯迄擴つて上つて居る、玉蔓ではないが、切れようと思ふ心持ちは、少しも思うて居ない。

3508 しはつくの里の三浦崎に生えて居る、ねつこ草ではないが、懷しい人をば、互ひに逢はないで居たなら、こんなに焦れはすまいものを。

3509 白山嵐が烈しう吹いて、寢ないで居るけれども、さう言ふ寒い晩に、いとしい人が、上に引つかけて居た、記念の著物のあるのが、嬉しいことだ。

3510 空を行く雲にでもなりたいものだ。さうすれば、今日出かけて行つて、いとしい人に話しをして、明日は、早く歸つて來よう。

3511 青峯山に長く懸つて居る雲ではないが、ぐづ〳〵として、物を思うて居ることだ。一年此方と言ふものは。

3512 私といとしい人の間を、山で譬へれば、一つの山だと言はれて居るのに、肝心の人は、青峯山に懸つて居る雲のやうに、とりとめたこともなく、浮ついて居る。我が思ひを寄せて居る妻よ。

3513 夕されば み山をさらぬ布雲の、あぜか、絶えむと言ひし子ろはも

3514 高き峰に雲のつくのす、我さへに、君につきなゝ。高嶺と思ひて

3515 我が面の忘れむ時は、國放り嶺に立つ雲を見つゝ、偲ばせ

3516 豐島の嶺は下雲あらなふ。上の嶺にたなびく雲を見つゝ偲ばも

3517 白雲の絶えにし妹を。あぜゝろと、心に乘りて甚かなしけ

3518 岩の上にいがゝる雲の、かぬまづく人ぞおたばふ。いざ、寢しめとら

3519 汝が母に罵られ、吾は行く。青雲の出で來。我妹子。あひ見て行かむ

3520 面形の忘れむしだは、大野ろに棚引

3513 日暮れになると、山にぢつとして居る布のやうな雲ではないが、何故か急に、切れようと言ひ出した、いとしい人よ。

3514 高い山に雲が近寄つて行くやうに、私迄も、あの方に近附いて參りませう。君を高い嶺と思うて。

3515 私の俤が忘れ相になつた時は、國遠く放れて、嶺に立つ雲を見乍ら、私のことを思ひ出して下さい。

3516 豐島の山には、山の下に懸る雲が御座いません。さすれば、上の嶺に懸つて居る雲を見乍ら、いとしい人に焦れて居よう。(わたしの處へはよりつきなさらぬが、せめてよそへ行かれるのを見てゞも。)

3517 と切れた人だのに、怎うしようと言ふのか。心にのしかゝつて、こんなにひどくかあゆいのだらう。

3518 岩の上に立ち懸つて居た雲が、かぬまの里の方へ下つて近づいて行く、卽かぬまづくではないが、かしましく噂を立てた人の語が、穩やかになつた。さあ一處に寢なさいといふことよ。

3519 お前のお母さんにわめかれて、私は、歸つて行くのだ。いとしい人よ。表へ出て來てくれ。顏を見合うて歸つて行かう。

3520 顏の形が忘れさうになつた時分には、大野と言ふ處の野原

く雲を見つゝ偲ばむ

3521 鴉とふ大をそ鳥の、まさでにも、來まさぬ君を、ころくとぞ鳴く

3522 昨日こそは子ろとさ寢しか。雲の上ゆ鳴き行く鶴の、間遠く思ほゆ

3523 坂越えて、阿倍の田の面に居る鶴の、ともしき君は、明日さへもがも

3524 蒋薦の節の間近くて、會はなへば、沖つま鴨の嘆きぞ、我がする

3525 みくゞ野に鴨の這ほのす、子ろが上に言おろばへて、いまだ寢なふも

3526 沼二つ通は鳥が巣。我が心二行くなもと、汝よ。思はりそね

3527 沖に棲も雄鴨のもころ、やさか鳥息づく妹を、おきて來ぬかも

に、棚びいて居る雲を見乍ら、お前のことを思ひ出して居よう。

3521 鴉と言ふ大嘘つきの鳥奴が、お出でにならないお方だのに、まざ〳〵として、ころく〳〵、即近い中に來ると鳴いて、欺すことだ。

3522 つひ昨日、可愛ゆい人と共に寢て居たことだ。それに今日は、まるで雲の上をば鳴いて行く鶴のやうに、遠く間が隔つたやうに思はれる。

3523 阿倍の里の田の上へ、毎日々々坂を越えてやつて來て、下りて居る鶴の立派なやうに、立派なあのお方は、明日にでも、出て入らつしやればよいが。

3524 譬へて言はうなら、二人は、蒋薦の節の間が迫つて居るやうに、間近く住んで居乍ら、遠い沖に居るまがもの樣な心持ちで、溜め息をついて、私は居る。

3525 みくゞ野で、鴨が地下を這ひ歩いて、よろばうて居るやうに、いとしい人のことについて、評判が、やかましく罵ばれて居乍ら、まだ共に寢ないことだ。

3526 沼二つの間を通ふ鳥の巣が、彼方此方にあるやうに、兩方へ心をかけて居るもの、とあなたよ。思うて居て下さるな。

3527 沖に棲んで居る雄鴨と同じく、ひどく溜め息をついて歎いて居る、戀しい人を、捨てゝおいて、やつて來たことだ。

3528 水鳥の立たむよそひに、妹のらに、物言はず來にて、思ひかねつも

3529 鳥屋ノ野に兎ねらはり、をさ〳〵も寢なへ子ゆゑに、母にころばえ

3530 さ雄鹿の伏すや叢見えずとも、子ろがかな戸よ行かくし吉しも

3531 妹をこそ會ひ見に來しか。眉引きの横山邊ろの鹿なす面貌

3532 春の野に草食む黑馬の、口止まず吾を偲ぶらむ家の子ろはも

3533 人の子のかなしけしだは、濱洲鳥あなゆむ駒の、をしけくもなし

3534 赤駒が門出をしつゝ、出でがてにせしを、見立てし家の子らはも

3535 己が夫をおほにな思ひそ。庭に立ち

3528 出發の用意に紛れて、いとしい人に物も言はないでやつて來て、戀しさに辛抱出來ないことだ。

3529 鳥屋の野で、兎を覗うて居るのではないが、をさ〳〵、果敢々々しうも共寢もしない人だのに、其爲に、お母さんに叱られることだ。

3530 鹿の寢て居る叢が見つからない樣に、いとしい人の姿が見えないでも、可愛ゆい人の表を通つて行くのは、よいものだ。

3531 いとしい人をば、あひゞきにこそ來たのだ。處がおまへは、まるで來る道の邊の、横山にゐる鹿の樣に、がつくりとして、物を思うた顏つきをしてゐる。

3532 春の野で、草を食べて居る黑馬ではないが、一寸の間も休まずに、私のことを焦れ續けて、口に言うてるだらう、其故郷の可愛ゆい人よ。

3533 外の娘が可愛ゆくてならん時には、足を引きずつて居る馬が、大事にも思はずに通ふことだ。

3534 赤駒が、出發をし乍ら、出にくがつて居たのを見送つて居た、故郷のいとしい人よ。

3535 わたしの待つた馬よ。その自身の大事の夫を、好い加減に思うて居るな、馬よ。さうしてお前が、私の家に來た爲、

笑ますがゝらに、こまに饗ふものを

3536 赤駒を打ちてさを引き、心引き、如何なる夫なか。我家來むと言ふ

異本の歌

うませ越し、麥食む駒の、はつ〳〵に新肌觸れし子ろしかなしも

3538 廣橋を馬越しかねて、心のみ妹がりやりて、吾は玆にして

3539 崩岸の上に駒を繫ぎて、危かど、人妻子ろをいきに我がする

3540 さわたりの手兒にい行き逢ひ、赤駒が足搔きを速み、言問はず來ぬ

3541 崩岸から駒の行このす危はども、人妻子ろをまゆかせらふも

3542 小石に駒を馳させて、心いたみ、我

にこ〳〵として庭に立つて入らつしやるから、お前にさへ、御馳走をするのだよ。おまへの連れて來た方がいとしいので。

3536 赤駒を打つて尾を引くやうに、心を引いて見る爲に、私の家へ來ようと言ふのは、一體あなたは、怎うしたお方だ。

〔異本の歌〕ませ垣越しに、生えた麥を食べる馬の口が、屆く其少し許り、初めて肌を觸れ合うた人が、可愛ゆくてならぬことだ。

3538 廣い飛び石の石橋を、馬では越えかねて、心許りを、いとしい人の所へやつて、私は玆で、物を思うて居る。

3539 崩れ岸の上に、馬を繫いだ樣に、危く怖しいことだけれど、人の妻なるいとしい人を、命懸けで思ひ込んで居ることだ。

3540 さわたりの里の娘に行き合うて居ながら、乘つて居た赤駒の、足並みが速かつた爲に、語もかけないでやつて來た。

3541 崩岸の邊をば、乘つた駒が歩くやうに、危く、怖いことだけれど、人妻である娘を、ゆかしく思ふことだ。

3542 小石道を蹈んで、馬を馳せさせて、馬が辛がるやうに、何

が思ふ妹が家のあたりかも

3543 むろがやの都留ノ堤の、なりぬがに、子ろは言へども、いまだ寢なくに

3544 飛鳥川下濁れるを知らずして、夫なと二人、さ寢て悔しも

3545 飛鳥川堰くと知りせば、夥多夜も率寢て來ましを。堰くと知りせば

3546 青柳の發らろ川門に、汝を待つと、清水は掬まず、立處馴らすも

3547 あぢの棲む須沙ノ入江の隱り沼の、あな、息づかし。見ず久にして

3548 鳴瀨ろにこつのよすなす、いとのきてかなしけ夫ろに、人さへ寄すも

3549 たゆひ潟汐滿ち渡る。何處從かも、かなしき夫ろが、我家通はむ

時も通りぬけるのに、辛く思ふいとしい人の住ひの邊よ。

3543 長く工事のかゝつた、都留の堤防ではないが、二人の間も成り立ちさうに、相手の娘が、そぶり・語つきをするが、まだ共寢をしないことだ。

3544 此飛鳥川は、表面は澄んで底は濁つて居るのに、それを知らないで、心を許して、あの人と共寢したのが、殘念なことだ。

3545 飛鳥川の川の瀨を堰くやうに、二人の間を、親達が堰いて邪魔をする、と言ふことが訣つて居たら、あの時分幾晩も、共寢をして來たものを、あゝ此樣に、堰くと知つて居たなら。

3546 青々とした柳の萌え出して居る川の渡り場で、お前さんを待たうとして、掬みに來た清水も掬まずに、ぢつと立つて居る場所に、何時迄も居ることだ。

3547 あぢ鴨がぢつと休んで居る、あの須沙の入り江にある隱れ沼ではないが、いとしい人を長く見ないで、あゝ又、溜め息つかれることだ。

3548 鳴瀨の里の邊に、木屑が寄せて來るやうに、非常に可愛ゆいお方だ。外の人迄が、心を寄せて居ることだ。

3549 たゆひ潟には、潮が一杯さして來て居る。可愛ゆいお方は、どの邊を通つて、私の處へ通うて入らつしやるだらうか。

3550 おしていなと、寢はつがねど、波の
秀のいたぶらしもよ。昨日一人寢て

3551 味釜の潟に開く波。ひらせにも、紐
解くものか。かなしけを置きて

3552 松个浦にさわゐうらだち、ま人言思
ほすなもろ。吾が思ほのすも

3553 味釜のかけの水門に、入る潮の、こ
て立す來もか。入りて寢まくも

3554 妹が寢る床の邊に、岩潛る水にもが
もよ。入りて寢まくも

3555 まくらがの古河の渡りの柄樶の、音
高しもな。寢なへ子ゆゑに

3556 潮舟の起かれば悲し。さ寢つれば人
言繁し。などもかも爲む

3557 なやましけ人妻かもよ。漕ぐ舟の忘

3550 可愛ゆい人と、ずつと毎晩續けて共寢して居ると言ふ訣ではないが、昨日は一人寢て、それで心が動搖して、堪らないことであつた。

3551 あぢかまの潟で碎ける波が、平靜なやうに、平氣で可愛ゆい人を打つちやつて置いて、外他で、紐を解いて居ることよ。

3552 松が浦に潮流が群立つて來るやうに、人の言をうるさく、私が思つて居るやうに、あなたも思うて入らつしやるでせう。

3553 あぢかまのかけの川口で、引き潮で騷ぐやうに、人の噂が立つて來ることだ。いとしい人の家に、這入つて寢ようにも。

3554 いとしい人の寢て居る床の邊に、岩の間を潛つて行く、水にでもなれゝばよい。さうすれば、もぐりこんで寢ようものを。其床の中に。

3555 まくらがの古河の村の渡り場の、長柄の櫂の音がするやうに、人の評判が高いことだ。共寢せない娘であるのに、其人の爲に。

3556 海に漕ぎ出す舟が、陸上に置かれてゐるやうに、所在なく起きて居るには、可愛いゝ心が餘つて居るが、扨寢たとなると、人の評判がうるさい。私は一體怎うすればよいのか。

3557 心をかき亂す、他人の妻だことよ。忘れはしないで、彌、

れはせなゝ。彌思ひ益すに

3558 逢はずして行かば惜しけむ。まくら
がの古河漕ぐ舟に、君も逢はぬかも

3559 大舟を舳ゆも艫ゆも固めてし、古曾
の里人顯さめかも

3560 眞金吹く丹生のまそほの色に出て、
言はなくのみぞ。我が戀ふらくは

3561 かなと田を荒掻き眞弓、ひかとれば、
雨を待とのす、君をら待とも

3562 荒磯曲に生ふる玉藻の、うち靡き獨
りや寢らむ。吾を待ちかねて

3563 ひた潟の磯の若布の、立ち亂え、吾
をか待つなも。昨日も、今宵も

3564 こすげろの、浦吹く風の、あどすゝ
か、かなしけ子ろを、思ひ過さむ

3558 逢はないで出發して行つたら、無殘念なことであらう。此まくらがの里の古河の港を、漕ぎ出す舟に乘つて、あなたが逢ひに來て下さればよいが。

3559 大船をば舳にも艫にも、用心を堅固にして居るやうに、あの古曾の里人に、口固めをして置いたが、あの人はうつかり、人にさらけ出して了ふかも知れないよ。

3560 鐵を吹き出す、にふ山の赤土ではないが、顏色に表しては、言はない許りである、私の焦れて居る心は。

3561 門口の田を荒がきして、眞弓の地均を引きずつて行つた跡で、雨を待つやうに、いとしいお方を待つことだ。

3562 荒い岩濱の入り込みに生えて居る藻のやうに、なよ〳〵とし乍ら、獨り今頃は、寢てるだらうよ。私を待ちあぐんで。

3563 ひた潟の岩濱の若芽のやうに、心亂れて私をば待つて居るだらうよ。今頃は、何時も〳〵。

3564 こすげの浦を吹き過ぎる風のやうに、怎うしながら居れば、可愛ゆい人を、心から取り去つて忘れることが出來るだらうか。

3565 かの子ろと寢ずやなりなむ。はだ薄
うら野の山に、月片よるも

3566 吾妹子に我が戀ひ死なば、添はへか
も神に負せむ。心知らずて

防人の歌

3567 置きて行かば、妹はまがなし。持ち
て行く梓の弓の、弓束にもがも

3568 後れ居て戀ひば苦しも。朝狩りの君
が弓にもならましものを

右二首、問答。

3569 防人に立ちし朝明のかな戸出に、手
離れ惜しみ、泣きし子らはも

3570 葦の葉に夕霧立ちて、鴨が音の寒き
夕し、汝をば偲ばむ

3571 己妻を人の里に置き、おぼゝしく見

3565 あの娘と、もう共寢をすることは出來なくなるだらう。今夜も逢はない中に、あのうら野の山に月がさしかゝつて、傾いて居ることだ。

3566 いとしい人に私が焦れて死んだら、彼此と言ふ風に、神樣に、嫁けて了ふだらうよ。自分の心が訣らないで。

3567 打つちやつて行くには、あの人は可愛ゆうてならない。携へ行くことの出來る、梓弓の弓束でゞもあれば、よいのに。

3568 取り殘されて居て焦れて居るのは、苦しいことでせうよ。よく朝狩りに出掛けなさつた、あなたの弓にもなりたいものです。

3569 防人に出發した、あの夜明け方の門出に、別れを惜しんで、泣いた人が思はれる。

3570 葦の葉に、日暮れの霧が立つて、鴨の聲が冷く聞えて來る晩は、遠くお前のことを思うて居よう。

3571 自分の女房を、馴染みのない人里に殘して置いて、氣がゝ

つゝぞ來つる。此道の間

譬喩の歌

3572 何思へか、あぢくま山の楢葉の、ふ
ふまる時に風吹かずかも

＊

3573 足引きの山蘰かげ、ましばにも獲難
きかげを、おきや枯さむ

＊

3574 雄里なる花橘を引き攀ぢて、折らむ
とすれど、うら若みこそ

3575 宮白の岡邊に立てるかほが花、な咲
き出でそね。こめて偲ばむ

3576 苗代の小水葱が花を衣に摺り、褻る
るまに〳〵、あぜかゝなしけ

りに振り返つて見乍ら、今迄の里程をやつて來たことだ。

3572 何と思つて居るのか、あぢくま山の楢葉が、まだ捲いた儘で、開かないで居る間に、風が吹かなかつたのだ。（戀ひ仲の成就した後に、人を恐れて、女が男を斷つたのに、與へた歌。）

3573 山の木や草で拵へた蘰にする材料のかげよ。其容易に手に入れにくいかげをば、取つても見ないで、はふつて置いて、枯す心になれようか。（此美しい女を、手に入れずに眺めて、むだにすることが出來ようか。）

3574 雄里にある花橘を、枝引き寄せて折らうとはしてゐるが、若いので、躊躇して居ることだ。（幼い娘に、思ひかけた男の歌。）

3575 宮白の岡の邊に、立つて居るかほ花よ。堪らないで、表に笑ひ（咲き）出すな。心に隱して慕うて居よう。（互ひに二人、祕密にして居よう。）

3576 苗代に生えた、水葱の花をば、衣に摺りつけて置いて見たが、それが、よれ〳〵になつて來るやうに、二人が馴染みになつて來るにつれて、何故か愈、可愛ゆくなつたことだらう。

挽歌

3577 かなし妹を、いづち行かめと、山菅(スゲ)
のそがひに寝しく、今し悔(クヤ)しも

右、百十首、地名の訣らぬ歌である。

3577 いとしい人だのに、ある晩、何處へ行けるものか、と背中合せに寝て居たことが、今では、殘念なことだ。

萬葉集　卷第十五

遣新羅使等の歌

□天平八年の遣新羅使等の人達が、別れを悲しんだ歌。
並びに海上又は處々で誦したといふ歌（百四十五首）

3578 武庫(ムコ)ノ浦の入り江の洲(ス)鳥、はぐゝもる
君を離れて、戀ひに死ぬべし

3579 大船に、母乘るものにあらませば、
はぐゝみもちて、行かましものを

3580 君が行く海邊の宿に霧立たば、吾(ア)が

3578 （使人が母に贈つた歌。）此武庫の浦の入り込みの、沖の洲に寝て居る鳥ではないが、此迄大事に、羽の中へ包むやうにして、育てられた、あなたの手を離れては、焦れ死にゝ死ぬであらう。

3579 大舟には、母が乘つて行けるものであつたら、羽の中にくくめるやうに、大事にしながら行かうのに。（その母の歌。）

3580 あなたが入らつしやる海邊の泊り場所で、霧が立つやうな

立ち嘆く息と知りませ

3581 秋さらばあひ見むものを。何しかも、霧に立つべく嘆きしまさむ

3582 大船を、荒海に出だし在す君。つゝむことなく早歸りませ

3583 まさきくて、妹が齋はゞ、沖つ波千重に立つとも、障りあらめやも

3584 別れなばうら悲しけむ。吾が衣下にを著ませ。直接に逢ふ迄に

3585 吾妹子が、下にを著よと、贈りたる衣の紐を、吾解かめやも

3586 我が故に、思ひな痩せそ。秋風の吹かむ其月、逢はむもの故

3587 栲衾、新羅へいます君が面を、今日か明日かと、齋ひて待たむ

事があつたら、それは此方に居る私が、立ち出て溜め息吐いて居る、其溜め息が、霧とかゝつたんだと考へて下さい。

3581 秋になつたら、逢へるだらうのに、何もそんなに、霧と立つ程に、溜め息をお吐きになることがありませうか。

3582 大舟を、荒海に出して入らつしやるあなたよ。何の障りもなしに、早くお歸り下さいませ。

3583 お前さんが、慎んで神を祀つて祈つてくれたら、大洋の波が、幾重にも〳〵立つても無事であつて、どうして災難があらうか。

3584 別れて行つたら、嘸悲しいことでありませう。どうか、さういふ時の心を慰める爲に、今度直に逢へる迄の間、私の著物を、下に重ねて居て下さい。

3585 いとしい人が、下に重ねて著て居よ、と贈つてくれた著物の紐をば、どうして、私が解かうか。

3586 私の爲に、思ひ焦れて痩せないやうにしてくれ。秋風の吹き出す其月、即、七月にもなつたら、再逢ふのだのに。

3587 新羅へ入らつしやるあなたのお顔を見ることは、今日明日の中早く、と慎んで神樣を祭り乍ら、待つて居ませう。

3588 はろ〳〵に思ほゆるかも。然れども、けしき心を吾が思はなくに

右十一首、贈答の歌である。

3589 夕されば、蜩來鳴く生駒山。越えてぞ我が來る。妹が面を欲り

右一首、秦ノ間滿の歌。

3590 妹に逢はずあらば術なみ、岩根蹈む生駒ノ山を、越えてぞ我が來る

3591 妹とありし時はあれども、別れては、衣手寒きものにぞありける

3592 海原に浮き寢せむ夜は、沖つ風甚くな吹きそ、妹も有らなくに

3593 大伴の三津に舟乘り、漕ぎ出でゝ、何れの島にいほりせむ。我

右三首、出發の間際になつて作つ

3588 考へれば、ずつと遠いことに思はれる。併し乍ら、安心してくれ。變つた心持ちを、私は待たないから。

3589 日暮れになると、蜩が來て鳴いて居る生駒山をば、越え乍ら私が行くことだ。いとしい人の顔が見たさに。（此は、難波で出發の日を待つて居る間に、家に歸つた時に、歌うたものである。）

3590 此後、長くいとしい人に逢はなければ、遣る瀬ないことであらうと思うて、生駒山を越えて、逢ひにやつて行くことだ。（此は、暫らく奈良の自宅に歸つて居た間に、思ひを敍べたものである。作者は、前の間滿と、同人か別人か訣らない。）

3591 いとしい人と一處に居た時分は、さうではなかつたが、別れるといふと、袖に冷え〳〵と、風の障るのを感じることである。

3592 大海の中に、舟を浮けて寢ることもあらうが、さういふ晩には、沖で吹いて居る風が、甚く吹いてくれるな。只獨り、いとしい人も居ない、寂しい旅なのだから。

3593 大伴の郷の三津の港で乘船して、漕ぎ出した後は、何處の島で、自分は、假り小屋を建てゝ泊ることであらうか。

たものである。

3594 潮待つとありける舟を。知らずして、悔しく、妹に別れ來にけり

3595 朝發き漕ぎ出て來れば、武庫ノ浦の潮干の潟に鶴が聲すも

3596 吾妹子がかたみに見むを。印南都麻、白波高み外にかも見む

3597 わたつみの沖つ白波立ち來らし。海人處女等も島隱る見ゆ

3598 ぬば玉の夜は明けぬらし。玉ノ浦にあさりする鶴鳴き渡るなり

3599 月讀の光りを清み、神島の磯曲の浦ゆ、舟出す。我は

3600 離磯に立てる檉の木。うたがたも、久しき時を過ぎにけるかも

3594 出發に都合の好い潮がさして來るのを、待たうとして居た舟であつたのに、そんなことは知らないで乘つて了うて、殘念にも、いとしい人と別れてやつて來たことだ。（かういふとぼけ方は、萬葉歌人の常用手段ではあるが、其中で此歌などは、秀れたものである。佳作。）

3595 朝の出發に、舟を漕ぎ出してやつて來た所が、武庫の浦の潮の引いて居る遠淺の海に、鶴の聲がして居ることだ。

3596 此邊は、いなみの里の都麻といふ處の邊だ、と思ふが、せめて都に殘しておいた、いとしい人の身代りに、妻といふ名の、そのいなみ都麻の地を見たく思ふのだが、波が高さに、寄つて見ることも出來ず、遠方から見て通らねばならないか。

3597 大海の沖の波が、立つて來るに違ひない。海には、馴れた海人の娘さへも、島蔭に這入り込んで隱れて居る。それが見える。

3598 夜は明けたに違ひない。玉の浦で餌を探して居る鶴が、鳴き乍ら、ずつと通つて行くことである。

3599 お月樣の光りが爽やかなので、夜の明けぬ中に、神島の岩濱の入り込みの海岸から、舟出を私はすることだ。

3600 （此邊は、鞆の浦なのだらうか。）あの離れて突き出した岩の上に立つて居る、檉の木が古いやうに、考へて見れば、長い間を、どうなりかうなり過し來たことだ。

3601 暫しくも、獨りあり得るものにあれや、島の檉の樹離りてあるらむ

右八首、出發の後、海上で作つた歌。

處々で興に乘じて吟じた古歌

3602 青丹よし奈良ノ都に、棚引ける天の白雲、見れど飽かぬかも（雲）

3603 青柳の枝伐り下し、齋種蒔き、ゆゝしき君に戀ひ渡るかも

3604 妹が袖、別れて久になりぬれど、一日も、妹を忘れて思へや

3605 わたつ海の、海に出でたる飾磨川。絶えむ日にこそ、吾が戀ひ止まめ

右三首、戀ひ歌。

3601 ほんの一寸の間でも、只獨りでをれるものなのか。其でありの島の檉の樹が、離れて立つて居るのであらう。（あゝいふ風になりたい。）

3602 奈良の都に懸つて居る空の白雲は、幾ら見ても見飽きのせぬことだ。（此を雲が、奈良の都の方へ棚引いて居ると解して、都戀しさを述べたのである。）

3603 苗代の祭りに、青柳の枝を切つて田に下して立てゝ、其上に、清らかな種を蒔き、慎んで祭りをするやうに、尊い身分のお方に、焦れ續けて居ることだ。

3604 いとしい人と袂を分つてから、長くはなつて居るけれど、一日だつて、いとしい人を思ひ忘れてをらうか。

3605 海に流れ込んで、沖の方迄水脈を引いて來て居る、此飾磨川が、水が絶れて了ふ時があつたら、其時こそ、私の焦れる心も止まるかも知れんが、そんな氣遣ひはない。

3606 玉藻刈る物集女を過ぎて、夏草の野島个崎に廬す。われは

3607 白栲の藤江ノ浦に漁する海人とや見らむ。旅行くわれを

3608 天離る鄙の長路を戀ひ來れば、明石の門より家の邊見ゆ

3609 武庫ノ海のにはよくあらし。漁する海人の釣り舟、波の上ゆ見ゆ

3610 英虞ノ浦に舟乘りすらむ處女等が、赤裳の裾に、潮滿つらむか

七夕の歌

3611 大舟にまかぢしゞ貫き、海原を漕ぎ出て渡る、月人男

備後ノ國御調郡長井ノ浦に寄

3606 玉藻を刈つて居る物集女の邊を通り過ぎて、野島个崎に、私は、小屋掛けをして泊ることだ。

3607 藤江の浦で漁をして居る海人だ、と容子知らない人は、海を越えて居る自分を、海人と見てるも知れぬ。此旅をして居る自分をば。

3608 都に遠い地方の、長い道程を焦れて來た所が、明石海峽から、大和の家の方が見えることだ。

3609 武庫の海の海水の面が、漕ぐのに、適當になつたのに違ひない。漁をばして居る海人の釣り舟が、波の上に見えて居る。

3610 英虞の浦に、今頃乘船して居る筈の、娘達の赤い上裳の裾に、潮がさして來て居ることであらうよ。

3611 大舟に一杯に楫を插し込んで、海上をば漕ぎ出して渡つて行く、月の中に住んで居る男よ。

港した晩に作つた歌。三首

3612 あをによし奈良ノ都に行く人もがも。草枕旅行く舟の泊り告げむに』

右一首は、大判官壬生ノ使主宇太麻呂の作つたもの。

3613 海原を、八十島隱り來ぬれども、奈良ノ都は忘れかねつも

3614 歸るさに、妹に見せむに、わたつみの沖つ白玉、ひりひて行かな

安藝の風早ノ浦に寄港した時の歌

3615 我が故に妹嘆くらし。風速ノ浦の沖邊に、霧棚引けり

3616 沖つ風甚く吹きせば、吾妹子が嘆きの霧に、飽かましものを

3612 誰か、奈良の都へ出かける人があれば好いが。自分等の旅に出て居る舟が、今泊つて居る場所をば、家人に告げようと思ふが。

3613 海上をば、澤山の島影を通つてやつて來たけれど、それに氣が紛れないで、奈良の都をば忘れないで居ることだ。

3614 いとしい人に見せる爲に、歸りしなには、海の沖の方にある白玉をば、拾うて行かうよ。

3615 私の爲に、戀しい人が溜め息を吐いてるに違ひない。風速の浦の沖の方に、霧がかゝつて居ることだ。

3616 沖の風が甚く吹いたら、霧が澤山立つだらうが、さうすれば、其いとしい人の溜め息から出來た、霧に滿足するだけでも、その霧を吸ひ込みたいものだ。

安藝ノ國長門島の磯邊に寄港した時の歌。五首

3617 岩走る激湍も轟に鳴く蟬の、聲をし聞けば都し思ほゆ

右一首、大石ノ蓑麻呂の歌である。

3618 山川の清き川瀬に遊べども、奈良の都は忘れかねつも

3619 磯の間ゆ、激つ山川絶えずあらば、又も逢ひ見む。秋かたまけて

3620 戀ひしげみ、慰めかねて、蜩の鳴く島陰にいほりするかも

3621 我命を長門ノ島の小松原、幾世を經てか、神さび渡る

長門の浦を出發して後、月を見て作つた歌。三首

3617 岩の上を激して流れる激湍が、ごうゞゝと鳴るやうに、鳴いて居る蟬の聲を聞くと、都のことが思はれる。

3618 山川の、さつぱりとした川の瀬で遊んでは居ても、奈良の都のことは、忘れられないことだ。

3619 岩の間を激して流れる、此山川の水が切れないやうに、命が切れないで居たら、秋にかけて、再互ひに逢うて眺めよう、山川の景色よ。

3620 餘り戀しさに、心がなだめられないので、今日の旅は止めて、蜩の鳴いて居る島の蔭に、小屋掛けをして泊り込んだことだ。

3621 自分の命に、あやかりたいと思ふ。長いと言ふ名の、長門島の松原よ。幾代たつたことか、こんなに迄神々しい迄に、段々、古びて來たのであらうか。

3622 月讀の光りを清み、夕凪ぎに、水手の聲呼び、浦曲漕ぐかも

3623 山の端に月傾けば、漁する海人の燈。沖になづさふ

3624 われのみや、夜舟は漕ぐと思へれば、沖邊の方に檝の音すなり

古い挽歌。並びに短歌

3625 夕されば、葦岸に騒ぎ、明け來れば、沖になづさふ鴨すらも、妻とたぐひて、吾が身には霜な降りそと、白栲の羽さし交へて、打ち拂ひ、さ寢とふものを。逝く水の歸らぬ如く、吹く風の見えぬが如く、後もなき世の人にして、別れにし妹が著せてし褻れ衣袖片敷きて、獨りかも寢む

3622 お月さんの光りが爽やかな爲、日暮れ方の海が風いで居る時分に、檝取り達が、大聲を上げ乍ら、浦の入り込みを沿うて漕いで居ることだ。

3623 山の端に月が這入りかけて傾いたので、漁りをして居る海人の火が、沖の方に、一處を離れずに動いて居ることだ。

3624 自分許り、夜舟をば漕いで居るのだらうか、と思うて居たら、沖の方に思ひがけなく、艪の音がしてゐることだ。（凡ての人が、輕々見過して居る單純な感情を、捨てないで居るのは、餘程近代的である。佳作。）

3625 日暮れになると、葦の生えた岸で鳴き騒ぎ、夜が明けて來ると、沖の方の波の間で、一つ處にぽか〳〵と浮いて居るあの鴨などでも、配偶と並んで居て、自分等の體には、霜よ降りかゝるなと言ふので、眞白な羽を互ひに交し合うて、拂ひ乍ら寢るといふことだのに。處が流れて行く水が歸つて來ないやうに、又吹いて居る風が目には見えないやうに、今あるかと思へば、直ぐ何の痕跡も止めないやうになつて了ふ、儚ない此世界の人間のことゝて、別れて了うたあのいとしい人の、著せてくれた、よれ〳〵になつた著物の袖をば、自分だけ獨りで敷いて、獨り寢ねばならぬか。

反歌

3626 鶴が鳴き、蘆岸をさして飛び渡る、あなたづゝし。獨りさ寢れば

物に寄せて思ひを陳べた歌。竝びに短歌。二首

3627 朝されば、妹が手に纏く鏡なす三津の濱びに、大舟にまかぢしゞぬき、唐國に渡り行かむと、只向ふ敏馬をさして潮待ちて、水脈引き行けば、沖邊には白波立ち、浦曲より漕ぎて渡れば、吾妹子に淡路ノ島は、夕されば雲居隱りぬ。さ夜更けて行方を知らに我が心明石ノ浦に舟止めて、浮き寢をしつゝ、わたつみの沖邊を見れば、漁する海人の處女は、小舟乘りつら

3626 鶴が鳴いて、葦の生えた海岸をさして、ずつと飛んで行く、それではないが、あゝ埒のあかぬことだ。獨り寢て居るといふことは。（此は、丹比ノ大夫某が、死んだ妻を傷んだ歌であるのを、生きて居る妻にも通ふ所から、誰かゞ歌うたのである。）

3627 朝になつたから、三津の濱邊で大きな櫂を一杯にさしこんで、韓國へ向うて行かうと、眞向うの敏馬の浦を目がけて、潮時を待ちうけて、沖の方では波が高いので、海岸をば水先の案内の舟を雇うて、その通りに舟を漕いで渡つて行くと、いとしい人に逢ふといふ淡路島は、日暮れになつたので、雲がかゝつて隱れて了うた。（さうかうする中に）、夜が更けて、方角が訣らないので、明石の浦で舟を止めて、水上に寢泊りをし乍ら、海の沖の方を見ると、漁をして居る海人の娘達は、小さな舟を乘り廻して、鈴形に竝んで浮いて居る。さうして、夜の引き明けの潮がさして來たので、葦の生えた海岸には、鶴がずつと鳴いて來る。舟出をしようと朝風いでゐる海面に、船頭も櫂取りも大聲を上げながら、急にも進まず、ぽか〳〵と浮いて行くと、家島は、雲と地との合ふ邊の水平線に見え出した。あの島へ行けば、自分の色々と思うて居る心持ちが、靜まるだらうと思

らに浮けり。曉の潮滿ち來れば、葦岸には鶴鳴き渡る。朝風ぎに舟出をせむと、舟人も水手も聲呼び、鳴鳥のなづさひ行けば、家島は雲居に見えぬ。我が思へる心なぐやと、早く來て見むと思ひて、大舟を漕ぎ我が行けば、沖つ波高く立ち來ぬ。外のみに見つゝ過ぎ行き、玉ノ浦に舟を留めて、濱びより浦磯を見つゝ泣く子なす哭のみし泣かゆ。わたつみの手纏きの玉を、家づとに妹にやらむと、拾ひとり、袖には入れて、返しやる使ひなければ、持てれどもしるしをなみと、玉置きつるかも

反歌

ひ、早く行つて見ようと思うて、乘つて居る大舟を、自分が漕がせて行くと、生憎沖の方の波が、高く立ちかゝつて來た。それで、爲方なく、遠方の方許りから眺めて通つて行つて、玉の浦で舟をばとめて、（海岸に上つて、小屋掛けをして泊つて）、その海岸から、浪の打つて居る砂濱を眺め乍ら、赤ん坊の樣に、甚く泣かずには居られない。（それで、心を慰める爲に）、わたつみの神が、手に纏きつけて居る所の尊い玉をば、家への土產にして、いとしい人にやりたい、と思うて拾ひとつて、袖には納めて居るものゝ、家迄送り返し遣す使ひのものもないので、持つて居ても、其甲斐がない、と玉をば打つちやつて、置いてゐることだ。

3628 玉ノ浦の沖つ白玉。ひりへれど、玉ぞ
置きつる。見る人をなみ

3629 秋さらば、我が舟はてむ。忘れ貝寄
せ來て置けれ。沖つ白波

周防ノ國玖珂郡鞠生ノ浦を通
つた時の歌。八首

3630 まかぢ貫き舟し行かずば、見れど飽
かぬまりふの浦に、宿りせましを

3631 何時しかも見むと思ひし粟島を、外
にや戀ひむ。行くよしをなみ

3632 大舟に杙柯ふり立てゝ、濱清きまり
ふの浦に宿りかせまし

3633 粟島の逢はじと思ふ妹にあれや、安
寢を寢ずて、我が戀ひ渡る

3634 筑紫路の可太ノ大島、暫しくも見ね

3628 玉の浦の方にある白玉をば、拾うて持つては居るけれど、その玉をば、さし置いて了うたことだ。それを見て、喜ぶ人がないので。

3629 秋が來たら、歸りに又、自分の舟は、玆に碇泊することにしよう。忘れ貝を、此濱に寄せて來て置いておくれ。

3630 海路を檝をさし下して、舟で行くのでなければ、幾ら見ても、見飽かない此鞠生の浦に、一泊しようものを。

3631 早く行つて見よう、と思うて居た粟島をば、遠く外から見てをらねばならんか。そこへ行く方法がないので。

3632 大舟に杙柯を立てゝ舫うて、濱景色のさつぱりとした、まりふの濱に、一泊をしようか知らん。

3633 粟島の名の通り、いとしい人に逢はれまい、と自分が思うて居るかして、熟睡もしないで、焦れ續けて居ることだ。

3634 筑紫へ行く路の方にある大島ではないが、暫くでも見ない

ば、戀しき妹を置きて來ぬ

3635 妹が家路近くありせば、見れど飽か
ぬ鞠生ノ浦を見せましものを

3636 家人は、歸り早來と、いはひ島齋ひ
待つらむ。旅行く我を

3637 草枕旅行く人をいはひ島。幾代經る
まで齋ひ來にけむ

大島の鳴門を通つて後、二
晩たつてから追つて作つた
歌

3638 是やこの、名に負ふ鳴門の渦潮に玉
藻苅るとふ海人處女ども

右、田邊ノ秋庭の歌

3639 波の上に浮き寢せし宵、あどもへか、
心かなしく夢に見えつる

で居る爲に、戀しうてならん、と思うて居るいとしい人を、殘してやつて來たことだ。

3635 いとしい人の家への距離が近いことであつたら、こんなに、見ても見飽かない、まりふの浦の景色をば見せようものを。

3636 家にをる人は、早く歸つて來い、といふ此いはひ島ではないが、いはひ卽、身を清めて、神を祀つて待つてゐるだらう。此旅を續けて行く自分を。

3637 此いはひ島よ。旅を續けて行く人を、幾代立つた今迄、昔から祝うて、神の守りを祈りつゝ、經て來たことであらう。それで、こんな名がついたのか。

3638 此があの鳴門の渦卷きの中で、玉藻を刈つて居るといふ名高い、海人の娘どもだつたのか。

3639 波の上で舟で寢た晩に、どうした訣だらうか、悲しい心持ちを起して、いとしい人が、夢に現れたことだ。

熊毛ノ浦に碇泊した夜、作つた歌。四首

3640 都邊に行かむ舟もが。苅薦の亂りて思ふ。言告げやらむ

右、羽栗ノ某の歌。

3641 曉の家戀しきに、浦曲より檝の音するは、海人處女かも

3642 沖邊より潮滿ち來らし。韓ノ浦に漁りする鶴、鳴きて騒ぎぬ

3643 沖邊より舟人上る。呼びよせて、いざ、告げやらむ。旅の宿りを

佐麿の海中で、思ひがけなく大風激浪に出會うて、一晩漂流した後に、幸に豐前ノ國下毛ノ郡分間ノ浦に著くこ

3640 都の方へ行く筈の、舟に出會へばよいが。私がこんなに、精神錯亂する迄に思うて居ることだ。あゝ其舟に言づけて、便りを言うてやらうと思ふ。

3641 夜明け方の家の戀しい時分に、海岸をば、檝の音がして通るのは、海人の娘であらうか。

3642 沖の方から、潮がさして來る容子だ。韓ノ浦に餌を探して居る鶴が、鳴いて騒いで居る。

3643 沖の方をば、船頭が都の方へ漕いで行く。どりや、あれを呼び近づけて、自分が今泊つて居る、旅の泊り場所をば、家に告げて遣らう。

とが出來たので、其苦しみを後から思ひ出して、作つた歌。八首

3644 大君の命畏み、大舟の引きのまにまに、宿りするかも

右一首、雪ノ宅麻呂の歌。

3645 我妹子は、早も來ぬかと待つらむを、沖にやすまむ。家つかずして

3646 浦曲より漕ぎ來し舟の、風速み、沖つみ浦に宿りするかも

3647 吾妹子が如何に思へか、ぬば玉の一夜も落ちず、夢にし見ゆる

3648 海原の沖邊に灯し、いさる火は、明してともせ。大和洲見む

3649 鴨じもの浮き寢をすれば、蜷のわた

3644 天皇陛下の御詔を畏つて、乘つて居る大舟の行くに任せて、行きあたりばつたり泊ることだ。（一見平凡な歌と見えるが、三句以下、殊に悲哀を含藏して居る。傑作。）

3645 いとしい人は、早く歸つて來てくれ、と待つて居るだらうのに、（暴風が漂流させるなら）少しでも、家の近い方に寄らないで、かうして、沖の方にぢつとしてをらねばならんか。

3646 海岸をば傳うて漕いでやつて來た舟だが、風の激しい爲に、沖の方の舟泊りで、宿りをすることだ。

3647 いとしい人が、どんなに迄、自分のことを思ひ焦れて居るからか、一晩の落ちもなく、夢に現れて來ることだ。

3648 海上の沖の方に、火を點して漁をして居る舟は、もつと明く、火を點してくれゝばよい。大和の國をば見ようと思ふから。

3649 鴨のやうに、舟の上で寢て居ると、眞黑な自分の髮に、露

か黒き髪に、露ぞ置きにける

3650 ひさかたの天照る月は見つれども、
我が思ふ妹に逢はぬ頃かも

3651 ぬば玉の夜渡る月は、早も出でぬかも。
海原の八十島の上ゆ、妹が邊見む』

筑紫館に著いて、遙かに本國を望んで、悲しんだ歌。

四首

3652 志珂の海人の、一日もおちず焼く鹽のからき戀ひをも、我はするかも

3653 志珂ノ浦に漁りする海人、家人の待ち戀ふらむに、明し釣る魚

*

3654 賀集江に鶴鳴き渡る。志珂ノ浦に、沖

3650 空に照つて居る月は、見て居るけれども、自分が焦れて居るいとしい人には、逢はないで居る此頃だ。

3651 夜の世界を運行する月は、早く出てくれゝばよいが。海上の澤山にある群島の邊から、いとしい人の住んで居る、國のあたりを眺めたいものだが。

3652 志珂島の海人が、一日のおちもなく燒いて取る鹽ではないが、辛い（苦しい）こがれ方をば、自分はすることだ。

3653 志珂の浦で漁をして居る海人。其人は家に居る妻などが、待ち焦れて居るだらうのに、早く歸ればよいと思ふが、自分等と違うて、自由に家に歸ることの出來る海人は、夜火を點して迄、魚釣りをして居ることだ。

3654 賀集の入り海に、鶴がずつと鳴いて行く。大方あの浦では、

つ白波立ち頻くらしも

3655 今よりは秋づきぬらし。足引きの山松陰に、蜩鳴きぬ

七夕に、天の川を仰いで、思ひを陳べた歌。三首

3656 秋萩に匂へる我が裳濡れぬとも、君が御舟の綱し取りてば

右、遣新羅大使阿倍ノ繼麻呂。

3657 年にありて、一夜、妹に逢ふ牽牛も、我にまさりて思ふらめやも

3658 夕月夜影立ちより合ひ、天の川漕ぐ舟人を見るが、ともしさ

海邊で、月を見て作つた歌。

九首

3659 秋風は日に日に吹きぬ。我妹子は、

沖からうつて來る波が、立ち續けて居るであらう。

3655 もう此から、秋になつて來たからに違ひない。山の松かげに蜩が鳴いて居る。

3656 あなたが乘つて入らつしやる御舟の、綱さへ手に取つて、引き寄せて居るのならば、譬ひ萩で色のついて居る、自分の上裳が濡れても、いとひませうか。（織女の心持ちを詠んだもの。）

3657 一年に於て、只一晩、いとしい人に出會ふ、と言ふあの男星なる牽牛も、私以上に物を思うて居るだらうか。そんなことはあるまい。

3658 夕月と姿を一處に現して、天の川を漕ぐ舟人なる、牽牛を見るのが、珍しくよいものだ。

3659 秋風は、一日々々と吹き募つて來て居る。いとしい人は自分をば、何時歸ることか、と身を謹み、神と祀つて、待ち

何時とか、我を齋ひ待つらむ

右、大使繼麻呂の次男。

3660 神さぶる荒津ノ崎によする波、間なくや、妹に戀ひ渡りなむ

右、土師ノ稻足。

3661 風のむたよせ來る波に、いさりする海人處女らが、裳の裾濡れぬ

3662 天の原ふり離け見れば、夜ぞ更けにける。よしゑやし、獨り寢る夜は明けば明けぬとも』

3663 わたつみの沖つ繩海苔。來る時と、妹が待つらむ月は、經につゝ

3664 志珂ノ浦にいざりする海人。明け來れば、浦曲漕ぐらし。檝の音聞ゆ

焦れて居るだらう。

3660 神々しい迄に、物古りた此荒津の崎に寄せ來る波のやうに、隙間なく、いとしい人に焦れ續けて居らねばならんか。

3661 風と一處に、うち寄せて來る浪の爲に、漁をして居る海人の娘の、上裳の裾が濡れたことだ。

3662 廣々とした空を、遥かに見やると、もう夜が更けたことだ。

檝よ、どうなりとなれ。獨り寢する夜は、明けるならば、明けてもかまはない。

3663 海の沖の方に生えて居る繩海苔ではないが、もう來（繰）る時分、といとしい人が待つて居る筈の、月日は段々、經つて行つて居ることだ。

3664 志珂ノ浦で漁をして居る海人が、其夜が明けて來た時分に、海岸の入り込みを漕いで來るに違ひない。艣の音が聞える。

3665 妹を思ひ、寢の寢らえぬに、明時の朝霧ごもり、雁がねぞ鳴く

3666 夕されば秋風寒し。我妹子が解き洗ひ衣、行きて早著む

3667 我が旅は久しくあらし。この吾が著る妹が衣の、垢づく見れば

筑前ノ國玉島ノ郡韓亭に著いて、三晩碇泊してゐた其頃、月の光りが皎々と遍く照して居たので、皆の人が、此ありさまを見て、感傷した心持ちを陳べた歌の中の六首

3668 大君の遠の御領土と思へれど、日長くしあれば、戀ひにけるかも

3665 いとしい人をば思うて、寢るにも寢られない時分に、夜の明け方の朝霧の中をば、雁が鳴いて行くことだ。

3666 日暮れになると、吹く秋風が寒いことだ。いとしい人が解いて洗うて、用意して置いてくれた著物を、早く行つて著たいものだ。（旅中の、簡易な生活を思はせる歌。佳作。）

3667 自分の旅行も、長くなつたに違ひない。私の著て居る、此、いとしい人のくれた、わたしの著てる下の著物が、垢づいたのを見ると。

3668 茲も天皇陛下の御治めになる遠方の御版圖だ、とは辨へては居るけれど、月日が長く立つたので、都をば焦れて居ることだ。

右、大使阿倍ノ繼麻呂の歌。

3669 旅にあれど、夜は火ともしをる我を、闇にや、妹が戀ひつゝあらむ

右、大判官壬生ノ宇太麻呂の歌。

3670 韓泊りの、この浦波の、立たぬ日はあれども、家に戀ひぬ日はなし

3671 ぬば玉の夜渡る月にあらませば、家なる妹に逢ひて來ましを

3672 久方の月は照りたり。暇なく、海人のいさりは、ともしあへり。見ゆ

3673 風吹けば沖つ白波畏みと、のこの泊りに、數多夜ぞ寢る

引津ノ泊に碇泊して、作つた歌。七首

3674 草枕旅を苦しみ、戀ひをれば、かや

3669 旅には出て居るが、夜になると、火を點して過して居る自分をば、いとしい人は、思ひ焦れて、心も暗くなる許りに、思うて居ることだらう。

3670 韓泊りなるこの浦の波が、立たぬ日はあつても、家をば焦れない日は、一日もない。

3671 自分が若し、夜の世界を運行する月であつたら、家にゐるいとしい人に、逢うて來ようのに。

3672 月は皎々として照つて居る。こんな時でも、休まないで、海人の漁をして居る火は、其月の光りに合せて、點して居る。其が見える。

3673 風が吹くので、立つて居る沖の波の恐しさに、のこの港で、幾晩も〳〵寢ることだ。

3674 旅を辛く思うて、家を焦れてをると、かやの山に、鹿が鳴

の山邊に、さ雄鹿鳴くも

3675 沖つ波高く立つ日にあへりきと、都の人は聞きてけむかも

右二首、大判官壬生ノ宇太麻呂。

3676 天飛ぶや雁を使ひに得てしがも。奈良ノ都に言告げやらむ

3677 秋の野を匂はす萩は咲けれども、見るしるしなし。旅にしあれば

3678 妹を思ひ、寢の寢らえぬに、秋の野にさ雄鹿鳴きぬ。妹思ひかねて

3679 大舟に眞楫しゞ貫き、時待つと、我は思へど、月ぞ經にける

3680 夜を長み、寢の寢らえぬに、足引きの山彦とよめ、さ雄鹿鳴くも

肥前ノ國松浦ノ郡狛島ノ亭に

いて居ることだ。

3675 都に居る愛する人は、沖の方へ波が高く立つ、恐しい日和に出くはした、ともう知らせを聞いたゞらう。さうして、心配しては居はすまいか。

3676 空を飛ぶ所の雁をば、使ひとして手に入れたいものだ。奈良の都へ、音信をしてやりたいと思ふ。

3677 秋の野をば、美しく見せる萩は咲いて居るが、自分は旅に居るので、見て居ても、そのかひがない。（此歌は、一見平凡ではあるが、所謂只事歌の優れたもので、却つて、興奮した感情を敍べたものよりは、優れて居る。佳作。）

3678 いとしい人を思うて、寢るにも寢られないで居る時分に、秋の野で鹿が鳴いて居る。此も妻を思うて、辛抱が出來ないで。

3679 大舟に楫を一杯さして潮時を待たう、と自分が思うて居るのだが、其中に、幾日も立つたことだ。

3680 夜が長いので、寢ようとしても寢られない時分に、木魂をば振動させて、鹿が鳴いて居ることだ。

泊つた夜、遠く立つ波を見て作つた歌。七首

3681 歸り來て見むと思ひし、我が宿の秋萩薄、散りにけむかも

右、秦ノ間麻呂の歌。

3682 天地の神を祈ひつゝ、我待たむ。早來ませ。君。待たば苦しも

右、或處女の作つたもの。

3683 君を思ひ、我が戀ひまくは、あら玉の立つ月毎に、避くる日もあらじ

3684 秋の夜を長みにかあらむ、何ぞこゝば、寢の寢らえぬも。獨り寢ればか

3685 帶媛御舟果てけむ、松浦ノ海。妹が待つべき月は、經につゝ

3686 旅なれば、思ひ絶えてもありつれど、

3681 歸つて來て、眺めようと豫期してゐた、自分の家の、萩や薄は、もう散つて了うたことだらう。

3682 天地間のあらゆる神を祈り乍ら、私はお待ち申して居ませう。早く歸つて下さいませ。待つて居るのは、苦しいでせうから。

3683 此から先、あなたに焦れて、私の思ふ心は、後から〳〵やつて來る。どの月にも、一日として除外して、思はないといふ日は、ありますまい。（此も同じ處女で、恐らくは、其地の遊女であらう。）

3684 秋の夜が、長いからであらうか。何故こんなに、寢るにも寢られないことであらう。獨り寢て居るからか知らん。

3685 昔神功皇后の御舟が到著したさうな、此松浦の海ではないが、いとしい人が、約束だから、もう歸つて來るだらう、と思つて居る筈の、月は段々、過ぎて行くことだ。

3686 此迄は、自分は旅に出て居るから、家のことは斷念して居

家なる妹し、思ひかなしも

3687 足引きの山飛び越ゆる雁がねは、都に行かば、妹に逢ひて來ね

壹岐ノ島に到著した處が、雪ノ宅滿が、思ひがけなく、鬼病で死んだので、或人の作つた歌。竝びに短歌。二首

3688 皇祖の遠の御領土と韓國に渡る我が夫は、家人の齋ひ待たねか。疊かも過しけむ。秋さらば歸りまさむと、たらちねの母にまをして、時も過ぎ、月も經ぬれば、今日か來む、明日かも來むと、家人は待ち戀ふらむに、遠の國未も著かず、大和をも遠く離

たが、家にゐるいとしい人のことを思ひ出して、悲しいことである。

3687 山を飛び越えて行く雁よ。お前は都へ行つたら、いとしい人に逢うて、容子を見て來てくれ。

3688 皇祖の時代から、遠方の領地として居られた土地だといふので、朝鮮に渡つて行く、我が敬ふ君は、家に殘した人が、愼んで、神を祀つて待つて居ないからか、それとも、其人の坐つてゐたあとの疊を、疎略にした爲か知らぬが、秋が來たら、歸つて入らつしやるだらう、とお母さんに言ひなされてから、時も過ぎ、月もたつたから、今日歸るだらうか、明日歸るだらうか、と家の人は待ち焦れて居るだらうのに、遠方の國へは、未著きもせず、大和さへも遠く隔つてゐて、此岩の荒々しく立つて居る島に、（何時迄も〳〵）止つて、出發しない、此人よ。

りて、岩がねの荒き島ねに宿りする
君

反歌

3689 石田野に宿りする君。家人の、いづらと、我を、問はゞ、如何に言はむ

3690 世の中は常かくのみと、別れぬる君にや、もとな、我が戀ひ行かむ

○

3691 天地とともにもがもと、思ひつゝありけむものを。はしけやし家を離れて、波の上ゆなづさひ來にて、あら玉の月日も來經ぬ。雁がねもつぎて來鳴けば、垂乳根の母も妻らも、朝露に裳の裾濡ち、夕霧に衣手濡れて、さきくしもあるらむ如く、出で見つ

3689 此壹岐の國の石田野の里で、何時迄も泊つて居るあなたよ。奈良へ歸つた後で、お家の方が、宅滿は何の邊に居るか、と私をあひてに問はれたら、何う申しませうか。

3690 世の中は、始終かうしたものに過ぎない、と思うて死に別れた君に、心もとなくも、私は焦れながら、行かねばならぬか。さりとては、なごり惜しい。

3691 生きて居た時は、天地と一處に、何時迄もありたいものだ、と思ひ乍らゐたであらうのに、大事の家を離れて、波の上をば、ゆら〳〵と浮いてやつて行つて、月日も澤山行き過ぎた。（其中に）秋になつて、雁も續け樣にやつて來て、鳴くやうになつたので、お母さんも、いとしい人も、朝露に上裳の裾を濡したり、日暮れの霧に、袖を濡したりして、門へ出て達者にでも居るやうに、思うて待つて居るだらうのに、人間世界の人の悲しみと言ふことには、同感せない人で、あなたがある故か、萩が散つて居る野にある、初尾花をば、假り小屋の屋根として、遠い國の秋の末の露が、

つ待つらむものを。世の中の人の嘆きは、あひ思はぬ君にあれやも、秋萩の散へる野邊の、初尾花假廬に葺きて、雲離れ遠き國邊の、露霜の寒き山邊に、宿りせるらむ

反歌

3692 はしけやし、妻も子供も、たか〴〵と待つらむ君や、島隱り寢る

3693 黃葉の散りなむ山に、宿り寢る君を待つらむ人の、かなしも

右一組みの長短歌は、葛井ノ子老の作つた挽歌である。

○

3694 わたつみのかしこき道を、安けくもなく惱み來て、今だにも凶なく行か

冷たく降る山の邊で、泊つて入らつしやるのは、世間の人の悲しみに、同感せられないからだらう。

3692 いとしい女房や、子どもが鶴首して待つて居る筈のあなたが、島陰に隱れて寢て居る、といふことがよく出來たものだ。

3693 もう追つゝけ黃葉の散る筈の山に、寢泊りをして居るあなたをば、歸るだらうか、と思うて待つて入らつしやる筈の人達が、お氣の毒なことだ。

3694 大洋の危險な航路を、落ちついた心持ちもなく、苦しみ乍らやつて來て、此から先だけでも、災なく行きたいものだ、と壹岐の國の海人がする、秀手の占ひによつて、龜の甲に

むと、壹岐の海人の秀手の占へを象焼きて、行かむとするに、夢の如、道のそら路に、別れする君

反歌

3695 昔より言ひける言の、韓國のからくも、玆に別れするかも

3696 新羅へか、家にか歸る。壹岐ノ島。行かむたどきも、思ひかねつも

右一組みの長短歌、六人部ノ鯖麻呂の作つた挽歌である。

對馬の淺茅ノ浦に碇泊した時、順風が吹かずに、五日滯留した間に、四邊の風物を見て、感傷して詠んだ歌。

三首

3697 百舟の果つる對馬の淺茅山。時雨の雨に、もみだひにけり

3698 天離る鄙にも、月は照れゝども、妹ぞ、遠くは別れ來にける

3699 秋されば置く露霜に、あへずして、都の山は色著きにけむ

竹敷ノ浦に碇泊した時、てんでに心持ちを陳べた歌。十八首

3700 足引きの山下光るもみぢ葉の、散りの紛ひは、今日にもあるかも

右、大使阿倍ノ繼麻呂。

3701 竹敷のもみぢを見れば、我妹子が待たむと言ひし時ぞ、來にける

右、副使大伴ノ三中。

占ひの象を焼き出して、それに由つて判斷して、出掛けようとした處が、まるで夢のやうに、大和へも、朝鮮へも著かぬ道の中途で、別れをして、去つた君よ。

3695 昔から、韓國へ渡るのは困難なことだ。それで、からくにといふのだ、と言うて居るが、其通り、苦しくも、玆で別れをすることだ。

3696 新羅へ行かうか。それとも一層、家へ歸らうか。どちらへ行かうか。處の名は、壹岐の島だが、何方へ行く目的も、考へつかないことだ。（傑作。）

3697 對馬の淺茅山は、時雨の爲に、紅葉したことだ。

3698 こんな地方の邊鄙な處にも、月は照しては居るが、妹に、遠くも別れて來たことだ。

3699 秋が來たので、降る冷たい水霜に辛抱出來ないで、都の山はもう、色著いて居ることであらう。

3700 山の裾が光る迄、色著いた紅葉が、目もまぎらはしい迄に、趣味深く散る一等よい日は、今日だらう。

3701 竹敷の地の紅葉を見ると、あゝもう、いとしい人が、紅葉の頃まで、待つて居ようと言うた、其時がやつて來たことだ。

3702 竹敷ノ浦曲のもみぢ。我行きて歸り來る迄、散りこすな。ゆめ
右、大判官壬生ノ宇太麻呂。

3703 竹敷ノ上方山は、呉藍の八入の色に、なりにけるかも
右、少判官大藏ノ麻呂。

3704 もみぢ葉の散らむ山べゆ漕ぐ舟の、にほひに愛でゝ、出でゝ來にけり

3705 竹敷の玉藻靡かし、漕ぎ出なむ君が御舟を、何時とか待たむ
右二首、對馬ノ處女玉槻。

3706 玉敷ける清き汀を、潮滿てば、飽かず、我行く。歸るさに見む
右、大使阿倍ノ繼麻呂。

3707 秋山のもみぢをかざし、我がをれば、

3702 竹敷の浦の入り込みに、照つて居る黄葉よ。自分が朝鮮へ行つて、歸つて來る迄、氣をつけて、どうぞ散つてくれるな。

3703 竹敷の港の上方山は、紅で幾度も染め上げたやうな、眞赤な色になつたことだ。

3704 紅葉した葉の散る山の傍をば、漕いで居る舟のやうに、私は、此一座の美しい御客子に感心して、わざ〳〵やつて參りました。（此は、竹敷の遊女が、宴席で歌うたもので、元來舟が、山の匂ひにめでゝ出て來た、といふ歌であつたのを、かう取り做して、歌うたものと見える。）

3705 竹敷の港の玉藻をば、兩方に靡かせ押し分けて、もう近々漕ぎ出て入らつしやる筈の、あなたの御舟が、又お寄りになるのは、何時と思うて、待つて居ませうか。

3706 玉を敷きつめた、さつぱりとした波うち際だのに、見飽かないで、潮がさして來たので、自分は出かけるが、歸りしなには、又見よう。

3707 秋山の紅葉を頭に插して、自分が遊んで居た所が、まだ滿

浦潮滿ち來。いまだ飽かなくに
右、副使大伴ノ三中。

3708 もの思ふと人には見えじ。下紐の下ゆ戀ふるに、月ぞ經にける
右、大使阿倍ノ繼麻呂。

3709 家づとに貝をひりふと、沖べより寄せ來る波に、衣手濡れぬ

3710 潮干なば、またも我來む。いざ行かむ。沖つ潮騷高く立ち來ぬ

3711 我が袖は、袂通りて濡れぬとも、戀ひ忘れ貝。取らずば、行かじ

3712 ぬば玉の妹が乾すべくあらなくに、我が衣手を、濡れて如何にせも

3713 もみぢ葉は今は移ろふ。吾妹子が、待たむと言ひし時の經行けば

足し切らない中に、もう浦の潮が滿ちて來た。

3708 物思ひをする、と人には見られまい。心の底から焦れることに、幾月も立つたから、嘸、衰へたことであらう。

3709 家への土産に、貝を拾はうとして、沖の方から寄せ來る波の爲に、袖が濡れたことだ。

3710 潮が引いたら、又此濱へやつて來よう。さあ、歸らう。沖の潮流が、高く立つて來た。

3711 自分の袖は、袂迄通つて、濡れてもかまはない。焦れる心を、忘れ去ることの出來る忘れ貝を、取らないでは、行くまい。

3712 旅のことだから、いとしい人が干してくれさうにもないのに、こんなに濡れては、自分の袖をばどうしようか。

3713 紅葉も、もう色が褪せて行く。いとしい人が、それ迄待つて居よう、と約束した時が、たつて行くので。

3714 秋されば戀しみ、妹を、夢にだに久しく見むを。明けにけるかも

3715 獨りのみ著ぬる衣の紐解かば、誰かも結はむ。家遠くして

3716 天雲のたゆたひ來れば、長月の紅葉の山も、うつろひにけり

3717 旅にても、凶なく早來と、吾妹子が結びし紐は、褻れにけるかも

歸航の道すがら、播磨ノ國家島に著いた時の歌。五首

3718 家島は名にこそありけれ。海原を我が戀ひ來つる妹も、あらなくに

3719 草枕旅に久しくあらめやと、妹に言ひしを。年の經ぬらく

3720 吾妹子を行きて早見む。淡路島雲居

3714 約束の秋が來たので、戀しさに、せめて夢にでも、いとしい人を、ゆつくり見たいのに、夜が明けたことだ。

3715 獨り許りで、著て居る著物の紐を解いたなら、こんなに家遠くにをるのだから、誰が結んでくれようか。

3716 ゆら〳〵と漂ひ乍らやつて來た處が、此處の秋の末の紅葉した山も、色が褪せて居ることだ。

3717 旅の中でも、災のないやうに、といとしい人が結んでくれた紐は、もうよれ〳〵になつて、汚れたことだ。

3718 家島といふのは、ほんの名前だけであつた。自分が、海上をば焦れてやつて來た、いとしい人も、あないことだ。

3719 心配するな。そんなに長く旅にゐるものか、といとしい人に言うたのに、一年も立つたことだ。

3720 出掛けて行つて、早くいとしい人を見たいものだ。淡路島

に見えぬ。家つくらしも

3721 ぬば玉の夜あかしも、舟は漕ぎ行かな。三津の濱松待ち戀ひぬらむ

3722 大伴の三津ノ泊りに舟はてゝ、立田ノ山を、いつか越え行かむ

□中臣ノ宅守と、狹野ノ茅上ノ處女とが贈答した歌

3723 足引きの山路越えむとする君を、心に持ちて、安けくもなし

右は、中臣ノ宅守が、狹野ノ處女と重婚して、越前に流された時の歌。

3724 君が行く道の長道を繰りたゝね、燒きほろぼさむ天の火もがも

3725 我が夫子が、けだし退らば、白栲の袖を振らさね。見つゝ忍ばむ

が、天の果てに見え出した。家が近づいて來たに違ひない。

3721 夜通しに漕いで、明ける迄、舟をやつて行かう。難波の三津の濱松ではないが、家では待ち焦れて居るだらう。（長い悲しい航路の終りに近く、焦慮の見える佳作。）

3722 大伴の里の三津の舟泊りに、舟が到著して、立田山を何時になれば、越えて行くことだらう。

3723 山路を越えて、遠方へ行かうとせられる、いとしいお方を、心中に持つて思うて居るので、ゆつたりした心持ちもせない。（表現法が奇拔だ。傑作。）

3724 此から、いとしい方が入らつしやる、道の遠い距離を手繰り寄せ疊み重ねて、燒いてなくして終ふことの出來る、天の火が欲しいものだ。（さうしたら、越前と都と、遠い距離もなくなるだらう。烈しい情熱で、かよわい女の身に、神憑りしたやうな歌である。傑作。）

3725 若しも、あなたがどうしても行かなければならないので、都をお下りになるやうなら、せめて、袖を振つて下さい。それを見乍ら、お慕ひ申してをりませう。

3726 此頃は戀ひつゝもあらむ。玉櫛笥あけて復ちより、術なかるべし

右四首、處女が別れ際に作つた歌。

3727 ちりひぢの數にもあらぬ我故に、思ひわぶらむ妹が、かなしさ

3728 あをによし奈良の大路は行きよけど、此山道は、行きあしかりけり

3729 うるはしと我が思ふ妹を、思ひつゝ行けばか、もとな、行き惡しかるらむ

3730 かしこみと宣らずありしを。み越路のたむけに立ちて、妹が名告りつ

右四首、出發して後に、中臣ノ宅守が作つた歌。

3731 思ふゑに逢ふものならば、暫しくも

3726 この中は焦れてもをられようが、公然と、もう再より合ふと言ふことは、とても、其でだでがなからうと思はれます。

3727 塵か泥のやうな、數の中にも這入らない、身分のやうなものだのに、その爲に、焦れて悲觀して入らつしやる、いとしい人のかあゆいことよ。

3728 奈良の大道は、歩きよいけれど、今かゝつて居る此山道は、歩きにくいことだ。

3729 自分がかあゆく思うて居るいとしい人に、焦れ乍ら道を行くからか、其でこんなに心細く、行き難くあるのだらう。

3730 いとしい人の名を言ふのは、畏しいことだ、と此迄は人に言はないで居たが、堪らなくなつて、越の國地方へ越える山の峠に立つて、いとしい人の名を口に出した。（此は、東歌にもあつたやうに、思うて居る事を、峠の神に懺悔しなければ、通れないと考へてゐた信仰を、下に思はねばならん。）

3731 焦れて居るからと言ふので、逢へるものであつたら、こん

妹が面かれて、我あらめやも

3732 西さす晝は物思ひ、ぬば玉の夜はすがらに、哭のみし泣かゆ

3733 吾妹子がかたみの衣なかりせば、何物持てか、命續がまし

3734 遠き山。關も越え來ぬ。今更に、逢ふべきよしのなきが寂しさ

3735 思はずもまことあり得むや。さ寢る夜の夢にも、妹が見えざらなくに

3736 遠くあれば、一日一夜も思はずて、あるらむものと思ほしめすな

3737 人よりは、妹ぞも惡しき。戀ひもなくあらましものを。思はしめつゝ

3738 思ひつゝ寢ればか、もとな、ぬば玉の一夜もおちず、夢にし見ゆる

なに迄焦れて居るのだから、一寸の間でも、いとしい人の顏を見ないでゐる筈がないのだが。

3732 晝は一日中、物を思うてゐ、夜は又夜で、夜通し、泣くまいと思うても、泣くばかりである。

3733 いとしい人が、自分の身代りにくれた衣がなかつたら、どんなものに依つて、此迄心を慰めて、自分の命を、續いで來たらうか。

3734 遠い山は勿論、其山にある關所すら、越えてやつて來た。かうなつた上は、再、逢ふ手段のないのが、情ないことだ。

3735 實際思はないでゐられようか。寢る晩の夢にも、いとしい人が現れない、といふことがないのだもの。

3736 遠くに居るから、僅か一日一夜でも、あなたのことを、思はないで居るかも知れないことだ、と思うて下さるな。

3737 誰が惡い、彼が惡いと言うても、外の誰よりも、一等おまへさんが、わるい。焦れもしないでゐたい、と思ふのに、思はせ〳〵なさるから。

3738 自分が焦れ乍ら、寢るからか知らないが、一晩の落ちもなく、心細く、いとしい人が、夢に現れて來ることだ。

3739 かくばかり戀ひむと、豫ねて知らませば妹をば見ずぞ、あるべくありける

3740 天地の神なきものにあらばこそ、吾が思ふ妹に逢はず、死にせめ

3741 命をし、またくしあらば、あり衣のありて後にも、逢はざらめやも

3742 逢はむ日を、其日と知らず、常闇に、いづれの日迄、我戀ひをらむ

3743 旅と言へば、言にぞ易き。すくなくも、妹に戀ひつゝ、すべなけなくに

3744 我妹子を戀ふるに、我はたまきはる短き命も、惜しけくもなし

3745 命あらば逢ふこともあらむ。我が故

3739 こんなに迄焦れることゝ、前から訣つて居たなら、いとしい人を見ないでゐたら、よかつたが。

3740 天地間に充ちてゐられる神が、入らつしやらないものであつたなら、それは成程、いとしい人に逢はないで、死ぬといふこともあらうが、神樣が入らつしやるから、逢はないで、死ぬる氣遣ひはない。(佳作。)

3741 命さへ滿足でゐたなら、かうした(つらい事の)末にも、いとしい人に、逢はない氣遣ひがあらうか。

3742 將來逢ふことの出來る日を、何時幾日とも訣らないで、お先眞暗に、何時の日迄、かうして焦れて居なければならぬか。

3743 旅と一口に言うて了へば、語の上では、たやすいことだ。併し自分は、旅に出てゐるので、いとしい人に焦れ〳〵て、並み大抵の遣る瀬なさではないのだ。

3744 いとしい人に焦れて居るので、自分は短いこんな命などは、大事とも思はない。

3745 命があつたら、逢ふこともありませう。此からはふつゝりと、思ふことをせずに居て下さい。命さへ此儘續いて行つ

に、はたな思ひそ。命だに經ば

3746 人の植うる田は植ゑまさず、今更に、國わかれして、あれは如何にせむ

3747 我が宿の松の葉見つゝ、我待たむ。早歸りませ。戀ひ死なぬとに

3748 他國は住みあしとぞいふ。速けく早歸りませ。戀ひ死なぬとに

3749 他國に君を在せて、いつ迄か、我が戀ひをらむ。人の知らなく

3750 天地のそこひのうらに、我が如く、君に戀ふらむ人は、さね、あらじ

3751 白栲の我が下衣失はず、持てれ。我が夫子。直接に逢ふ迄に

3752 春の日のうらがなしきに、おくれゐて君に戀ひつゝ、うつしけめやも

たら、又逢へませう。(意表に出た歌。繰り返しが、きはめてよく利いてゐる。傑作。)

3746 人々の植ゑて爲事とする、田をも植ゑないで、其儘遠い旅にお出かけになつたら、此からといふものは、遠く國に別れてをつて、私はどうしませうか。

3747 私の屋敷の松葉を眺め乍ら、せめて待ちつける、といふ緣起を祝うて、待つてをりませう。私が焦れ死なぬやうに、早くお歸りなさいませ。

3748 他國は、住みにくいと言ふことです。早く、お歸りなさいませ。私が、焦れ死なぬやうに。

3749 他の國に、いとしいお方を行かせておいて、何時迄、私が焦れてをらねばならないでせうか。逢ふ時も訣らないで。

3750 此天地の末の末の方にも、私のやうに、あなたに焦れて居る人は、實際ありは致しますまい。(傑作。)

3751 白栲で拵へた私の下衣を、失はずに持つて居て下さい。ぢかに逢へる迄の間。いとしいお方よ。

3752 何となく悲しい春の天氣に、後に殘つて居て、いとしいお方に焦れ乍ら、どうして、正氣を持つて居ることが出來ませうか。

3753 逢はむ日のかたみにせよと、嫋女の
思ひ亂りて、縫へる衣ぞ

右九首、茅上ノ處女の歌。

3754 過所なしに、關飛び越ゆる霍公鳥。
我にもがもや、止まず通はむ

3755 うるはしと我が思ふ妹を。山川を中
にへなりて、安けくもなし

3756 向ひ居て、一日も落ちず見しかども、
いとはぬ妹を。月渡る迄

3757 我が身こそ、關山越えて玆にあれど、
心は妹によりにしものを

3758 さす竹の大宮人は、今さへや、人な
ぶりのみ、このみたるらむ

3759 立ちかへり哭けども、我は效果なみ、
思ひわぶれて、寢る夜しぞ多き

3753 逢ふ日迄の、身代りとしてゐて下さい、と弱々しい女が、煩悶し乍ら縫うた著物が、是です。

3754 關所切手なしに、關所を飛び越えて行く、あの霍公鳥が、自分でゞもあつてくれたら、度々とぎれることなしに、いとしい人の處に行つて逢はうのに。

3755 可愛いと思うて居るいとしい人だのに、山や川をば中に置いて、隔つてをるので、落ち著いた心持ちもない。

3756 向ひ合せに坐つて居て、一日の落ちもなく、逢うて居たが、それでも、飽くことのなかつた、いとしい人をば、一月になる迄、見ないで居ることだ。

3757 自分のからだこそは、尤、關所のある、愛發山を越して來て、玆にをるだらうけれども、心だけは、いとしい人によりかゝつて居るのだが、どうして、逢へないことだらう。

3758 宮仕へをして居る人たちは、まだ今でも、人弄りをして遊ぶことを、悅んで居ることだらう。定めし自分等のことを、嘲弄して居るだらう。

3759 繰り返し〳〵泣いても、その甲斐がないので、悲觀し乍ら、寢て了ふ晩が多いことだ。

3760 さ寢る夜は多くあれども、物思はず
安く寢る夜は、さね、なきものを

3761 世の中の常の理、かくさまになり來
にけらし。末の種から

3762 吾妹子に逢坂山を越えて來て、泣き
つゝをれど、逢ふよしもなし

3763 旅と言へば、言にぞやすき。すべも
なく苦しき旅も、子らにまさめやも

3764 山川を中にへなりて遠くとも、心を
近く思ほせ。吾妹

3765 まそ鏡かけて偲べと、まつりだすか
たみの物を、人にしめすな

3766 うるはしと思ひし思はゞ、下紐に結
ひつけ持ちて、止まず偲ばせ

右、十三首、中臣ノ宅守の歌。

3760 寢る晩は、澤山あるが、何も氣に懸らずに、落ちついて寢る晩は、實際ないことだのに。

3761 世間の動かない道理で、かういふ風になつて來たことに違ひない。自分のやつた、因緣の果ての結果の程だのに、其爲に嘆くことはあるまい。

3762 いとしい人に逢ふといふ、逢坂山をば越えて來たので、幾ら泣き〳〵して居ても、逢ふ訣はない。

3763 一口に、旅といふと、語の上では、簡單ではあるが、遣る瀨なく辛い此旅の心持ちも、いとしい人の思ひに、優ることは出來ようか。

3764 山や川を中にして、遠く隔つて居ても、心だけは、近くに寄つて居るやうに、思うて下さい。いとしい人よ。

3765 心に思ひ浮べて、私のことをば思うて居て下さいといふ心持ちで、使ひにさし上げさせまする、此私の身代りの品物を、人には見せて下さるな。

3766 私のことを、いとしいと思うてさへ居て下されば、此さし上げる品物を、下紐に結びつけて置いて、始終私のことを、思ひ出して居て下さい。

3767 魂は、朝夕に魂觸れど、我が胸いたし。戀ひの繁きに

3768 このごろは君を思ふと、術もなき戀ひのみしつゝ、哭のみしぞ泣く

3769 ぬば玉の夜見し君を、明くる朝逢はずまにして、今ぞ悔しき

3770 味眞野に宿れる君が、歸り來む時の迎へを、何時とか待たむ

3771 宮人の安眠も寢ずて、今日々々と待つらむものを。見えぬ君かも

3772 歸りける人來れりと言ひしかば、ほとほと死にき。君かと思ひて

3773 君がむた行かましものを。おなじこと。後れてをれど、よきこともなし

3774 我が夫子が歸り來まさむ時の爲、命

3767 魂だけは、朝でも晩でも、始終近しう、あなたと行き逢うて居ますが、甚く焦れる爲に、私の胸は、痛いことであります。

3768 近來はあなたを焦れるとて、遣る瀨ない焦れ方許りして、泣きに泣いて居ます。

3769 夜お逢ひ申したあなたを、其明けの朝に逢はないで居たことが、今になつて、殘念に思はれます。

3770 遠い越前の味眞の原に泊つて入らつしやる、あなたが歸つてお出でになる時分の、都からの御迎へを、私が何時と思うて、待ち設けて居ようか。

3771 あなたの御存じの宮仕へして居る人が、夜よくも寢ないで、今日か〳〵と待つて居られるのでせうのに、お見えにならんあなたですこと。(此は宅守に、自分の外に、愛して居る女があらう。その女が待つて居るだらう、と戯れ氣味に言ひやつたのだ。)

3772 遠方から歸つて來た人が、やつて來た、と戯れに言うたので、びつくりして危く死ぬ處であつた。あなたがお歸りになつたかと思うて。

3773 あなたと一處に行つたらよかつたですのに、後に殘つてをつても同じことで、別に變つたよいこともなく、厭なことばかりです。

3774 あなたが歸つて入らつしやいます其時の爲に、命をとり止

殘さむ。忘れ給ふな

右八首、茅上ノ處女の歌。

3775 あら玉の年の緒長く逢はざれど、異しき心を、我が思はなくに

3776 今日もかも、都なりせば、見まく欲り、西の御厩の外に立てらまし

右二首、宅守の歌。

3777 昨日今日、君に逢はずて、するすべのたどきを知らに、哭のみしぞ泣く

3778 白栲の吾が衣手を取り持ちて、齋へ。我が夫子。直接に逢ふ迄に

右二首、茅上ノ處女の歌。

3779 我が宿の花橘は、徒らに散りか過ぐらむ。見る人なしに

3780 戀ひ死なば、戀ひも死ねとや。霍公

めておきませうから、忘れて下さるな。(男性的な技巧と、情熱とを持つた傑作。)

3775 歳月の長さは、成程長く逢はないで居るけれど、變つた心持ちをば、私は思うたことはない。

3776 今日らあたりは、都にゐたら、逢ひたさに、何時も會ふ場所にして居た、あの右馬寮の門の外で、立つて居る事に違ひない。

3777 此頃は、あなたに逢はないで居るので、どうしてよいか、その目的さへも立たないで、泣いて居る許りです。

3778 此白栲の私の著物の袖をば、持つて居て大事にして居て下さい。ぢかに逢ふ事の出來る迄の間。あなたよ。

3779 自分の屋敷の橘の花は、見る人がないのに、無駄に散つて了うて居るだらうか。

3780 霍公鳥の聲を聞くと、焦れる心が深くなるのだが、一體、焦れ死ぬなら勝手に死ね、と思うて居るのか、こんなに物

鳥。物思ふ時に、來鳴きとよむる

3781 旅にして物思ふ時に、霍公鳥もとな
莫鳴きそ。吾が戀ひまさる

3782 雨籠り物思ふ時に、霍公鳥。我が住
む里に、來鳴きとよもす

3783 旅にして妹に戀ふれば、霍公鳥。我
が住む里に、此從鳴き渡る

3784 心なき鳥にぞありける。霍公鳥。物
思ふ時に、鳴くべきものか

3785 霍公鳥。間暫しおけ。汝が鳴けば、
吾が思ふ心いたもすべなし

右七首、宅守が、花鳥に寄せて思ひを陳べた歌。

思ひして居る時分に、やつて來て、あたり響かせて鳴いて居ることだ。

3781 旅に出て居て、物案じをして居る時分に、霍公鳥よ。そんなに心細く鳴いてくれるな。自分の焦れる心が、彌、甚くなるから。

3782 雨で引き籠つて、物案じをして居る時分に、時鳥が、自分の住んで居る邊にやつて來て、邊を響かせて鳴くことだ。

3783 旅に出て、いとしい人に焦れて居ると、霍公鳥が、自分の住んで居る里へ來て、自分の家の邊をば、鳴いて通ることだ。

3784 思ひやりのない鳥だこと。霍公鳥と言ふやつは。人が物案じをして居る時分に、鳴ける筈ではないのに、鳴くことよ。

3785 子規よ。そんなに鳴き續けてくれるな。暫らくは間を置いて鳴いてくれ。貴樣が鳴くと、自分が物案じをする心が、ひどく遣る瀬ないのだ。

萬葉集　卷第十六

由緒ある歌。竝びに雜の歌

□昔處女があつた。名を櫻兒と言うた。其娘を妻にしようと競爭した二人の男があつたが、その命懸けの覺悟で競ふのを見た娘は、一人の女が、二軒の家の嫁となつた例はない。それに此頃の模樣では、とても二人が心から融け合ふといふこ

とはない。妾さへ死なば、二人の敵意も、永久に消え失せるだらうと考へて、林の中に入りこんで、樹に下つて縊れ死んだ。乃で二人の男は、泣く音も出ない程に悲しんで、血の涙を零し乍ら、めい〳〵其心持ちを陳べて作つた歌。二首

3786 春さらば、かざしにせむと我が思ひし、櫻の花は、散りにけるかも

3787 妹が名にかけたる櫻。花咲かば、常にや戀ひむ。彌年のはに

□茲に又、かう言ふ傳説がある。昔大和に、三人の男が

3786 春になつたら頭飾りにしよう、と思うて居た櫻の花は、散つて了うたことだ。(自分の物としよう、と思つて居た櫻ノ兒は、とう〳〵死んで了うた。)

3787 いとしい人の名前に、名づけてあつた櫻の花が、年々に此後も咲くだらうが、其花が咲く毎に、何時も彌思ひ出して、焦れることであらう。

あつた。其が一人の娘を妻にしよう、と競爭したので、娘が歎いて言ふには、儚い女の體は、露のやうに脆いものだ。それに、三人の立派な男の心は石の様に堅い。死ぬるより思案がない、と考へつき、とう〳〵池に身を投げて死んだ。男達はあまりの悲しさに、めい〳〵其心持ちを陳べて作つた歌。三首

3788 耳成ノ池し怨し。吾妹子が來つゝ潛かば、水は干なゝむ

3789 足引きの山蔓ノ子。今日行くと、我し

3788 耳成の池が怨しい。いとしい人が其所へ行つて、潛らうとしたら、水が引いてくれゝば好かつたのに。

3789 山蔓と言ふ名の戀ひ人に、今日後を追うて逢ひに行く、と

告げせば、歸り來ましを

3790 足引きの山蔓ノ兒。今日の如、いづらの隈を見つゝ來にけむ

□昔、年とつた男が居た。其商賣から名づけて、竹取の翁と言うた。此老人が、三月の或日丘に登つて、景色を見晴して居たが、思ひがけなく、其野で吸ひ物を煮て居る九人の娘に出會うた。其容子のよいこと、美しいこと、類がない。其に見恍れて居ると、娘達が老人を呼んで、「伯父さん、よく入らつしやいましたね。此火

3790 自分が知らせたら、逢ひに戻つてくれゝば好いのに。（此堤に出ても、其姿も見えない。）

あの山蔓ノ兒は、自分が今日、此池の堤を歩き乍ら、何處から投身したか探して居るやうに、どの入り込みの邊を、探し乍らやつて來たのだらうか。

を吹いて頂戴」と賴んだので、老人は諾々と言ひ乍ら、懼々と其席の上に上つた。暫らくすると、娘達が笑を含み乍ら、こんな老人を呼んだのは誰だ、と互ひに戲れに咎め合うたので、竹取の翁、此は申し訣のないことをしました。思ひ掛けなく、天女に出會うて、何だか訣らなくなつて、うつかりこんな處にぶしつけに參りました。其おわびは歌で致します、と言うて作つた歌。並びに短歌。二首

3791 幼兒の若子が身には、たらちし母に抱かえ、襁掛く這ふ子が身には、木綿肩衣無雙に縫ひ著、うなつきの童が身には、纈纈の袖著け衣著し我を。

による子等がよちには蜷の腸か黑なる髮を、眞櫛持ちこゝに搔き垂り、取り束ね上げても捲きみ、解き亂りうなゐになしみ、丹つかふ色懷しき紫の大綾の衣、住吉の遠里小野の眞榛持ちにほしゝ衣に、狛錦紐に縫ひつけ、插しべ重ねべ竝重ね著、打麻はし麻績の子等、あり衣の寶の子等が、うつたへに延へて織る布、日晒しの麻栲作りを、敷裳なすはしきに取り敷き、宿に綜る稻置處女が夫ど

ふと、我にまだしゝ遠方の兩綾下韈、飛ぶ鳥の飛鳥男が雨づゝみ縫ひし黑沓さしはきて、庭にたゝずみ、な立ちそといさむる處女が、仄聞きて我にまだしゝ水縹の縑の帶を、曳帶なす韓帶にとらし、わたつみの殿の甍に飛び翅る蜾蠃の如き腰細にとりてよそひ、まそ鏡とり竝め懸けて、己が顏かへらひ見つゝ、春さりて野邊を廻れば、面白み我を思へか、さ野つ鳥來鳴き翅らふ。秋さりて山邊を行けば、懷しと我を思へか、天雲も行き棚引く。歸り立ち道を來れば、うち日さす宮女、さすたけの舍人男も忍ぶらひ顧ひ見つゝ、誰が子ぞと

3791 三四歲の赤ん坊の時分には、お母さんに抱かれ、胸前垂を掛けて歩く子どもの時分には、木綿の袖無しを、無雙に縫うたのを著てをり、髮が領首迄かゝる少年の時分には、絞り染めの袖の附いた、大きな著物を著て、さうして、成長した自分を、「なよ〳〵」とした、美しい同年輩の女の子即、眞黑な髮を櫛で梳つて顏にかき垂し、それを引き束ねて卷いて見たり、解き亂しておかつぱさんにして見たり、色の懷しい紫の、大形の綾を織つた著物で、住吉の遠里小野の榛で色附けした著物に、狛錦を紐として縫ひ附け、結んだり、重ね著したりして、幾重にも重ね著してゐる女らが、私を思うて色々の物をくれた。」麻績氏の娘達、即大事に育てられた豪家の娘達が、一心に織り延した布、即日に晒した、麻の手織りの布をば、幾重にも織り疊んだ上裳のやうに拵へて、緣端近う敷いて居たし、其家で、絲を綜る稻置氏の娘が、結婚を言ひ入れる爲に、私の方へ贈り物にくれた、二重の綾で拵へた沓下を履き、飛鳥の里にをる職工が、雨に引つ籠つて居て、縫うた黑い沓をば履いて、庭にぢつと立つて居ると、家の人が邪魔をして立つなと止める、其娘が仄かに、自分の容子を聞いて、又、自分にくれた水縹の固い織り物の帶をば、高麗風の引き帶にして、遙かな常世の國の、王樣の宮殿の屋根に飛んで居る、似我蜂のやうな細腰に、その帶をとりつけて飾りとし、鏡をば、幾つも

幾つも竝べて懸けて、自分の顏をば、振り返り〳〵見て、身じまひし、さうして、春になつて野の中を歩き廻ると、野の鳥も私の姿を優美だ、と思ふからか、來て、飛び廻つて鳴くことだ。秋になつて、山の中を歩いて行くと、懷しい姿だ、と自分を思ふからか、天雲さへも、横にぢつと懸つたことである。それから、立ち戻つて來ると、御所に仕へて居る官女達、貴族の隨身達も、私の容子を慕はしう思うて、振り返り〳〵見乍ら、あの美しい男は、一體、何處の人だらう、と思はれて居たぐらうのに、こんなに、見つともなくなつて了うた。昔、勢ひよく騷ぎ廻つて居た自分が、今日は可愛いあなたがたに、嫌な老翁だ、と思はれて居ませうよ。どうしてこんなに、醜くなつたのでせう。けれども、あなたたちもかういふことを、お忘れになつてはいけません。昔の賢い人もかういふことをしたのがあります。後世迄の記念に殘して置かう、と言ふので、年寄りを送つて行つた車を、わざ〳〵持つて歸つて來た、と言ふではありませんか。

や思ほえてあらむを。かくし醜なる。

古のさゝきし我や、はしきやし今日やも子等に否にとや思ほえてあらむを。かくぞ醜なる。古の賢き人も、後の世の記念にせむと、老人を送りし車持ち歸り來し

反歌。二首

3792 死なばこそ逢ひ見ずあらめ。生きてあらば、白髪、子等に生ひざらめやも

3793 白髪して子等も生きなば、かくの如、若けむ子らにのらえかねめや

處女等の作つた歌。九首

3794 はしきやし翁の歌に、おぼゝしき九の子等や、かまけてをらむ

3792 若しも私が死んだら、もう再、逢うて見ることも、出來ますまいけれど、生きて居て、若し、再逢ふことがあつたら、あなた等の頭にも、白髪が生えない、といふことがありませうか。

3793 あなた達は私を罵倒なさるが、若し年寄つて、あなた達も生きて居なさつたら、今の私の樣に、外の若い人達に、罵られずにをることが出來ませうか。

3794 面白いお翁さんの歌によつて、此ぼんやりした九人の娘達は、敗けてをらねばならんだらうよ。

3795 恥を忍び、恥を默して、言もなく物言はぬ先に、我はよりなむ

3796 否もうも欲りする儘に許すべき、形見ゆれや、我もよりなむ

3797 死にも生きも同じ心と結びてし友は違はじ。われも賴りなむ

3798 何せむと誰がいひをらむ。否もをも友も賴らなむ。我もよりなむ

3799 あにもあらず、己が身のから、人の子の言も盡さじ。我もよりなむ

3800 旗薄ほには出でじを。忍びたる心は知れつ。我も賴りなむ

3801 住吉の岸野の榛に匂ふれど、匂はぬ我や、匂ひてをらむ

3802 春の野の下草靡き、我もより、匂ひ

3795 何も彼此言はない中に、我々は恥ぢを耐へ、恥ぢを默認して、默つて此老人に從はう。

3796 此老人が、自分達が望む通りに、嫌とでも唯とでも許してくれさうな、さういふ容子が見えて居るから、私も老人の語に從ひませう。

3797 死ぬるのも生きるのも、一致してしよう、と盟うて居る仲間には、違約すまい。だから、同樣に、老人のいふ語に從はう。

3798 どうしよう、と言ふ積りで、伴れの人達に反對はしてをらうか。嫌も唯も、友達も從ひなさい。自分も從うてをらう。

3799 どう、と言ふ別に理由もない。だから、自分一身のせゐで、他の人達の口を、彼是と酸くさせまい。自分も、老人の語に從うて居よう。

3800 表面には現すまいよ、と心の中に隱してをつた思ひも、人に悟られた。私も此老人の語に從はう。

3801 住吉の海岸の野原に生えて居る榛で、色著けしても色著かぬやうに、容易に、他人に心を許さない自分も、此老人の心には、榛で色が著くやうに、從はずには居られない。

3802 春の野に生えて居る、低い草が風に靡くやうに、私も友達

よりなむ。友のまに〳〵

□昔、兩親には告げずに通じて居た男女があつた所が、女の方から親に知らせたく思うて、男に相談した歌

3803 下にのみ戀ふれば苦し。山の端(ハ)ユ從出で來る月の、顯さば如何に

或人の説には、男にも答へた歌があつたけれど、訣らなくなつたと言ふ。

□昔男があつて、婚禮をして間もなく、驛使(ハユマヅカヒ)となつて遠國に遣された。公の事で逢ふことも思ふ儘にならず、日を過して居る中に、其處

3803 心の中で許り、焦れて居るのは術ないものです。一層、山の端(ハ)を出て來る月ではないが、すつかり、二人の間を顯して了うたら、如何でせうか。

のする通りに、此迄は、人に心を許したことはなかつたが、此からは、此老人に從うてをらう。

女は歎き悲しんで病氣になつた。何年かたつて其男が用事を濟して歸つて來て、役所から直に其家に行つて見ると、處女は顏形が衰へて、非常に變つて居る。語も咽喉につかへて出ない。其時男が涙を流して口吟んだ歌

3804 かくのみにありけるものを。猪名川の奥(オキ)を深めて、我が思(モ)へりける

其時、寢て居た處女が、此歌を聞いて、頭を上げて、直に答へた歌

3805 ぬば玉の黑髮濡れて、泡雪の降るに

3804 こんな風に過ぎなかつたのに、自分は、猪名川の底が深いやうに、將來長くと思ひ込んで、慕うて居たことだ。

3805 遠方の道をば、わざ〳〵と、髮をば濡して、泡雪の降つて

や來ます。甚戀ふれば

□

3806 事しあらば小泊瀬山の石城にも、籠らば共に、な思ひ。吾が夫

此は、傳説に昔或處女が、兩親に知らせないで、一人の男に通じて居た所が、男は其親の叱るのを恐れて、躊躇する容子だつたので、女が贈つたものといふ。

3807 朝香山影さへ見ゆる山の井の、淺き心を我が思はなくに

此歌は、傳説に葛城ノ王が、陸奥ノ國に使せられた時、國司や接待の役人の行き屆かぬ處が多かつたので、王は御不快で、怒りの顏色が見えた。それで飲食物を出しても、其に手をつけようとせられなかつ

3806 居る中をば、お越し下さつたのは、私がひどく焦れてるので、甲斐があつたのでせう。

3806 何か事が出來たならば、どんな事でも辭しません。あなたが初瀬にある石槨の中に、お這入りになるやうなことがあつたら、それへも一處に這入りませう。だから、心配しなさるな。いとしい方よ。(死なば一處だから、何の恐れることもない。)

3807 朝香山なる山の井よ。それは、人の姿迄映る程、清い井であるが、其泉のやうに、淺い輕薄なことは、私は思うても居ません。

た處が、以前采女となつて、都に出て居た優美な處女が居て、左手に盃を捧げ、右手に水を容れた器を持ち乍ら、王の膝元に進めて、此歌を詠んだので、王の心持ちも解けて、終日樂しく宴飲をせられた、と言ふことである。

3808 住吉のをづめに出でゝ、まさかにも、己妻すらを、鏡と見つも

此は昔、身分の低い人が、妻と住んで居た。或時其里の男女が、凡て野遊びに出たので、其夫婦も出掛けた處が、其席上に、其妻以上の美人がなかつたので、男は此歌を作つて、彌、其妻を愛した、と言ふことである。

3809 あきかはりしらすと、みのりあらばこそ、我が下衣返し賜らめ

3808 此迄は、何とも思うて居なかつたが、住吉の小集樂の時分に出て、目の當り自分の妻であるのに、其女をば鏡のやうに、注意をひかれて見つめてゐたことだ。あまり美しさに。

3809 賣買したものを、返却したり、取り戻したりすることを聽許する、と言ふ御命令が出たならば、成程、私の記念に差し上げた下の著物も、返しても頂きませうが、さもなくては、頂戴する理がありません。

此は、傳説に、昔尊い方に寵愛せられて居た處女が、寵愛の薄くなつた後に、取り交して居た記念物を返されたので、娘が怨んで獻つたもの、と言ふことである。

3810 うま飯を水に釀みなし、我が待ちし價は曾てなし。たゞにしあらねば

此は、傳説に、昔一人の處女があつて、其夫に別れて後、年を經て、夫が他の妻を迎へて、自身は來ないで、祝ひの贈り物をよこしたので、處女が、この怨み歌をば贈つたのである、といひ傳へて居る。

□夫に焦れた歌。竝びに短歌

3811 さにづらふ君が御言と、玉梓の使ひも來ねば、思ひ病む我が身一つぞ。千早ぶる神にもな負せ。占部据ゑ、

3810 好く煮えた飯を、水に嚙み入れて、酒に釀して、醱酵するのを待つて居た其酒は、あなたが直に來て、お呑みになりませんので、其代價さへも、一度も受け取りません。(盡した志も、只送る許りで、一度も自分の家へ來て、逢はれたことがない。志の代償として、逢ふと言ふこともなかつた、と少し皮肉に言うたのである。)

3811 わが身は、いとしいお方のお便りだと言うて、使ひさへもやつて來ない爲に、煩悶して病氣になつて居る、この體一つのうへであります。だから、どの神樣の祟りだ、と言ふ風に、其神樣に科を著せて下さるな。又、陰陽師を呼び迎

龜もな燒きそ。戀ひしくに痛き我が身ぞ。著く身に浸み通り、群肝の心碎けて、死なむ命急かになりぬ。今更に君か吾を呼ぶ。たらちねの母の命か、百足らず八十の巷に、夕占にも、占にもぞ問ふ。死ぬべき我が故

反歌

3812 占部をも、八十の衢も占問へど、君をあひ見むたどき知らずも

3813 我命は惜しけくもあらず。さにづらふ君によりてぞ、長く欲りせし

此は傳説に、車持氏の處女が、久しく夫の通はない爲に、焦れて果ては病氣になり、愈、臨終と言ふ際に、使ひをやつて夫を呼び寄せたが、夫の顏を見ると、泣き乍ら、

へて來たり、龜を燒いて、占ふことはせないで下さい。別に、不思議なことはないのです。たゞ戀しさに弱つた體なんですから、目に立つて、身に浸み込んで苦しみ、心が亂れて死なうとする臨終の時が、目前に迫つて來ました。さうだから、と言うて、かうなつた上に、今になつていとしいお方が、私を呼び迎へて下さつたが、それも詮ないことだ。又母さんが、往來の頻繁な辻に出て、辻占を問うて、占うて見られるとか言ふことだが、もう死んで行く私だから、それをして貰つた所で、役にも立たない。

3812 陰陽師の占も、辻占も占うて、神の心を問うて見たが、いとしい方に逢ふ目的が、立たなかつたことだ。

3813 私の命は、惜しいのではありません。いとしいお方の爲に、長くあつて欲しい、と此迄も願うて居たのです。

此歌を歌うて、直様息を引きとつた、と言ふことである。

問答歌

3814 白玉は緒絶えしにきと聞きし故に、其緒又貫き、我が玉にせむ

3815 白玉の緒絶えは誠、然れども、其緒又貫き、人持ち去にけり

此は、傳説に昔一人の處女があつた。夫に捨てられて後、他家に緣附いた所が、或男が既にかたづいたことを知らないで、前の歌を贈つて、娘の父母に結婚の許しを乞うた。そこで父母は、其男が事のなりゆきを知らないのだ、と考へて、後の歌を贈つたのだといふ。

穂積ノ親王の御歌

3816 家にありし櫃に鎖さし藏めてし戀ひの奴の、つかみ懸りて

此は穂積ノ親王の家で、宴會がある毎に、興が深くなつて來ると、必、此歌を歌はれるのが、例になつて居たのである。

3817 碓はたぶせの下に、吾が夫子はにふゞに笑みて立ちませり。見ゆ

3818 朝霞鹿火屋が下に鳴く河蝦。忍びつつありと、告げむ子もがも

右二首は、河村ノ王の宴會の時、琴を彈じて、第一番に謠ふ例であつた。

3819 ゆふだちの雨うち降れば、春日野の尾花が末の白露、思ほゆ

3820 夕づく日さすや川邊に作る家の、形を宜しみ、うべ、よそり來し

3814 白玉は紐切れがしたことだ、と聞きましたが、其玉に通す緒を、又貫して、私の玉にしようと思ひます。

3815 白玉の緒が切れた、と言ふことはほんとうです。併し又直に、其玉の緒をさして、人が持つて行つて了ひました。

3816 前から餘り苦しいので、家にあつた筐に、錠を下して入れて置いた戀ひの野郎奴が、何處からか出て來て、又自分の胸に縋り付いて、自分を迷はすことだ。

3817 碓は、田圃の小屋の軒の邊に、そして、いとしいお方は、にこ〳〵と笑うて、其門口に立つて入らつしやる。それが見える。

3818 山の鹿を追ふ火を、點して置く家の下に、鳴いて居る蛙ではないが、心の奥に思うて居る、と告げる人があれば好いが。（いとしい人に、自分の心を打ち明けたいものだ。）

3819 夕立ちが降つて來ると、春日野の薄尾花の先の露が、嘸、面白からう、と思はれる。

3820 夕日のさして居る、川の邊に立てた家の形が良いので、人が引かれて來た。ほんに、人のやつて來たのも尤だ。

右二首、小鯛ノ王の宴會の時、琴を彈いて第一番に謠ふ歌である。

兒部ノ女王の人を嗤笑はれた歌

3821 うましもの何處あかぬを、尺度らし角のふくれに、しぐひあひにけむ

此は、尺度氏の娘が、身分のよい人達の申し入れは斷つて、身分の低い見苦しい男の言ふことを聽いたので、此歌を贈つて、其愚さを笑はれたのである。

古歌。一首

3822 橘の寺の長屋に、我が率寢し童女は、なりは、髪上げつらむか

此は、椎野ノ長年が言ふには、寺の僧坊は、俗人の寢る處でない。又一人前にならない小娘をば、はなりと言ふ。處が既に、うなゐと言

3821 立派なものは、何方向いても、澤山あつて、幾らでも欲しい程だのに、尺度さんは何故、あんな、頭に瘤の出來たやうな男に、くつ附き合つたのだらう。

3822 橘のあの寺の坊さん達の寢る長屋で、自分が一處に寢た處女は、あの垂れて居た髪を、最早上げて了つて居る程、娘らしくなつたであらうか。

ふ語があるのだから、下に、髪あげつらむかといふことは出來ない。だから、左の如くであつたのが、誤つたのだらうと言うた。

3823 橘の照れる長屋に、我が率寢し童女、はなりに髪上げつらむか

長ノ意寸麻呂の歌。八首

3824 銚子に湯わかせ、子ども。櫟津の檜橋より來む狐に、あむさむ

此は傳へに、或時人々が寄つて、酒を呑んで居た處が、夜更けて狐の聲が聞えるので、人々が意寸麻呂に勸めて、食器・狐の聲・橋などを詠み入れて作らせた處が、聲の下から、歌うたものであるといふ。

行滕・蔓菁・食薦・屋梁を詠み入れた歌

3823 立派な棟の長い家で、一處に寢た小娘は、髪をはなりに、とり上げたことであらうか。

3824 銚子に湯を沸して置け、臣供よ。あの春日野の檜橋を越えて、やつて來る狐に、ぶつかけてやらう。

3825 食薦敷き、蔓菁煮持ち來。屋梁に行
滕かけて憩ふ、此君

荷葉を詠んだ歌

3826 荷葉はかくこそあれも。意寸麿が家
なるものは、芋の葉にあらし

雙六の目を詠んだ歌

3827 一つ二つの目のみにあらず。五つ六
つ三つ四つさへあり。双六のさえ

香塔・厠糞・鮒・奴を詠み
こんだ歌

3828 香塗れる塔にな寄せそ。川阿の糞鮒
食める、醜の女奴婢

酢・漿・蒜・鯛・水葱を詠
んだ歌

3829 漿酢に蒜搗きかてゝ、鯛願ふ、我に

3825 こんな田舎屋へ、珍客がお出でになつた。狩り場裝束を解いて、行滕をば屋梁に懸けて、息んで居られる。此方に何もないけれど、食薦を敷いて座を拵へて、蔓菁を煮いて持つて來て奉れ。

3826 お宅の蓮は、見事なものです。こんなのが、蓮の葉なんです。此意寸麿の家にも植ゑてはありますが、あれは、芋の葉と言ふんでせう。

3827 人間ならば精々二つで、一つ目のものさへあるのに、是はさうでなく、五六三四などゝ言ふ程の目迄がある。面白いものは、双六の采だ。

3828 あの女奴隷は、川の入り込みにをる糞鮒を取つて食ふ、汚い女だ。あんな汚らはしい者を、此清淨な塔に近寄せてはいけない。

3829 漿に合した酢の所へ、蒜を搗き合せて、更に、蘯物に鯛を

な見せそ。水葱の羹

玉蕷・鎌・天木香・棗を詠
んだ歌

3830 玉蕷刈り來。鎌麿。天木香と、棗が
下とかき掃かむため

白鷺が木を喙へて飛ぶのを
詠んだ歌

3831 池上の力士舞ひかも。白鷺の桙喙ひ
持ちて、飛び渡るらむ

忌部ノ某の、數種の物を詠ん
だ歌

3832 枳穀のうばら刈り退け、倉建てむ。
糞遠くまれ。櫛作る刀自

境部ノ王の數種の物を詠ま
れた歌

入れよう、と思うて居る私に、香を嗅ぐだけでも、ぞつとするやうな水葱の羹なんか、見せてくれるな。

3830 おい鎌公よ。畠へ行つて、蕷を切つて來い。庭の天木香や、棗の下邊が、實や、葉が澤山落ちて居るから、掃き寄せよう、と思ふから。其爲にとつて來い。

3831 向うに飛んで行くのは、あれは、池上の里の力士舞ひなのだらうか。それであんなに、白鷺が棒を喙へて、ずつと、飛んで行くのだらう。

3832 枳穀の針のある木を、刈り退けて、倉を建てよう、と思ふ。だから、此處へ來て、糞をすることはならない。彼方へ行つて、せよ。櫛を作る上さんよ。

3833 虎に乘り、古家男越えて、青淵に蛟取り來む劍大刀もが

作者の知れぬ、色々の物の歌

3834 梨棗きみにあはつぎ、這ふ蔦の後も逢はむと、あふひ花咲く

新田部ノ皇子に奉つた歌

3835 勝間田の池は、吾知る。蓮なし。然言ふ君が鬚なきが如し

此は傳へに新田部ノ親王が、都の中を遊覽せられた時に、勝間田の池を見て歸られて後、其景色を思ひ出して、お側にゐた女に話されたには、今日、勝間田の池へ行つて見たが、其景色のよいこと、波がうね〳〵と耀いて、彼處此處に蓮の花がぽつかり咲いて居る。其面白さは形容が出來ない、と言はれたので、其女が即座に、此歌を作つて、戯談に謠うたのだと言ふことである。

佞人を誘つた歌

3836 奈良山の兒の手柏の兩面に、かにもかくにも、佞人の輩

此は、博士消奈ノ行文大夫の作つたものである。

3837 久方の雨も降らぬか。蓮葉にたまれる水の、玉に似たる見む

此は、傳へに據れば、右兵衞の官人某が能く歌を作つたが、或時兵衞府で宴會があつた處、總べて蓮の葉の上に、食物を盛つた。人々が謠うたり舞うたりした中に、此某を捉へて、其蓮の葉について、

3833 あの昔居つた古家の里の、強い男にかけ拔ける爲に、虎に乘つて行つて、青く水の淀んで居る淵で、蛟を捉へて來よう。どうぞ、それに適當な刀が、あれば好いが。

3834 果物は、梨が出來た後へ棗が出來、それから黍、その後へ粟が繼いで稔る。さう言ふ風に、黍ではないが、いとしい君に、粟ではないが、續けて逢うて、這ふ蔦が蔓同士出會ふやうに、將來は逢はう、と葵の花が咲いて居る。（此は、果物・植物名寄せの地口である。）

3835 私は好く存じて居ります。あの勝間田の池には、蓮なんか一本もありません。（と反對に言うて、）蓮がある〳〵、と仰つしやるあなたの鬚がないやうです。（親王に鬚の多かつたのを、反對に言うて、自然、勝間田の池に、蓮の多いことを述べたのである。）

3836 奈良山にある兒手柏が、風が吹くと裏向いたり、表向いたりするやうな、彼方へも、此方へも、何方へでも風向き次第で向く、おべつか使ひの人々よ。

3837 雨が降つてくれば好いが。此蓮の葉にたまつた水が、玉のやうに見えるのが、見たいものだ。

歌を作れ、と言うた聲の下から、作つて謠うた歌だといふ。

意味のない歌。二首

3838 吾妹子が額に生ふる、雙六の特負の牛の、鞍の上の瘡

3839 我が夫子がたぶさきにする、つぶれ石の吉野の山に、氷魚ぞ下れる

此は、舍人ノ親王が、或時お側の人々に、誰か訣の訣らない歌を作つたものには、錢と帛とをやらうと言はれた時に、大舍人安倍ノ子祖父が、此二首を作つて奉つたので、直樣一座から出し合せた品物と、錢二千文とを下された、と言ふことである。

池田ノ某大神ノ奥守を嗤笑うた歌

3840 寺々の女餓鬼申さく、大神の男餓鬼賜りて、其子生まはむ

大神ノ奥守の嗤ひ返した歌

3841 佛造る赭土足らずば、水溜る池田のあそが、鼻の上を掘れ

平群ノ某人を嗤うた歌

3842 童ども。草はな苅りそ。八穂蓼を穂積ノ朝臣がわきくさを苅れ

穂積ノ某の誹り返した歌

3843 いづくぞ、赭土掘る岡。薦疊平群のあそが鼻上を掘れ

色の黑いのを嗤うた歌

3844 ぬば玉の斐太の大黑見る毎に、巨勢の小黑し、思ほゆるかも

謗り返した歌

3840 寺々にをる女餓鬼等が申しますことは、あの大神の男餓鬼をば夫に頂戴して、其子を生みたいものです。（大神ノ奥守が痩せて居るのを、冷かしたのである。）

3841 佛樣を造つて、塗る丹が足りなければ、あの池田さんの鼻の邊を、掘つたら好からう。（池田ノ朝臣の鼻が、赤鼻であつたから、言うたのである。）

3842 子ども達よ。そんなに草を刈る必要はない。此穂積さんの、わき草を刈れば好い。

3843 まそほ掘り出す岡は、何所だらう。よし〳〵、平群さんの鼻の邊を掘るが好い。（是も、赤鼻を笑うたのである。）

3844 飛驒から出る大黑馬ではないが、あの斐太の大きい黑ん坊さんを見ると、何時でも、巨勢の小さな黑ん坊さんが思はれることだ。

3845 駒造る土師の志婢麿。白なれば、うべ欲しからむ。其黒色を

此は、傳へに大舍人土師ノ水道字を志婢麿と言うた人が、大舍人巨勢ノ豐人 字を睦月麿と言うた人と、巨勢ノ斐太ノ某との二人が、相方共色が黒かつたので、戯れに前の歌を作つて贈つたのに對して、巨勢ノ豐人が嗤ひ返したのであるといふ。

戯れに、僧を嘲つた歌

3846 法師らが鬚の剃り杭。馬繋ぎ、いたくな牽きそ。法師なげかむ

法師の答へた歌

3847 檀越や。然な言ひそね。戸長等が課役はたらば、汝もなげかむ

夢の中に作つた歌

3845 馬の人形を拵へる、土師の志婢麿は、お生憎樣だが白色だから、黒い色が欲しい、と思ふのも、成程、尤なことだ。

3846 法師の鬚を剃つた後に、馬を繋いで、餘り甚く引いてはいけない。法師が、悲しがるだらう。

3847 檀家の衆よ。そんなに、悪口を言ひなさるな。お前さんだつて、戸長がやつて來て、上の御用にとり立てたら、辛くて體が、ち切れて了ひさうだ、と悲しがるだらう。

3848 新墾田の鹿田の稻を倉に積みて、あなひねぐ〳〵し。我が戀ふらくは

世間の無常なのを悲觀した歌

3849 生き死の二つの海を厭はしみ、潮干の山を偲びつるかも

3850 世の中の醜き假廬に住み〳〵て、至らむ國のたづき知らずも

右二首、河原寺の佛堂の中の倭琴の面に、記してあるものである。

3851 心をし無何有の郷に置きたらば、藐姑射の山を見まく近けむ

3852 いさなとり海や、死にする。山や死にする。

死ねこそ、海は潮干て、山は枯れすれ』

3848 新しく開墾した田の、稻を倉に積んでおいたのが、長くなつて、ひね米になつたやうに、自分の焦れて居るのも、もう古臭くなつたことだ。

3849 人間のをる世界は、生きたり死んだりする、海のやうな世界だ。それをうるさく思うて、早く彼岸の潮の引いて居る先の、山に行きたい、と其所を心の中で、慕うて居ることだ。

3850 此人間世界といふ、むさくるしい假り小屋の中に、かうして住んで居て、行かうと心懸けて居る、彼岸の國の目的も、つかないことだ。

3851 自分の心をば、絶對の、人間の努力とか、自我など〻言ふ世界を超越した、あの無何有と言ふ所に据ゑて置いたら、常住樂しみの盡きない、と言ふ仙山の藐姑射の山をば見ることも、軈ては、出來るであらう。

3852 人間は死ぬ、と言ふが、あの海や山は死なゝいで、人間許りが死ぬものだらうか。

勿論、死ぬとも。死ぬからこそ、海は潮が干いて、山は木が枯れるんだ。それで訣るだらう。

痩せた人を笑うた歌

3853 石磨に我物申す。夏痩せによしとふものぞ、鰻とり食せ

3854 痩す〳〵も生けらばあらむを。はたやはた、鰻を取ると、川に流るな

此は、吉田ノ老字は石磨と言うて、仁教と言ふ人の子であつた人が、生れつき非常に痩せて居て、幾ら澤山飲食しても、まるで食べないでゐる人のやうであつた。それで、家持が、此歌を作つて、戯れたのである。

高宮ノ王の作られた、數種の物の歌。二首

3855 葛花に這ひおほどれる糞蔓、絶ゆることなく宮仕へせむ

3853 石磨殿に、私がものを申します。夏痩せには適藥だ、と申して居ますものです。鰻を取つて食りなさい。

3854 痩せ乍らも、生きて居たら生きて居られるのに、痩せてると言うて、鰻を取らうとして、川にはまつて、死なゝいやうになさい。

3855 葛の花に匐ひかゝつて、擴つて居る糞蔓が、幾ら葛を引かうとしても、其蔓に絡み附いて來るやうに、何時迄も切れることなしに、御所に仕へたいものだ。（是は、葛花・糞・蔓・宮などを詠み入れたものである。）

3856 婆羅門の作れる小田を食む烏。瞼腫れて、はたぼこにをり

夫を慕うた歌

3857 飯食めど旨くもあらず。歩けども安くもあらず。茜さす君が心し忘れかねつも

此は、傳へに佐爲ノ王の御側仕への女が、御殿の宿直で、夫に逢はれないで煩悶して、當直の晩に、逢うた夢を見て覺めて見ると、誰も居ないので、啜り泣きをして、此歌を歌うた。王これを聞いて、御殿の寢泊りを永久に許された、と言ふことである。

3858 此頃の我が戀ひぢから、記し集め、功にまをさば、五位の位階

3859 此頃の我が戀ひぢからたばらずば、

3856 天竺から渡つて來て居る、波羅門の坊さんが作つて居る田をば、食ひ荒した烏が、波羅門の術によつて、あんなに、瞼が腫れて、畑の棒の先に止つて居る。

3857 御飯を食べても、旨くもない。歩いて居ても、心が落ちつかないで、いとしい人の心を、忘れることが出來ないことだ。

3858 此頃の、自分の焦れて居る戀ひの力を、同じくちからと言ふから、租税のことであつたら、それを書き集め、勲功申狀として申し上げたら、五位の位を頂戴することは、疑ひもないことだ。

3859 近來の自分の戀ひ力に對して、御褒美を下さらなければ、

京兆に出でゝ訴へむ

＊

筑前國志珂の海人の歌。十首

3860 大君の遣はさなくに、さかしらに行きし荒雄ら、沖に袖振る

＊

3861 荒雄等を、來むか來じかと、飯盛りて門に出で立ち、待てど來まさぬ

3862 志賀の山。いたくな樵りそ。荒雄らがよすがの山と見つゝ忍ばむ

3863 荒雄らが行きにし日から、志賀の海人の大浦田沼は、寂しくもあるか

3864 官こそさしても遣らめ。さかしらに行きし荒雄ら波に袖振る

3865 荒雄らは、妻子が業をば思はずろ。

役所へ、其ことを調べて下さるやうに、陳上しよう。（二首乍ら、當時の地方官が、如何に收斂に力めて、位階を貰はう、としたかゞ訣るであらう。五位になれば、何國の大夫と稱することが、出來たんであるから、中央政府の政略に煽られた地方官の虚榮心を、背景として、輕い滑稽を歌うて居る。）

3860 天皇が命令して、お遣りなさつたのではないのに、勝手に自分の思ふ通りに、出かけて行つた荒雄は、沖の方で、袖を振つて居る。（溺れ死んだ容子を、人を呼んで居るやうに、とり做して言うたのである。）

3861 荒雄をば待つて、歸つて來るだらうか、來まいか、と不安な心で、人を呼ぶやうに、御飯を食器に盛る禁厭をして、門に出て待つてはゐるが、歸つて來ないことだ。

3862 志賀の里の山をば、そんなに甚く木を伐るな。荒雄がそれを目的にして、やつて來る山だ、と見乍ら、其人のことを、思うて居よう。

3863 荒雄が沖へ行つて、歸らずなつた日から、志賀の海人の住んで居る、廣い浦の深田邊は、寂しくなつたことよ。

3864 御上から命令して、やられる筈だのに、勝手に出掛けて行つた荒雄は、沖の方から、此方を戀しさうに、袖を振つて居る。

3865 荒雄等は、其女房子の暮し向きのことをば、考へても居な

年の八年を待てど來まさぬ

3866 沖つ鳥鴨とふ舟の歸り來ば、也良の崎守り。早く告げこそ

3867 沖つ鳥鴨とふ舟は、也良の崎廻みて漕ぎ來と聞かれ來ぬかも

3868 沖行くや、赤ら小舟につとやらば、蓋し覓めて開き見むかも

3869 大舟に小舟引き添へ、潛くとも、志珂の荒雄に潛き遇はめやも

此は、神龜年中に、太宰府から筑前國宗像郡の平民宗形部津麿に命じて、對馬送糧舶舵師にあてた處が、津麿が、糟屋郡志珂村の海人荒雄の家に出掛けて言ふには、「俺は少し差し支へることがあるが、お前が代つて行くことを承知して

いのであらう。今まで八年間といふもの、待つたけれども、歸つて來ない。

3866 沖に棲む鳥の、鴨と言はれてゐる舟が、歸つて來たら、也良の崎の崎守りよ。直ぐ、知らせてくれ。

3867 鴨と言はれて居る位の速い舟が、あの也良の崎を漕ぎ廻つて、此邊へやつて來る、と早う評判が、聞えて來れば好いが。

3868 沖の方へ漕いで行く所の、丹で塗つた赤い舟に、贈り物を託してやつたら、ひよつとすれば、荒雄に探し會うて、荒雄がそれを手に入れて、開いて見ることが、あるかも知れない。

3869 大きな舟に、小さな舟をとり添へて、沖迄漕ぎ出して、水に深く潛つても、志賀の荒雄に、水の底で出遭ふ、と言ふことはあるまい。

くれるであらうか。」と問うた。荒雄が答へて言ふには、「郡は違ふけれども、始終同じ舟に乘つて、兄弟よりも勤ろにして居て、一處に死んでもよいと思つて居る位だもの、何の嫌なものか。」と答へたので、津麿が言ふのには、「太宰府の役人が、俺を對馬送粮船舵師に命じたが、年が寄つて、海上を行くことは出來ない。それでやつて來て賴むのだが、どうぞ承知してくれ。」と言うたので荒雄は承知して、とう〳〵其事務に就いて、肥前ノ國松浦ノ縣(アガタミ)旻樂(ラク)港を船出して、對馬へ向うて海を渡つたが、出るや否や、空が暗くなつて、暴風に雨さへ交つて荒れた爲、とう〳〵海中に沈んで了つた。そこで其女房子どもが餘りの戀しさに、此歌を作つたと言ふが、一說には、筑前ノ

國守山上ノ憶良が、其悲しみを思ひ遣つて、作つたものだとも言ふ。

▽

3870 紫の粉潟(コガタ)の海に潛(カツ)く鳥。玉潛き出(イ)でば、我が玉にせむ

▽

3871 角島(ツヌジマ)の迫門(セト)のわか海藻(メ)は、人のむた荒(アラ)かりしかど、我がむたは、和海藻(ニギメ)

▽

3872 吾が門の榎實(エノミ)もり食(ハ)む百千鳥、千鳥は來れど君ぞ來まさぬ

▽

3873 我が門に千鳥數(シバ)鳴く。起きよ〳〵。我が一夜妻。人に知らゆな

▽

3870 粉潟の海で、潛つて、餌を求めて居る鳥が、玉をば水の底から取り出して來たら、それをば、私の玉にしよう。（一見、平凡な歌だけれども、のんびりとした、古代人の心が語られて居る。）

3871 角島の海峽に出來る、若藻のやうなあの戀ひ人は、人と一處に居ると、荒藻の樣に荒々しくて、劍もほろゝに許さなかつたが、私と一處に居ると、和藻のやうに、柔かな順(スナホ)な女になつて了つた。

3872 私の家の表の榎を、もり〳〵と喙んで居る澤山の鳥は、始終、門へやつて來ますが、あなたは一向、入らつしやらないことだ。

3873 家の表の川で、千鳥が鳴き續けて居る。（もう夜が明けるのだ。）さあ起きよ〳〵。吾が夕(ユフベ)一晩共に寢た人よ。遲くなつて、人に悟られな。（當時の生活狀態を思はせる傑作。）

3874 射鹿を繋ぐ川邊の若草の、身の若がへに、さ寢し子等はも

▽

3875 うま酒をおし垂水野ゆ出づる水の、暖くは出でず、寒き水の、心もけやに、思ほゆる音の少き道に逢はぬかも。少きよ、道に遭はさば、妹著せる菅笠緒笠、我がうなげる玉の七緒を、取り代へも申さむものを。少き道に遭はぬかも

豐前ノ國の海人の歌

3876 豐國の企救の池なる蓼の末を、摘むとや、妹がみ袖濡れけむ

豐後ノ國の海人の歌

3877 紅に染めてし衣。雨降りて、匂ひは

3874 矢に射られた鹿を、繋いでおく川邊の若草ではないが、自分の身の、若い時代に任せて、一處に寢た二人は、どうして居るだらう。

3875 垂水野から流れて出る水が、暖くは湧かないで、冷たく湧いて出る、其水のやうに、心も鮮やかに、いとしい人のことが思はれることだ。こんな位ならば、どこか人の評判の立たない、寂しい道で逢ひたいものだ。人通りのない其道で、いとしい人が出遭うてくれたら、あの人の著て居る菅の緒笠をば、自分が首に掛けて居る、玉の絲の七條とも、取り代へも致しませうのに。人通りの少い道に、遭うてくれないものか知らん。

3876 豐の國の企救の池に生えて居る蓼の、先に出來て居る實を、摘まうとした爲か、いとしい人が袖を濡したのだらう。（是は海人が、爲事をし乍ら歌つた歌であらう。）

3877 紅の色で染めた衣が、雨が降つた爲に、色が彌華やかにな

すとも、移ろはめやも

能登ノ國の歌。三首

3878 梯立の熊來のやらに、新羅斧陷れ、わし。かけて〳〵、勿泣かしそね。浮き出づるやと見む、わし

此は、傳へに、一人の馬鹿な男があつて、斧が海の底に落ちたのを、金物が水に這入れば浮び上らない、その道理を知らなかつたことを、歌に作つて教へとしたのである。

3879 梯立の熊來酒屋に、まぬらる奴、わし。誘ひ立て、率て來なましを。まぬらる奴、わし

3880 加島嶺の机ノ島のしたゞみを、い拾ひ持ち來て、石持ちつゝき破り、速川に洗ひそゝぎ、辛鹽にこゝと揉み、

ることがあつても、どうして色が褪せようか。（難儀なことがあればある程、彌、心が深くなることはあつても、氣が移ると言ふことはない。之も前の歌と同樣に、職業歌であらう。）

3878 熊來の淵に、上等の新羅斧を陷れた、やれこれ。決して決して私をば、何時迄も出ないで、泣かしてくれるない。かうして、浮き出るか、と眺めて居よう、やれこれ。（之は、傳說を歌のやうに、當時、歌うたものと見えて、囃し語をさへ入れて居る。）

3879 熊木の酒倉で、くだを卷いて居る奴、やれこれ。誘ひ立たして、連れて來よう。よくゝだを卷いて居る奴よ、やれこれ。

3880 加島山の近くにある、机島のしたゞみをば、捨てられて來て、石で一つき破つて、流水の急な川で、綺麗に洗つて、辛い鹽にこそ〳〵揉んで、それを足高盆に盛り入れ、それを机の上に据ゑて、お母さんに上げたか、お父さんに上げ

高杯に盛り、机に立てゝ、母に奉りつや。愛子の刀自。父に奉りつや。愛子の刀自

越中ノ國の歌。四首

3881 大野路は、繁路は繁路。繁くとも、君し通はゞ、道は廣けむ

3882 澀谷の二上山に、鷲ぞ子生とふ。翳にも、君がみ爲に、鷲ぞ子生とふ』

3883 彌彦。おのれ神寂び、青雲の棚引く日すら、小雨そぼ降る

3884 彌彦。神の麓に、今日らもか。鹿のこやすらむ。裘著て、角著きながら

乞食の謠うて歩く歌。二首

3885 いとこ汝兄の君。をり〳〵て物にいたか。父母の可愛いゝ子なる、お上さんよ。

3881 大野へ行く路は、成程、草木の生え茂つた道であることは、それに違ひない。併し、幾ら草木が茂つてゐても、かまはない。いとしい人が通ひなされゝば、道は廣いと同じことだ、と言へよう。

3882 澀谷の里の二上山に、鷲が子を生んで居る、と言ふことだ。いとしい人の爲に、翳にでもしよう。（その羽をば採つて、）鷲が子を生んで居る、と言ふから。

3883 彌彦山よ。天然自然に、神々しく、物たりて居て、青空が空一杯に、擴つて居る時ですらも、茲だけは細かい雨の降る、と言ふ不思議な所だ。

3884 彌彦の神の住んで居られる山の麓に、今日ら邊は、鹿が寢て居るだらう。皮の著物を著て、其は鹿の角のついた儘の裘である。どりや、狩りに出掛けよう。（此は、鹿を擬人したのである。此は、旋頭歌の一體とも言ふべき不思議な形で、五七五七七となつて居るのである。）

3885 お懷しい旦那様。聞いて下さい。私がかうして暮して居る

行くとは、韓國の虎とふ神を、生け捕りに八頭取り持ち來、其皮を疊に刺して、八重疊平群ノ山に四月と五月の間に、藥獵仕ふる時に、足引きの此傍山に、二つ立つ櫟が下に、梓弓八つ手挾み、樋目鏑八つ手挾み、鹿待つと、我がをる時に、さ雄鹿の來立ち嘆かく、遽かに我は死ぬべし。大君に我は仕へむ。我が角は御笠の榮し。我が耳は御墨の壺。我が目らはますみの鏡。我が爪は御弓の弭。我が毛らは御筆の榮し。我が皮は御箱の皮に、我が肉は御膾榮し。我が肝も御膾榮し。我が反芻は御漿の榮し。老い果てぬ。我が身一つに、七中に、或時、外へ出掛けて行かう、と思うて、行つた時に、朝鮮の國を通りかゝつて、其所の虎と言ふ恐しいものをば、八匹迄生け捕りに捕つて參りました。其皮をば敷き物に縫うて、あの平群の山で、四月・五月の時分に、其敷き物を敷いて、陣を張つて、藥獵り致しました時分に、近くの山陰に竝んで立つて居る、櫟の樹の下で、梓の木で拵へた弓を、澤山小腋に掻い込み、溝の著いた鏑矢を、之も亦、小腋に掻い込んで、とつかけ引つかけ出て來る奴を、どし〳〵、待ち伏せして、射てやらう、と思つて、自分が隱れて居る場合に、鹿が私の前へやつて來て、嘆いて言ふのには、私は急に死にさうになつて參りました。どうぞお殺し下さい。さうして、私は天子様に、奉り物をしたいと思ひます。私の角は、天子の御笠の飾りになります。私の耳は、天子の御使ひになる、御墨壺になります。私の燿いた目は、澄み切つた鏡であります。私の爪は、弓の先につく弓弭となります。私の毛は、御筆の飾りになります。私の皮は、御箱に張る皮になります。私の肉は、天子の御膾の中へ入れて、賑かしに出來ます。私の肝も亦、御膾の賑かしであります。私の反吐は鹽辛を賑かす材料となります。嗚呼年が寄つたことです。どうぞ殺して下さい。さうすれば、此老ぼれの體一つに依つて、七重にも、八重にも花が咲き、光榮が生じた、と言うて御賞翫下さい。

重花咲く八重花咲くと申し賞へね。
申し賞へね

○

3886 おしてるや難波の小江に、廬造り、隱りてをる蘆蟹を、大君召すと。何せむに、吾を召すらめや。明らけく我が知ることを。歌人と私を召すらめや。笛吹きと、私を召すらめや。琴引きと私を召すらめや。かもかくも、御言受けむと、今日々々と飛鳥に至り、立たねどもおきなに至り、著かねどもつく野に至り、東の中の御門ゆ、參り來て御言受くれば、馬にこそふもだしかくも。牛にこそ鼻縄はくれ。足引きの此傍山の樅楡を

3886 浪速の入り江に小屋を拵へて、隱れて住んで居る、此葦の中の蟹を、天子樣がお呼びになる、と言ふことだ。何の爲に、私をお召しなさるのだらうか。歌唄ひとして、お召しなさるのだらうか。それとも、笛吹きとして、お召しになるのだらうか。それとも、琴引きとして、御召しになるのだらうか。自分では、ちやんと、そんなことは出來ないと言ふことは、好く訣つて居ることだ。併し、ともかくも、仰せを承つて來よう、と思うて、今日著くか〳〵、と道を急いで、飛鳥へついて、其飛鳥のおきなと言ふ所へ行き、又つく野と言ふ所へ行き、それから、御所の東の御門から參上して、仰せをば承ると、まあどうだ。馬ならは絆をかけるのも尤だ。牛ならば鼻縄を著けて、引くのも尤だが、此蟹をば、嚴重にお縛りなされて、其上、近くの山陰の樅楡の枝をば、幾つも〳〵皮を剝いで持つて來て、それを毎日々々天日にお晒しなされて、それを自分の體と共に、碓に入れて搗き、又其上に、庭に据ゑた碓でつく、と言ふ風にして、つき雜ぜて、難波入り江の鹽の雫の、初垂りの辛く垂れたのをば垂して持つて來て、それを燒き物作りが

五百枝剝ぎ垂り、天照るや日の日に干し、さひづるや碓につき、庭に立つ碓につき、おしてるや難波の小江の初垂を辛く垂り來て、陶人の作れる瓶に、今日行きて明日取り持ち來、我が目らに鹽塗り給ぶと、申し賞へも。まをし賞へも

怕しいものを見た時に、歌

ふ禁厭歌。三首

3887 天なるや讃良の小野に、ち茅苅り、茅苅りばかに鶉し立つも

3888 沖つ國領する君が、染め館、黃染の館。神の門渡る

3889 人魂のさをなる君が、唯獨り逢へりし雨夜は久しとぞ思ふ

拵へた瓶に、今日行つて、明日直ぐ、急な使ひで持つて來て、其鹽をば、自分の體にお塗りなされて、そして、旨い旨いと御賞翫下さい。

3887 讃良の野で、茅を刈らうとした區域に、鶉がをつて、急に飛び立つたことだ。（鳥の災。）

3888 遙かな海中の國を治めてお出でになるお方の、乘つて入らつしやる舟で、之はあるぞよ。此染めてある黃色の館舟が、今神の守つて居られる瀨門を、渡つて行くことだ。（難船。）

3889 眞青な人魂さんよ。私とお前さんとが以前出會つた、あの雨降りの晩からは、隨分、待ち焦れて居たことです。（人魂。）

萬葉集　卷第十七

□天平二年十一月、太宰ノ帥大伴ノ旅人、大納言に任ぜられて、都に上る際、伴の人達が、主人と別れて、海上から都へ上つた時の歌。十首

3890 吾が兄子を吾が松原従見渡せば、海人處女ども、玉藻刈る、見ゆ

右一首、三野ノ石守の歌

3891 荒津ノ海。潮干潮滿ち、時はあれど、何れの時か、我が戀ひざらむ

3890 いとしいお方を自分が待つ、と言ふ其名の、あがの松原から、ずつと眺望すると、海人處女どもがずつと、玉藻を刈つて居る、それが見える。

3891 荒津の海、其處には潮が引いたり、さしたりして、潮時と言ふものがきまつて居るが、自分の焦れて居る心は、何時と言うて、焦れないで居ることがあらうか。

3892 磯毎に海人の釣り舟泊てにけり。我が舟泊てむ沖の知らなく

3893 昨日こそ舟出はせしか。鯨とり　響ノ灘を、今日見つるかも

3894 淡路島と渡る舟の檝間にも、我は忘れず、家をしぞ思ふ

3895 玉はやす武庫のわたりに、天傳ふ日の昏れ行けば、家をしぞ思ふ

3896 家にてもたゆたふ命。波の上に浮きてしをれば、奥所知らずも

3897 大舟の奥所も知らず行く吾を、何時來まさむと、問ひし子らはも

3898 大舟の上にしをれば、天雲のたどきも知らず、かこつ、吾が世ぞ

3899 海人處女漁焚く火の、おぼゝしく、

3892 見て居ると、日暮れになつて、海人の釣りに出た舟は、どの磯へも、此磯へも皆、泊つて行つたことだ。處が、自分の乘つて居る舟の、泊る磯は何處とも訣らない。（傑作。）

3893 つい昨日、舟出をした許りだと思うてゐるのに、それに、今日はも早、音に聞えてゐる響灘をば、見たことだ。

3894 淡路島、其海峽を渡つて行く舟の、梶を取り上げる少しの間も、自分は、家のことを忘れないで、思ひつめて居る。

3895 武庫の海の渡り場所で、日が段々暮れて行くと、家のことを思ふ。（枕詞が、二つ迄這入つて居るが、毫も内容を空疎にせないで、反つて、單純化と、音の莊重の量とを增して居る。傑作。）

3896 家に居てさへも、定りのない、搖うて居るやうな人間の命だ。がかうして、波の立つ海上に浮んでゐると、將來どうなることやら、的のつかないことだ。（此歌、思想に於て優れて居る。傑作。）

3897 自分が乘つて行く舟の先は、どうなることやらも訣らずに、出かけて行く自分であるのに、何時歸つてお出でなさるか、と尋ねたいとしい人は、どうして居るだらう。

3898 大きな舟の上に住んで居るので、天を行く雲ではないが、何處に止まることやら、一向目的もつかないで嘆いて居る、吾が此頃の生活よ。

2899 海人處女が夜釣りをして、焚く火が呆やりして、好く見え

津濃ノ松原思ほゆるかも

十年七月七日の夜、獨り天の川を見て作つた歌

3900 織女し舟乘りすらし。まそ鏡清き月夜に、雲立ち渡る

太宰府で出來た梅の花の歌に、後から附け添へて作つた歌。六首

3901 み冬盡き春は來たれど、梅の花君にしあらねば、折る人もなし

3902 梅の花。み山と繁みに、ありともや、かくのみ君は見れど、飽かにせむ

3903 春雨に萌えし柳と、梅の花、共に遲れぬ常のものかも

3904 梅の花何時は折らじと、いとはねど、

ない、津濃の松原が、見たく思はれることだ。

3900 今頃は、織女星が舟遊びをして居るに違ひない。あの清らかな月に、雲がずつと立ちかゝつて居る。あれは、竿の滴であらう。

3901 冬がすんで、春がやつと來たけれど、咲いて居る梅の花は、心あるあなたでなければ、折りとつて頭に簪す人もない。

3902 梅の花が、山と見える程にあるとしても、あなたが入らつしやつたら、こんな位では滿足しない、と思はれるだらう。

3903 春雨に芽を出した柳と、花の咲いた梅と、何方も遲れないで一處に出る、と言ふ習ひのものであらうよ。

3904 梅の花は、何時だから折らう、折るまい、と言ふ厭ひはな

咲きの盛りは惜しきものなり

3905 遊ぶ日の樂しき庭は、梅柳折り簪してば、思ひなみかも

3906 み園生の百木の梅の散る花の、天に飛び上り、雪と降りけむ

右は、天平十二年十一月九日、大伴ノ家持の作つたものである。

甕ノ原の新都を讃美した歌。

並びに短歌

3907 山城の恭仁ノ都は、春されば花咲きをゝり、秋さればもみぢ葉匂ひ、帶ばせる泉ノ川の上つ瀨に、うち橋渡し、淀瀨には浮き橋渡し。あり通ひ仕へ奉らむ。萬代迄に

反歌

いが、咲いて居る頂上を折るのは、惜しく思はれることだ。

3905 皆集うて遊ぶ日の、愉快な庭では、梅や柳を折つて簪せばこそ、思ひがなくなつて、こんなに面白いんだらう。

3906 庭の澤山の梅の樹の、散る花瓣が空へ飛び上つて、それが又雪となつて、降つて來たことであつたらう。あの太宰府の官舍の遊びは、嘸愉快であつたらう。（之は家持・旅人の太宰府にをる頃には、共に居たのであるが、卷五の梅花の歌に、名の出て居ないことを見ると、其席上には、臨まなかつたのであらうが、ともかく、其時の光景を思ひ出して、作つたので、歌の中に君とあるのは、凡て旅人である。）

3907 山城の恭仁の都は、春になると、枝もぶら〳〵に花が咲き、秋が來ると、黃葉が派手に色著いて居るし、其都の帶のやうに取り回された、泉川の上の方の淺瀨に、打橋を渡し、靜かに淀んで居る瀨には、舟橋を渡して置いて、此儘で始終、往來したいものだ。幾千年迄も。

3908 たゝなめて泉ノ川の水脈絶えず、仕へ奉らむ。大宮所

右は、天平十三年二月、右馬寮ノ頭境部ノ老麿の作つた歌である。

子規を詠んだ歌。二首

3909 橘は常花にもが。霍公鳥棲むと來鳴かば、聞かぬ日なけむ

3910 玉に貫く楝を家に植ゑたらば、山霍公鳥離れず來むかも

右は、四月二日、奈良の屋敷に居た大伴ノ書持が、兄の家持の、恭仁ノ都にゐるのに遣した歌である。

橙橘が咲き出したので、霍公鳥が飛び廻つて、囀つて居る此時候になつて、情操

3908 泉川の水脈が切れないやうに、何時々々迄も、絶えずにお仕へ申したい御所である。

3909 自分の庭に橘があるが、一體橘といふものが、常住、花の咲くものであつてくれゝば好い。子規が此樹に、花が何時でもあるから、巣を掛けよう、と來て鳴いたら、聲を聞かぬ日はなからう。

3910 玉に貫す栴檀の木をば、屋敷に植ゑて置いたら、懐しい子規が、と絶えないで、始終來るであらうよ。

を陳べないでは居られない。それで三首の歌を作つて、胸の中を霽さうと思うて作つた歌

3911 足引きの山邊にをれば、霍公鳥木の間立ち潛き、鳴かぬ日はなし

3912 霍公鳥。何の心ぞ。橘の玉貫く五月。來鳴きとよむる

3913 霍公鳥。楝の枝に行きて居ば、花は散らむな。玉と見る迄

右は、四月三日に、内舍人大伴ノ家持が、恭仁ノ都から弟の書持に返した歌である。

霍公鳥を慕うた歌。田口ノ馬長

3911 山の近くにをるので、子規が木の中を潛りつ拔けつして、鳴かない日はない。

3912 子規にはどう言ふ積りがあつてか知らぬが、橘の花の藥玉にされる五月に來て、邊を響かして鳴くのであらう。（子規の聲の爲に、花が散るから。）

3913 玆の山の子規が、奈良の家にある栴檀の木の枝へ飛んで行つて、止つて鳴いたら、花は藥玉の玉が、絲を離れたと思はれる程、其鳴き聲で、散ることであらうよ。

3914 霍公鳥。今し來鳴かば、萬代に語り繼ぐべく思ほゆるかも

右は、傳へに或時友人同士の宴會に、霍公鳥が鳴かなかつたので、此歌を作つて、霍公鳥を慕ふ心を陳べた、と言ふことである。併し宴會の場所年月等は訣らない。

山部ノ赤人の鶯の歌

3915 足引きの山谷越えて、野づかさに今は鳴くらむ。鶯の聲

右は、何時何處で出來たものか訣らないが、ともかく聞いたから、記しつけておく。

十六年四月五日、平城の舊宅に歸つて、獨り居て作つた歌。六首

3914 好く昔の某の宴會に、かういふ慶たい鳥が來て鳴いた、と言ふやうな傳へがあるが、此面白い宴會に、今子規がやつて來て鳴いたら、何時々々迄も、誰々の宴會の時に、子規が感じて、來て鳴いたと言ふ風に、人が傳説として、語りついで行きさうに思はれることだ。

3915 幾曲りした山の谷を越えて、鶯が今頃ちようど、野の高みで、鳴いて居るだらう。

3916 橘の匂へる香かも。霍公鳥鳴く夜の雨に、うつろひぬらむ

3917 霍公鳥。夜聲懷し。網さゝば花は過ぐとも、かれずか鳴かむ

3918 橘の匂へる園に、霍公鳥鳴くと人告ぐ。網さゝましを

3919 青丹好し奈良の都は古りぬれど、もと霍公鳥鳴かずあらなくに

3920 鶉鳴く古家と人は思へれど、花橘のにほふ此宿

3921 杜若衣に摺り著け、健男の著襲ひ、狩りする月は來にけり

天平十八年正月、雪が深く降つて、數寸も積つた時、左大臣橘（諸兄）卿、大納言藤原豐成並びに諸王群臣ひき連れて、太上天皇（元正）

3916 子規が夜鳴いて居る。この夜の雨の爲に、畫灰めいて、匂うて來た橘の香が、或は今頃は消えて、なくなつて了つたかも知れない。

3917 子規よ。其夜鳴く聲が懷しい。それで網をかけておいたら、橘の花は散り失せて了つても、と絶えることなく、何時も來て、鳴くであらう。

3918 橘の花が灰めいて居る前栽に、子規が來て、鳴いて居る、と人が知らせた。早く網を張りたいものだ。

3919 奈良の都は、寂れて了つたけれども、昔馴染みであつた子規が、鳴かないではない。やはり鳴いて居る。

3920 寂れ果てた、鶉の棲んで鳴くやうな家だ、と皆は詰らなく思うて居るけれど、橘の花が、好い香に灰めいて居る。此懷しい屋敷よ。

3921 菖蒲の花を著物に摺り著けて、立派な男達が上に著襲ねて、藥狩りをする月は、もうやつて來た。

の御所に、參入して、雪降りの御見舞ひを申し上げた。そこで詔を下されて、大臣參議諸王をば、大殿の上に御呼び寄せになり、三位以下五位以上の人をば、南の細殿にゐさせて、酒を下されて、御宴會のあつた其時、詔があつて、汝諸王卿等、些か此雪を賦せよ、と仰せられたので、めい〳〵に復奏した歌。

左大臣橘ノ宿禰詔に應じて作つた歌

3922 降る雪の白髪迄に、大君に仕へ奉れば、尊くもあるか

紀ノ清人、詔に應じて奉つた歌

3923 天の下すでに覆ひて降る雪の、光り

3922 此降つて居る雪が白いやうに、眞白な頭になる迄、天皇陛下にお仕へ申して居たことを思ふと、自分乍ら、此白髪さへも尊く、老耄た自分も、尊いやうに思はれる。

3923 天下中をすつかりと引つくるめて、降り埋んで居た雪が、

を見れば、尊くもあるか

紀ノ男梶、詔に應じて奉つた歌

3924 山の峽其處とも見えず、一昨日も、昨日も、今日も雪の降れゝば

葛井ノ連諸會、詔に應じて奉つた歌

3925 新しき年の始めに、豐の年兆すとならし。雪の降れるは

大伴ノ家持、詔に應じて奉つた歌

3926 大宮の内にも外にも光る迄、降れる白雪、見れど飽かぬかも

其他、藤原ノ豐成・巨勢ノ奈氐麿・大伴ノ牛養・藤原ノ仲麿・三原ノ王・

輝くやうな御威光を仰ぎ奉るのは、尊いことだ。

3924 一昨日も又昨日も、其上今日迄も、雪が降つて居るので、山と山の谷とが、どの邊とも訣らない。（峯も谷も、同じやうになつて了つた。佳作。）

3925 改つた年の始めに、雪の降つたのは、豐かに出來る作物の前兆をする、と言ふ積りに違ひない。（佳作。）

3926 御所の内にも、外にも、雪が光り輝く程降つて居るのは、幾ら見ても滿足しないことだ。

智努ノ王・船ノ王・邑知ノ王・山田ノ王・林ノ王・穂積ノ老・小田ノ諸人・小野ノ綱手・高橋ノ國足・太ノ德太理・高丘ノ河内・秦ノ朝元・楢原ノ造東人等の諸王卿の歌も、順次に奏上したものであるが、其場で書き留めておかなかつたので、なくなつて了うた。其奏ノ朝元に對して、左大臣橘卿が戯れに、こんなにまづい歌を作るなら、麝香を贖品に出せ、と言うたので、茲に載せないことにした。

大伴ノ家持、天平十八年閏七月、越中ノ守に任ぜられたので、その月の中に、任地に行つた時に、姑の大伴ノ坂上ノ郎女が贈つた歌。二首

3927 草枕旅行く君を、さきくあれと、齋

3927 旅に出かけるあなたをば、無事に入らつしやるやうに、と

べ据ゑつ。我が床の邊に

3928 今の如戀しく、君が思ほえば、如何にかもせむ。する術のなさ

又、越中の國へ向けて送つた歌。二首

3929 旅にいにし君しも、つぎて夢に見ゆ。我が片戀ひの繁ければかも

3930 道の中國の御神は、旅行きも爲知らぬ君を、めぐみ給はな

平群氏ノ處女越中ノ守大伴ノ家持に贈つた歌。十二首

3931 君に依り、我が名は、すでに龍田山。絶えたる戀ひの繁き頃かも

3932 須磨人の海邊常去らず燒く鹽の、辛き戀ひをも、吾はするかも

あなたのをられた床の邊に、神に奉る神酒を盛る壺を据ゑて、祀つて居ることです。

3928 何時迄たつても、此別れ際の今のやうに、あなたが戀しう思はれることだつたら、どうすれば宜しいでせうか。何とも爲方のないことよ。

3929 旅に出かけたあなたが、絶え間なく、夢に現れて入らつしやる。之は別に、あなたに心があると言ふ理ではなくて、私許りが、片思ひをして居る其心が、甚いからでありませうか。

3930 北陸道の眞中の、越中の國の神樣は、此旅をした經驗もない、いとしい方を愛して、憐れをお垂れ下さい。

3931 あなたの爲に、私の名はすつかりと擴つて、此龍田山ではないが、立ちました。併し只今は、二人の仲は切れて居るのである。其切れた人を思ふ心が、非常な、今日此頃であります事よ。

3932 須磨の人が海岸で、何時も燒いて居る鹽ではないが、辛い術ない戀ひを、自分がすることだ。

3933 ありさりて今も逢はむと思へこそ、
露の命も繼ぎつゝ渡れ

3934 なか〳〵に死なば易けむ。君が目を
見ず久ならば、術なかるべし

3935 隱沼の下從戀ひ餘り、白波の著く出
でぬ。人の知るべく

3936 草枕旅にしば〳〵かくのみや、君を
やりつゝ、我が戀ひをらむ

3937 草枕旅いにし君が、歸り來む月日を
知らむ、術の知らなく

3938 かくのみや、我が戀ひをらむ。ぬば
玉の夜の紐だに、解きさけずして

3939 里近く君がなりなば、戀ひめやと、
もとな、思ひし我ぞ悔しき

3940 萬代に心は解けて、我が夫子が捻み

3933 かうしてやつて行つて、將來には逢はう、と思うて居れば
こそ、露のやうな脆い命も、繼ぎ乍ら、生きて居ることで
あります。

3934 一層のこと死んで了つたら、心持ちが落ち著くであらう。
こんなにして、いとしい人の顏を見ないで、をることだか
ら、遣る瀨ないことだらう。

3935 隱れた沼ではないが、心の底で焦れ切れないで、波が立つ
やうに目立つて、表へ顯れたことだ。人が悟る程に。

3936 此樣に旅に許り度々、思ふお方をお出し申して、焦れて居
なければならんのでせうか。

3937 旅に出かけたお方の、歸つて入らつしやる月日をば知る方
法が、訣らないことだ。どうぞして知りたい。

3938 こんなに、私許りが焦れてをらねばならんのだらうか。夜
寢る著物の紐さへも解き放さずに、何時迄も、一人寢て居
なければならんか。

3939 自分の住んで居る里近くへ、あなたがお出でになることに
なつたら、もう焦れることがないだらう、とはかなくも思
うて居た豫期に反して、(恭仁の都から歸ると、直又、越中
へ行かれて、) 自分の愚さが、齒痒くてならん。

3940 何時迄も長く添ひ遂げよう、と爭うた末に、心が融和して

し手見つゝ忍びかねつも

3941 鶯の鳴く暗谷にうちはめて、燒けは
死ぬとも君をし待たむ

3942 松の花。花數にしも、我が夫子が思
へらなくに、もとな、咲きつゝ

右十二首は、時々の便に寄した歌
で、一度に贈つたものではない。

八月七日の夜、大伴ノ家持の
宿舍に集つて、宴會した時
の歌

3943 秋の田の穗向き見がてり、我が夫子
が、多量手折り來る女郎花かも

右一首は、越中ノ守大伴ノ家持の歌。

3944 女郎花咲きたる野邊を行き廻り、君
を思ひ出徘徊り來ぬ

言うたあの時に、いとしいお方が、捻られた自分の手の斑
點を見乍ら、焦れて、辛抱が出來ないことだ。

3941 こんなに思ひ込んだ結果として、火葬場のある暗谷にはめ
られて、燒け死んで了はねばならん程衰へても、尙、あな
たを待つて居ませう。

3942 自分は松の花だ。それで、あの方が自分を、花の數とも思
うて居て下さらないのに、甲斐なくも咲いて居ることだ。
(此松の花の譬喩は、當時の譬喩としては、破天荒のもの
であつたのだらう。佳作。)

3943 秋の田の稻の出來榮えを見物する傍、あなたがこんなに
澤山、女郎花をば手折つて入らつしやつたことだ。(是は、
池主の贈した女郎花を、詠んだのである。)

3944 女郎花の咲いて居る野を、彼方此方と歩き廻り乍ら、あな
たのことが思ひ出されたので、うね〳〵廻りくねつて、や
つて來たことです。

3945 秋の夜は明時寒し。白栲の妹が衣手
著む由もがも

3946 霍公鳥。鳴きて過ぎにし岡邊から、
秋風吹きぬ。よしもあらなくに

右三首は、越中ノ掾大伴ノ池主の歌。

3947 今朝の朝明。秋風寒し。遠つ人雁が
來鳴かむ、秋近みかも

3948 天離る鄙に月經ぬ。然れども、結ひ
てし紐を、解きもあけなくに

右三首、家持の歌。

3949 天離る鄙にある我を、うたかたも、
紐解きさけて、思ほすらめや

右、池主の歌。

3950 家にして結ひてし紐を、解きさけず、
思ふ心を誰か知らむも

3945 秋の夜は夜明けが冷えてたまらない。いとしい人の著物を貰つて、著る訣には行かないだらうか。（と思ふものゝ、家遠き旅の身である。）

3946 子規が鳴いて、行つて了つた、此岡の邊の家をば、もう秋風が吹き出したことだ。自分の心を晴す人も居ないのに。

3947 今日の夜の引き明け方は、風が冷たいことだ。もう遠方からやつて來る客の、雁が來る。秋が近いからだらう。

3948 地方の田舍で、幾月もたつたことだ。併し乍ら、いとしい人が結んでくれた、下裳の紐は、解きもしないことだ。

3949 こんな田舍にをる自分をば、ほんの暫らくの間でも、紐を解き廣げて居る、と思うて入らつしやる、と言ふ理がありませうか。

3950 家に居た時分に、いとしい人が結んでくれた紐を、他の人の爲に廣げたりしないで、焦れて居る心を、誰が知つて居よう。あの肝心の人は、知らないかも知れん。

右、家持の歌。

3951 蜩の鳴きぬる時は、女郎花咲きたる
野邊を、行きつゝ見べし

右一首、越中ノ大目秦ノ八千島の歌。

其席で謠はれた古歌（大原ノ高安の歌だ、と傳へるもの。）

3952 妹が家にいくりの杜の藤の花。今來
む春も、常かくし見む

此歌を歌ひ傳へたのは、僧玄勝である。

3953 雁がねは使ひに來むと、騒ぐらむ。
秋風寒み、其川の邊に

3954 馬竝めていざ打ち行かな。澀谷の清
き磯回に寄する、波見に

右二首、家持の歌。

3951 蜩の鳴いて居る夕暮れには、女郎花の咲いて居る野を歩きながら、約束した人に逢ふが好い。

3952 いとしい人の家に、行くと言ふ名の、伊久理の杜の藤の花は、之から先、やつて來る春にも、何時も〳〵、かうして眺めよう。

3953 いとしい人の住んで居る家の邊の川、即佐保川の邊では、已に雁が此方へ使ひに來よう、と騒がしく鳴いて居ることであらう。（只妹の家の邊に、雁が鳴いて居るといふことと、いとしい人の便りを聞きたい、と言ふことゝを、一つにして、歌つたのである。）

3954 馬を竝べて、さあ、やつて行かう。あの澀谷のさつぱりとした岩濱に、寄せて來る波を見に。

3955 ぬば玉の夜は更けぬらし。玉櫛笥二上山に、月傾きぬ

右は、史生土師ノ道良の歌である。

越中の大目秦ノ八千島の官舎で宴會のあつた時の歌

3956 奈呉の海人の釣りする舟は、今こそは、舟枻打ちて、あへて漕ぎ出め

此八千島の官舎は、海に面して居たので、此歌が出來たのである。

右八千島の歌。

弟の死んだのを悲しんだ歌。

竝びに短歌。二首

3957 天離る鄙治めにと、大君の任けのまにまに、出でゝ來し我を送ると、青丹よし奈良山過ぎて、泉川清き川原

3955 もう夜は、更けたに違ひない。二上山に月が傾いて居る。

3956 奈呉の浦の海人が釣りをする舟は、潮が出て來たから、今舟枻をたゝき乍ら、思ひ切つて、漕ぎ出すことであらう。

3957 地方を治めに行くとて、天皇陛下の御命令の通りに、家を出てやつて來た自分を送らう、と奈良山をば通り過ぎ、泉川のさつぱりとした川原で、馬を止めて別れた時に、達者で歸つて來よう、どうか無事なやうに神樣に祈つて、待つ

に、馬止め別れし時に、さきく行きて、我歸り來む。平けく齋ひて待てと語らひて來し日の極み、玉桙の道をた遠み、山川のへなりてあれば、戀しけく日長きものを、見まく欲り思ふ間に、玉梓の使ひの來れば、嬉しみと我が待ち問ふに、およづれのたは言とかも、はしきよし、汝弟の命。何しかも時しはあらむを、旗薄穗に出づる秋の、萩が花匂へる宿を、朝庭に出で立ちならし、夕庭に蹈み平げず、佐保の内の里を行き過ぎ、足引きの山の木末に白雲に、立ち棚引くと、我に告げつる

反歌

て居てくれ、と話し合うて、別れて、やつて來た日きりで、距離が遠く、山川が隔つて居る爲に、戀しくもあり、月日が長く立つたので、早く逢ひたく思うて居る時分に、ちようど使ひがやつて來たので、嬉しいことだ、と自分が待ち受けて、問うた所が、咒の馬鹿な話とでも言はうか、（どうしても信ずることが出來ないが）可愛いゝ我が弟さんに、死ぬ時もあらうのに、何故好きだと言うて居た薄が、穗となつて出る秋の、萩の花が美しく咲いて居る屋敷の中の庭をば、朝庭の散歩に出て、歩き廻りもせず、日暮れの庭の散歩に蹈んで歩きもせずに、佐保の領内の里を通り過ぎて行つて、山の木の先に白雲となつて、かゝつて居る、と私に、其使ひが告げたことだ。（本文には、「萩の花匂へる宿を」の次に、言ふは斯人の性たる、花草・花樹を好愛して、多く寢院の庭に植ゑにき。故に、是を花匂へる庭と言へるなり、と註して居る。）

3958 まさきくと言ひてしものを、白雲に
立ち棚引くと、聞けば苦しも

3959 かゝらむとかねて知りせば、越ノ海の
荒磯の波も見せましものを

右は、天平十八年の九月廿五日に、大伴ノ家持が、弟が死んだことを、遥かに聞いて悲しんで作つたものである。

相歡ぶ歌。二首

3960 庭に降る雪は千重敷く、しかのみに
思ひて、君を吾が待たなくに

3961 白波の寄する磯曲を漕ぐ舟の、檝と
る間なく思ほえし君

○

3958 自分に達者に居てくれと言うて居たのに、（火葬されて、）白雲となつて、空に懸つて居る、と聞いたので、恐しいことだ。

3959 こんな風にならう、と前から知つて居たならば、越の國の海の岩濱に打ちつける、荒い波の容子も、見せて置きたかつたのに。

3960 庭に降つて來る雪は、幾重とも知れぬ程降つて參りますけれども、僅かそれ許り思うたゞけで、私はあなたを待つて居たのではありません。（雪よりも深く、思うて待つて居ました。）

3961 波が寄せて來る岩濱の入り込みを、漕いで行く舟が、隙き間もなく梶をとるやうに、一寸の隙きもなく、あなたのことが、思はれてなりませんでした。

（是は天平十八年八月に、掾大伴宿禰池主が大帳使について、京都へ出かけて、十一月に任國へ歸つて來た。それで詩を作り、酒を呑む宴會を催して、樂しんだ。此日、思ひがけなく、雪が降つて、一寸餘りも積つた。その時又、漁夫の舟が海に出て、波に浮んで居るのが見えた。そこで、主家持が、雪と海との二つの眺めに、心を寄せて作つたのである。）

忽、枉疾に沈み、殆、泉路
に臨める時、謌詞を作りて、
以て悲緒を申べたる歌。一
首並びに短歌

3962 大君の任けのまに〳〵、健男の心振
り起し、足引きの山坂越えて、天離る鄙に下り來、息だにも未休めず、
年月も幾らもあらぬに、うつそみの
世の人なれば、打ち靡き床にこい伏
し、いたけくの日に日に優る。たら
ちねの母の命の、大舟のゆくら〳〵
に、下戀ひに何時かも來むと待たす
らむ、心さぶしく、はしきよし妻の
命も、明けくれば門に倚り立ち、衣
手を折り返しつゝ、夕されば床うち

3962 天皇陛下の御命令の通りに、立派な男の決心を奮ひ起して、山坂をば越えて、遥かな田舍へ下つて來て、息さへもまだ息めず、歳月も幾らもなつて居ないのに、肉體を持つた人間世界のことだから、床に倒れて寢て、病氣が、一日々々と募つて行く。家では、お母さんが心を動搖さして、落ち著かないで、口には表さないけれど、心中に焦れて、何時になつたら歸つて來るだらう、と待つて入らつしやる筈の心持ちを思ふと、悲しくなつて來るし、可愛いゝ女房が、夜が明けると、門に凭れて立ち、日暮れになると、著物を裏返しに著て、寢床を掃ひ清めて、黑い髪を下敷きに寢て、早く歸つてくれば好い、と嘆いて居ることだらうよ。若い、小さな子どもは、男も女も凡て家の彼方此方で、大聲で泣いてゐることだらう。道が遠い爲に、使ひをやる訣にも行かず。言ひたいと思ふ話も、人に言ひつけてもやらずに、焦れて居る爲に、心は燃え立つて居る。それを思へば、命が惜しいけれど、どうする目的も立たないので、爲方なく、

掃ひ、ぬば玉の黒髪敷きて、何時しかと嘆かすらんぞ。女も男も若き子どもは、遠近に騒ぎ泣くらむ。玉梓の道をば遠み、間使ひもやる由もなし、おぼゝしき言傳てやらず。戀ふるにし、心は燃えぬ。玉きはる命惜しけど、せむ術のたどきを知らず、かくしてや、健男すらに嘆き伏せらむ

反歌

3963 世の中は數なきものか。春花の散りのまがひに、死ぬべき、思へば

3964 山川のそきへを遠み、はしきよし妹を相見ず、かくや嘆かむ

右は、天平十九年二月廿日、越中ノ

猛々しい男であり乍ら、こんなにして嘆き乍ら、寢て居ねばならんだらうか。

3963 人間世界と言ふものは、生きて居る歳月の、數の尠いものだ。春咲く花が、邊をかき暗して散る時分に、死にさうなのを考へると。

3964 山や川の果ての遥かな處に、いとしい人が居る爲に、可愛いゝ人に逢うて見ることが出來ないで、何時迄もかうして、嘆いて居なければならんだらうか。

國守の官舍で、病氣で寢て居て、悲しんで作つた歌。

守大伴ノ家持、掾大伴ノ池主に贈れる悲しみの歌。二首

忽、枉疾に沈み、旬を累ねて痛だ苦しみ、百神を禱り恃みて、且消損することを得たり。而して身體の疹羸、筋力の怯軟なるに由りて、未展謝するに堪へず、係戀すること彌深し。方今春朝の春花、馥りを春の苑に流し、春暮の春鶯、聲を春林に囀る。此節候に對して、琴罇翫ぶべし。興に乘ずる感ありと雖も、杖を策く勞に耐へず。獨り帷幄の裏に臥して、聊か寸分の調を作り、机下に輕奉して、犯りに玉頤を解く。其詞に曰はく、

3965 春の花今は盛りに匂ふらむ。折りて

3965 もう今では、春の花が今を頂上と、はでに咲いて居るであ

かざゝむ手力もがも

3966 鶯の鳴き散すらむ春の花。何時しか君と、手折りかざゝむ

天平廿年二月廿九日　　大伴ノ宿禰家持

忽、芳音を辱くし、翰苑雲を凌ぎ、兼ねて倭詩を垂る。詞林錦を舒べ、以て吟じ、以て詠じ、能く繼緒を蠲ぐ。春は樂しむべし。暮春の風景最怜むべし。紅桃灼々として、戲蝶花を回りて舞ひ、梨柳依々として、嬌鶯葉に隱れて歌ふ。樂しむべきかな。淡交席を促し、得意言を忘る。樂しいかな。幽襟賞するに足らむ。豈慮らんや、蘭蕙叢を隔て、琴罇用ゐるなく、空しく令節を過さむとは。物色人を輕ぜむや。怨むる所は、

此にあり。默止すること能はず。俗に言はく、藤を以て錦に續ぐと。聊か談咲に擬すのみ。

3967 山峽に咲ける櫻を、只一目君に見せてば、何をか思はむ

3968 鶯の來鳴く山吹。うたかたも、君が手觸れば、花散らめやも

沽洗二日　　掾大伴ノ宿禰池主

更に贈つた歌。竝びに短歌

含弘の德、恩を蓬體に垂る。貲せざるの思、陋心を報慰す。來著を載荷して、所喻に堪ふるなし。但、稚時遊藝の庭を涉らざるを以て、横翰の藻自ら彫蟲に乏し。幼年末山柿の門に逕らず、裁歌の趣詞は叢林に失す。爰に、藤を以て錦に續ぐと言ふ言を辱くして、更に石

3967 谷間に咲いて居る櫻をば、僅か一目だけでも、あなたにお見せ申すことが出來たら、それで胸が晴れて、何の思ひも殘らないでせう。

3968 鶯の來て鳴く山吹の花は、一寸の間でも、あなたの手に觸れない中は、散る氣遣ひは御座いますまい。

を將ちて瓊に同じくする詠を題す。
因是、俗愚の僻癖にして默止すること能はず。仍りて數行を捧げ式ちて嗤咲に酬ゆ。其詞に曰はく、

3969 大君の任けのまに〳〵、しなざかる越を治めに、出でゝ來し健男我すら、世の中の常しなければ、打ち靡き床にこい伏し、いたけくの日に日に增せば、悲しけくこゝに思ひ出、いらなけく其所に思ひ出、嘆くそら安けなくに、思ふそら苦しきものを、足引きの山來隔りて、玉桙の道の遠けば、間使も遣る由もなみ、思はしき言も通はず。玉きはる命惜しけど、せむ術のたどきを知らに、隱り居て思ひ嘆かひ、慰むるに心はなしに、春花

3969 天皇陛下の御命令通りに、遙かな地方の越の國を治める爲に、出かけて來た、立派な男の自分さへも、此世界が無常なので、なよ〳〵と寢床に寢て、體の辛いことが、一日一日と募つて行くので、或時は悲しい心持ちが湧いて來たり、或時は非常にいらつて來たりして、嘆く心持ちが落ち著かないで、色々と焦れる心持ちが苦しいのに、山をば遠く隔てゝやつて來て、距離が遠いから、時偶の使ひも遣る手段がなく、言ひたいと思ふ便を、通はすことも出來ず。命は惜しいけれども、何として好いか、手段も訣らないで、引き籠つて居て、嘆いて居るので、それを慰める心も起らずに、春の櫻の花が咲いた頂上の頃に、仲の好い人同志折つて頭に插す、といふこともせず。春の野の茂つた木の間を飛び潛つて鳴く、鶯の聲さへもせず。娘達が若菜を摘む爲に、紅で染めた赤い裳の裾が、春雨でぼと〳〵に濡れて、往來して居る面白い頂上の時分を、無駄に過しやつて了つたので、私のことを思うて居て下さる、あなたの心を有難く思うて、夕は夜通し寢もしないで、日も亦一日、あなた

の咲ける盛りに、思ふどち手折りかざゝず。春の野の茂み飛び潛く、鶯の聲だに聞かず。處女等が若菜摘ますと、紅の赤裳の裾の、春雨に匂ひ漬ちて、通ふらむ時の盛りを徒らに過ぐしやりつれ、偲ばせる君が心を、美はしみ、此夜すがらに、寢も眠ずに、今日もしめらに、戀ひつゝぞをる

3970 足引きの山櫻花。一目だに君とし見なば、吾戀ひめやも

3971 山吹の茂み飛び潛く鶯の、聲を聞くらむ君はともしも

3972 出で立たむ力をなみと隱り居て、君を戀ふるに心どもなし

を焦れて居ることです。

3970 山の櫻の花を、あなたと一處に一目でも見たら、こんなに、焦れることはないでせうのに。

3971 山吹の繁つた所を、飛び潛り廻る鶯の聲を聞いて入らつしやる筈の、あなたはお羨しいことだ。

3972 外へ出る力がないからとて、家に引き籠つて居て、あなたに焦れて居る爲に、元氣も御座いません。

三月三日　　大伴ノ宿禰家持

七言。晩春三日遊覽歌。一首

竝びに序

上巳の名辰、暮春の麗景、桃花臉を照し、以て紅を分ち、柳色は若を含みて、綠を競へり。時に手を携りて、曠かに江河の畔を望む。酒を訪ねて、迥に野客の家に遇ひぬ。既にして琴罇性を得て、蘭契光りを和す。あゝ今日にして恨むる所は、德星已に少ることか。若し寂を扣へず。章を含み、何ぞ以て逍遙の趣を攄らむ。忽短筆に課して、聊か四韻を勒すと言ふ。

餘春ノ媚日宜ニ怜賞ニ一ヲ
上巳風光足ニ覽遊ニ一
柳陌臨レ江縟ニ茲服ニ一ヲ
桃源通レ海泛ニ仙舟ニ一ヲ

雲罍酌レ桂三清ヲ湛ヘ
羽爵催レ人九曲流ル
縱醉陶心忘レ彼我ヲ
酩酊無ニ處不ニ淹留ル

三月四日　　大伴ノ宿禰池主

昨日は短懷を述べ今朝は耳目を汚す。更に賜書を承け、且不次を奉る。死罪謹言。下賤に遺れず、頻りに德音を惠まる。英雲星氣逸調、人に過ぐ。智水仁山既に琳瑯の光彩を韞し、潘江陸海、自ら詩書の廊廟に坐して、思ひを非常に聘せ、情を有理に託し、七歩にして章を成し、數篇紙に滿つ。巧に愁人の重患を遣り、能く戀者の積思を除く。山柿の歌泉は、此に比すれば蔑るが如し。彫龍の筆海は、粲然として看るを得たり。方に僕の幸あるを知りぬ。敬ひて、歌に和す。其詞に言はく、

3973 大君の命畏み、足引きの山野障らず、天離る鄙も治むる健男や、何か物思ふ。青丹よし奈良路來通ふ玉梓の使ひ絶えめや。隱り戀ひ息づき渡り、下思ひに嘆かふ吾が夫、古ゆ言ひ次ぎ來らく、世の中は數なきものか、慰むることもあらむと、里人の我に告ぐらく、山邊には櫻花散り、かほ鳥の間なくしば鳴く。春の野に菫を摘むと、白栲の袖折り返し、紅の赤裳裾引き、處女等は思ひ亂りて、君待つとうら戀ひすなり。心ぐし。いざ見に行かな。ことはたな知れ

反歌

3974 山吹は、日に日に咲きぬ。美しと我

3973 天皇陛下の御命令を畏まつて、山や川などの立ち塞がつて居るのも、事ともせず、地方を治める所の、立派な男なるあなたが、何をくよ〳〵お思ひになることがありませうか。茲から奈良への間を、始終やつて來る使ひが、絶えることがありませうか。心の底に焦れて、嘆息を吐き通しに吐いて、上面に出さずに、内心で思うて、嘆いて入らつしやるあなたより、昔から、語り次いで參つて居ることですが、此世界と言ふものは、長くは續かないものだ、と申しますが、せめては、心を宥めることもあらうか、と案じて、近所の人が私に申しますには、山の邊には櫻の花が散つて、かほ鳥が斷え間なく鳴いて居ます。それから又、春の野に出て菫を摘まう、と袖をまくり上げて、紅染めの赤い上裳の裾を曳き乍ら、娘達は、あなたの戀しさに煩悶して、お待ち申して逢はう、と焦れて居ることであります。氣の毒に思はれますから、さあ見に參りませう。其お積りで居て下さい。

3974 山吹は、一日々々と咲き募つて參りました。心の内で大事

が思ふ君は、しく〳〵思ほゆ

3975 吾が夫子に戀ひ、術なかり。葦垣のよそに嘆かふ我し悲しも

三月五日　大伴ノ宿禰池主

昨暮使を來して、幸にも、以ちて晩春遊覽の詩を垂れ、今朝信を累ねて、辱くも、以ちて相招望野の歌を貺ひぬ。一には、玉藻を看て、稍鬱結を瀉ぎ、二には、秀句を吟じて、已に愁緒を蠲く。此を眺翫するに非ざるよりは、孰れか能く心を暢べめや。但惟ふに、下僕稟性は彫し難く、闇神は瑩すること靡し。翰を握りて毫を腐し、研に對して渴くを忘る。終日因流して之を綴ること能はず。所謂文章は、天骨にして、習ひて得るにあらず、豈字を探り、韻を勒し、雅

3975 に、私の思うて居るあなたのことが、此頃間斷なしに思はれます。あなたに焦れて、遣る瀬なう思うて居ます。お側にも居られないで、外で溜め息を吐いて居る私は、悲しいことであります。

篇に叶和するに堪へめや。抑、聞くに、鄙里の少兒も故人の言は酬いずと言ふことなしてへり。聊か拙詠を裁して、敬みて解咲に擬す。如今言を賦し、韻を勒して、斯の雅作の篇に同にす、豈石を將て瓊に同じくするに殊ならめや。唱聲して遊歩する曲に、小兒謠を濫るに譬へむ。敬みて葉端に寫し、式ちて亂に擬へて曰く、

七言。一首

抄春餘日媚景麗
初巳和風拂自輕
來燕街泥賀入宇
歸鴻引蘆廻赴瀛
聞君簫呂新流曲
禊飲催觴泛河清

雖欲追尋此良宴
還知染襖脚跡町

短歌。二首

3976 咲けりとも知らずしあらば、默もあらむ。此山吹を見せつゝ。もとな

3977 葦垣の外にも君が凭り立たし、戀ひけれこそは、夢に見えけれ

三月五日、大伴ノ家持病に臥して作る。

戀しき緒を陳べたる歌。竝びに短歌。四首

3978 妹も吾も心は同じ。たぐへれどいや懷しく、相見れば常初花に、心ぐし、目ぐしもなしに、はしけやし吾がおく妻、大君の命畏み、足引きの山越え野行き、天離る鄙治めにと、別れ

3976 咲いたとも、知らないでをつたら、其儘でもをられようのに、惣ひ心なく、山吹を見せなすつたことだ。

3977 葦で拵へた垣の外側にでも凭れよつて、焦れてゐなさるかして、夢に現れなさつたことだ。

3978 いとしい人も自分も、心は一つである。一處に竝んで居ても、非常に懷しく思はれ、見る度毎に何時でも、初花を見たやうに珍しく思はれて、心も痛む程可愛ゆく、目も痛む程愛らしいことは非常である。其自分の心底に思ひ込んで居るいとしい人と、「天皇陛下の仰せを畏つて、山を越え野を通つて、地方を治めに行く。」と言うて別れて來た、其日限りに、年が變つて來、咲いて居た春の花が、色が褪せて

來し其日の極み、荒玉の年行き還り、春花のうつろふ迄に、相見ねばいたも術なみ、敷栲の袖返しつゝ寢る夜落ちず、夢には見れど、現にし直にあらねば、戀しけく千重に積りぬ。近からば、歸りにだにも打ち行きて、妹が手枕さし交へて寢ても來ましを、玉鉾の道間遠く、關さへにへなりてあれこそ、よしゑやし由はあらむぞ。子規來鳴かむ月に、何時しかも早くなりなむ。卯の花の匂へる山を、外のみも振りさけ見つゝ、近江路にい行き乘り立ち、青丹よし奈良の我家に、ぬえ鳥のうらなけしつゝ、下戀ひに思ひうらぶれ、門に了ふ迄になつても、逢はないで居るので、非常に遣る瀬なさに、著物を裏返して寢る夜一晩のおちもなく、夢には見て居るけれど、正氣でと言うては、直に逢うて居る訣ではないから、戀しいことは、幾重にも積つたことだ。それで家が近ければ、一寸行つて、直ぐ歸る、と言ふ風にでも、馬に乘つて行つて、いとしい人の手枕を差し交して、共寢して來ようのに、道の距離が遠くて、其上、關所迄が間を隔てゝ居るから、行けないので、儘よ何とか方便が立つであらう、と思ひ乍ら、子規が鳴いて來る四月頃に、早くなれば好い。さうすれば、都へ歸る旅をして、卯の花の咲き出して居る、方々の山を、遠く見やりつゝ行き過ぎて、近江の湖水の水路を、舟に乘つて行つて、奈良の我が家で溜め息吐き乍ら、心の底で深く思うて、しよんぼりとして表に出て、日暮れの辻占を聞き乍ら、自分を待つて、寢て居る筈のいとしい人をば、早く逢うて見たいものだ。

立ち夕占問ひつゝ、我を待つと寢すらむ妹を、逢ひて早見む

反歌

3979 あら玉の年還る迄相見ねば、心もしぬに思ほゆるかも

3980 ぬば玉の夢には、もとな、相見れど、直接にあらねば、戀ひ止まずけり

3981 足引きの山來へなりて遠けども、心し行けば、夢に見えけり

3982 春花のうつろふ迄に逢ひ見ねば、月日讀みつゝ妹待つらむぞ

右、三月廿日、夜中忽にして戀しき緒を起して、作りぬ。大伴ノ宿禰家持。

夏立ち、四月已に數日を經

3979 年が立ち代つて來る迄、長く互ひに逢うて見ないので、心も萎えてへと〳〵になつて、思はれることだ。

3980 夢の上では逢うて居るけれど、實際、直接逢うて居る訣でないから、心細くて、焦れる心が止まないことだ。

3981 幾重にも、山をば隔てゝ、やつて來たので、間は遠いけれども、心が通うて居るから、夢に現れたことだ。

3982 春の花が、衰へて了ふ時分迄逢はないで居るから、いとしい人は月日を數へ乍ら、自分の歸りを待つて居るだらうよ。

て、尙霍公鳥の鳴くを聞かず。依りて作れる恨み歌。

二首

3983 足引きの山も近きを、霍公鳥、月立つ迄に何か來鳴かぬ

3984 玉に貫く花橘を乏しみし、此我が里に來鳴かずあるらし

霍公鳥は立夏の日來鳴くこと必定なり。又越中の風土橘稀なり。之に依りて、大伴ノ家持懷を感發して、聊か此歌を作りぬ。(三月廿九日)

＊

二上山の賦。一首竝びに短歌。二首

3985 射水川い行き廻れる、玉櫛笥二上山

3983 山も近くだのに、四月も濟み、次の月が來る迄の間、どうして、來て鳴かないのだらう。

3984 此自分の住んで居る里に來て鳴かないのは、五月の藥玉に貫す橘の花をば、尠く思うて、鳴かないのに違ひない。

3985 射水川の流れが流れて取り卷いて居る、かの二上山は、花

は、春花の咲ける盛に、秋の葉の匂へる時に出で立ちて、振り離け見れば、神からや、そこば尊き。山からや、見が欲しからむ。皇神の裾曲の山の澀谷ノ崎の荒磯に、朝風ぎに寄する白波、夕風ぎに滿ち來る潮のいや益しに絶ゆることなく、古ゆ今のをつゝに斯しこそ、見る人毎にかけて忍ばめ

反歌

3986 澀谷ノ崎の荒磯に寄する波、彌しくしくに、古思ほゆ

3987 玉櫛笥二上山に鳴く鳥の聲の、戀しき時は來にけり

右三月卅日、興に依りて作りぬ。

の咲いて居る頂上か、或は、秋の黃葉の華美な色をして居る時分に、表へ出て遥かに見やると、此山の神樣の所以で、さう見えるのか知らないが、非常に氣高く思はれる。又は、山自身立派な所爲か、それで見飽きのしないことなのだらうか。二上山の神の山の麓の山である澀谷山の、突き出た崎の荒い岩濱に、朝風ぎの時分に寄せて來る潮のやうに、昔から、現在目前の今迄、彌甚く、とぎれることなく、見る人毎に口に言うて、其景色を慕うて居ることであらう。

3986 澀谷山の山の崎の荒い岩濱に、打ち寄せて來る波ではないが、彌間斷なく、昔此山にあつたことなどが、思はれることだ。

3987 二上山に鳴いて居る鳥の聲が、戀しく懷しく思はれる時分が、やつて來たことだ。(此は、子規であらう。)

大伴ノ家持。

四月十六日夜中遙かに、霍公鳥の聲を聞いて、思ひを陳べた歌

3988 ぬば玉の月に向ひて、霍公鳥鳴く音遙けし。里遠みかも

右、大伴ノ家持。

越中ノ大目秦ノ八千島、守大伴ノ家持を餞した酒宴の歌。二首

3989 奈呉の海の沖つ白波、しく〳〵に思ほえむかも。立ち別れなば（八千島）

3990 吾が夫子は玉にもがもな。手に纏きて、見つゝ行かむを。置きてゆかば惜し（家持）

3988 月の前で鳴いて居る、霍公鳥の鳴く聲が、遠く聞えることだ。あの鳴いて居る邊は、茲の里から遠いからだらうか。

3989 此奈呉の海に立つて居る、沖の方の浪ではないが、間斷なく、あなたのことが思はれることであらう。別れて行つたならば。

3990 あなたが、玉でゞもあつて下されば好い。さうすれば、手に纏き附けて、見乍ら旅に出かけようのに。殘して行つたら、殘念なことであらう。

右守大伴ノ宿禰家持正税帳を以て、京に入らうした。仍で此歌を作つて、相別の嘆を陳べた。（四月廿日）

布勢ノ水海を遊覽せる歌。一首並びに短歌。一首

3991 丈夫の八十伴緒の思ふどち、心やらむと馬竝めて、遠近波濤の白波の荒磯に寄する澀谷ノ崎たもとほり、松田江の長濱過ぎて、宇納川清き瀨毎に鵜川立ち、か行きかく行き見つれども其も飽かにと、布勢ノ海に舟浮け据ゑて、沖邊漕ぎ、邊に漕ぎ見れば、汀にはあぢ群騒ぎ、島曲には木末花咲き、許多も見の爽きか。玉櫛笥二上山に這ふ蔦の、行きは分れずあり

3991 武人の澤山の役人達の、氣の合うた同士が、心を晴さうと言ふので、馬を竝べて、彼方此方の方で立つ波が、荒い岩濱に寄せて居る澀谷の崎をうろつき乍ら、松田江と言ふ入り江の長い濱を通り過ぎて、宇納川のさつぱりとした川の瀨毎に、鵜を使ふ川の設けをして、彼方へ行き此方へ行きして、見てはゐるけれども、それだけでも、滿足は出來ないと言ふので、布勢の湖に、舟をぢつと浮して、沖の方を漕いで見たり、岸の方を漕いで見たりして眺めると、浪打ち際には、澤山のあぢ群がやかましく鳴いて居るし、島の入り込みには、澤山の木の梢に花が咲いて居て、非常に眺めがさつぱりして居ることだ。それ故、この二上山に匐うて生えて居る蔓ではないが、何時迄も、此地を別れて去ることなく、始終茲へやつて來て、之から先、毎年々々、氣の合うた同士かうして遊ばうよ。今かうして、遊覽して居るやうに。

通ひ、彌年のはに思ふどちかくし遊ばむ、今も見る如

3992 布勢の海の沖つ白波あり通ひ、彌年のはに見つゝ忍ばむ

謹しんで、布勢ノ水海に遊覽せる賦に和する賦。一首竝びに一絶

3993 藤波は咲きて散りにき。卯の花は今ぞ盛りと、足引きの山にも野にも、子規鳴きしとよめば、打ち靡く心もしぬに、そこをしもうら戀しみと、思ふどち馬打ち群れて、たづさはり出で立ち見れば、射水川水門の洲鳥朝凪に濱に漁し、潮滿てば妻呼び交す、乏しきに見つゝ過ぎ行き、澀谷の荒磯の崎に沖つ波寄せ來る玉藻、片寄りに纒に造り、妹が爲手に纏き持ちて、うらぐはし布勢ノ水海に海人舟にま楫かい貫き、白栲の袖振り返し、あともひて、我が漕ぎ行けば、麻生ノ崎花散り紛ひ、汀には葦鴨騒ぎ、漣立ちても居ても、漕ぎ廻り見れども飽かず。秋さらば花の盛りに、かもくも君がまにまと、かくしこそ見も明らめゝ、絶ゆる日あらめや

反歌

3994 白波の寄せ來る玉藻、夜の間も續ぎて見に來む。清き濱邊を

右越中ノ掾大伴ノ池主作りぬ。四月

3992 布勢の海の、沖の方に立つて居る波が、毎々寄せて來るやうに、自分達も始終茲へ來て、此景色を眺めて、此から先、幾年も見て慕うて居よう。

3993 藤の花は、も早散つて了うた。併し卯の花は、今が頂上だと言ふので、山でも野でも、霍公鳥が邊を震動さして鳴くので、自分の心が其爲に、へと〳〵になつて靡くことだ。さうした心持ちを起さす時候の、野山の景色が戀しいことだと言ふので、氣の合うた同士が馬を打つて、澤山一處に、手を連がない許にして出かけて見ると、射水川の川口の水門の洲に居る鳥が、朝の波の風いだ時分に、潟で餌を探してをり、潮がさして來ると、配偶を呼び合うて居る。妻を都に置いて來た身には、其鳥の容子も羨しいので、外目に通り過ぎて、澀谷の荒い岩濱の崎に、ひた寄せに沖の波が寄せて來る、美しい藻をば、纏に拵へて、いとしい人にやらうと思うて、手に纏き附けて持ち乍ら、立派な布勢の水海で、海人の乘る舟に楫をさし、白妙の著物の袖をまくり返して漕ぎ乍ら、伴の者を引き連れ、自分が漕いで行くと、麻生の崎では、卯の花が邊の景色も訣らぬ程に散つて居り、波打ち際には、鴨が騒ぎ、立つて見たり坐つて見たり、色々として、其邊の景色をば、漕ぎ廻つて見ても飽くことがない。秋が來ると黄葉する時分に、春が來ると花の咲いて居る頂上に、何時でもあなたのお伴をして、あなたのお心通り何方へでも從うて、今見たやうに、好く〳〵見知るやうにならう。決して茲へ來ることが、とぎれることはありはすまい。

3994 白波が寄せて來る、美しい藻ではないが、我が生きて居る間中でも、續けて見に來よう。此さつぱりとした、濱邊の景色をば。

廿六日追ひて和せぬ。

四月廿六日越中ノ掾大伴ノ池主の館に、税帳使越中ノ國守大伴ノ家持を餞した酒宴の歌。竝びに古歌。四首

3995 玉桙の道に出で立ち別れなば、見ぬ日さまねみ、戀しけむかも

右一首、大伴ノ家持。

3996 吾が夫子が國へましなば、霍公鳥鳴かむ五月は淋しけむかも

右一首、越中ノ介内藏ノ繩麻呂。

3997 吾なしとな佗び吾が兄子、霍公鳥鳴かむ五月は、玉を貫かさね

右一首、大伴ノ宿禰家持。

石川ノ水通の橋の歌。一首

3995 道に出向いて、玆で別れたならば、此から先、見ぬ日が多い爲に、嘸、戀しいことであらうよ。

3996 あなたがお國へお越しになつたなら、霍公鳥が鳴く五月は（何時もと違つて）、淋しいことでありませう。

3997 私が居ないと言ふので、悲觀しなさつてはなりません。あなたよ。霍公鳥が鳴く五月になつたら、色々の花を藥玉に通して、心をお慰めなさいませ。

3998 我が宿の花橘を花ごめに、玉にぞ吾が貫く。待たば苦しみ

右一首、傳へ誦んだのは、主人大伴ノ池主なり。

越中ノ守大伴ノ家持の館の飲宴の歌。一首（四月廿六日）

3999 都邊に立つ日近づく、飽く迄に相見て行かな。戀ふる日多けむ

立山の賦。一首竝びに短歌。

二首

4000 天離る鄙に名輝す越の中國内ことごと、山はしも繁にあれども、川はしもさはに行けども、皇神の領き在す、新川の其立山に、常夏に雪降り頻きて、帶ばせるかたかひ川の清き瀬に、

3998 自分の屋敷の橘の花よ。其花の間から、藥玉に插し通すことだ。花が實となる迄待つて居たら、待ち遠しいと言ふので。（此歌に、待たば苦しみ、とある所から、送別の意に取り做して、吟じたのである。）

3999 都方面へ出發する日が、近寄つて居る。此からは、焦れる日が長いことであらう。だから滿足する程に、互ひに顏を見合うて別れて行かう。

4000 地方の田舍に評判を輝かして居る所の、此越中の國内一帶には、山はみつしりとあるけれども、又川は澤山流れて居るけれども、其中で、尊い此神樣が領して入らつしやる、新川郡のあの立山に、幾ら夏の眞盛りにも、雪が降り續けて居るやうに續けて、それから又、神樣が腰に取り廻して入らつしやるさつぱりとした淺瀨に、朝晩毎に立つて居る霧ではないが、思ひ過すと言ふことが出來ようか。かうし

朝宵毎に立つ霧の、思ひ過ぎめや。あり通ひ、いや年のはに外のみもふり離け見つゝ、萬代の語らひぐさと、未見ぬ人にも告げむ。音のみも名のみも聞きて、ともしがるがね

反歌

4001 立山に降り置ける雪を、常夏に見れども飽かぬ。神ながらならし

4002 かたかひの川の瀬清く、逝く水の絶ゆることなく、あり通ひ見む

四月廿七日、大伴ノ宿禰家持作りぬ。

敬しみて、立山の賦に和する。一首竝びに二絶

4003 旭さし脊に見ゆる、神ながら御名に負はせる、白雲の千重を押し分け、

て始終通うて、年毎に外からでも遠く見遣つて居て、幾萬年後迄の話の種として、まだ見ない人達にも、話して聞かせよう。評判許り、名前許りを聞いて羨しがる程に、(山の優れた樣子を告げよう)。

4001 立山に降り止つて居る雪をば、夏の眞盛りに、幾ら見ても見飽かないことだ。あんな不思議なことは、大方神樣の爲業に違ひない。

4002 かたかひ川の景色がさつぱりとして居て、流れて逝く水ではないが、何時迄も、とぎれることなく、立山の景色を、かうして往來して眺めよう。

4003 此越中の國府から、後に見える所の神樣のお心其儘に、立山と言ふ名の通りに立つて居る、白雲の幾重をば、押し分

天そゝり高き立山。冬夏と分くることなく、白栲に雪は降り置きて、古ゆあり來にければ、こゞしかも岩の神寂び、玉きはる幾世經にけむ。立ちて居て見れどもあやし。峯高み、谷を深みと、落ち激つ清き川内に、朝さらず霧立ち渡り、夕されば雲居棚引き、雲居なす心もしぬに、立つ霧の思ひ過さず逝く水の音も爽けく、萬代に言ひ續ぎ行かむ。川し絶えずば

反歌

4004 立山に降り置ける雪の常夏に消ずて渡るは、神ながらとぞ

4005 落ち激つかたかひ川の絶えぬ如、今

けて、空に聳えて立つて居る、高い立山よ。冬だ夏だと區別することもなしに、眞白に雪が降つて居て、昔から其儘で續いて來て居るので、岩が峨々として神々しく古びて、凡幾代經たかも訣らない位である。立つて見たり坐つて見たりなど色々して見ても、怎うも不思議だ。峯が高いし、其上に、谷が深いと言ふ訣で、水の激して落ちる、さつぱりとした川の流域に、毎朝缺けることなく、ずつと霧が立ち、日暮れになると、雲がぢつとして横に懸りする。其雲のやうに、なよ〳〵と心も萎えて、立つて居る霧ではないが、思ひなくすることなく、流れて居る川水の音のやうに、爽やかな景色だ、と何時々々迄も、語り傳へて行かう。此川の絶えない如く。(立山のことを傳へて行かう。)

4004 立山に降つて居る雪が、夏の眞盛りに消えないで續いて居るのは、神の御意志だと言ふことだ。

4005 落ちて激するかたかひ川の水が、と切れないやうに、今其

見る人も止まず通はむ

右、越中ノ掾大伴ノ池主和せつ。（四月廿八日）

京に入る日漸く近づきて、悲しき情撥ひ難く、懷ひを陳べたる歌。並びに一絶

4006 かき數ふ二上山に、神さびて立てる樛の木、幹も、枝も、同じ常葉にはしきよし我が夫の君を、朝さらず逢ひて言問ひ、夕されば手携りて、射水川清き川内に出で立ちて、我が立ち見れば、東風いたくし吹けば水門には白波高み、妻呼ぶと洲鳥は騒ぐ。葦苅ると海人の小舟は、入り江漕ぐ楫の音高し。其所をしもあやにとも

景色を眺めて居る吾々人間も、何時迄も生きて居て、止むことなく通はう。

しみ、偲びつゝ遊ぶ盛りを皇祖の食國なればみ言持ち立ち別れなば、後れたる君にはあれども、玉桙の道行く吾は、白雲の棚引く山を、岩根蹈み越えへなりなば、戀ひしけく日の長けむを。そこ思へば、心し痛し。霍公鳥聲に合へぬく玉にもが、手に纏き持ちて、朝夜に見つゝ行かむを。置きて行けば惜し

4007 我が夫子は玉にもがもな。霍公鳥聲にあへぬき、手に纏きて行かむ

右、大伴ノ家持、越中ノ掾大伴ノ池主に贈りぬ。（四月卅日）

忽、京に入る日、懷ひを陳べたる作を見て、生別を悲

4006 二上山に神々しく物古りて生えて居る樛の木の、根元も、分れの枝も、同じ何時迄も、葉の落ちないものと思うて、何時迄も、あなたをば朝逢うてお話をし、日暮れが來ると、手を引き合うて、射水川の爽やかな流域に出かけて、吾々が立つて見ると、東風が甚く吹く爲に、川口の邊では、白波が高く立つので、配偶を呼び合ふと、洲に棲んで居る鳥が騒ぐことだ。それから又葦を刈らうと、海人の舟は、入り江を漕いで行く艪の音を高く立てゝ居る。それをば無性に珍しがつて、景色を慕うて遊んで居る絶頂だのに、天皇陛下の治めて入らつしやる國であるから、仰せを承つて、天皇の代理に爲事をして、あなたに別れて行つたら、あなたはさ程でもないでせうが、道中を行く私は、白雲の懸つて居る山を、岩を蹈み越えて行つて、間が隔つたら戀しくて、日數が長く感ぜられることであらう。それを思ふと、心が傷みます。せめて子規の鳴く聲と一處に、插す藥玉でもあなたがあれば、手に纏きつけて持つて行つて、朝晩に眺め乍らきませうが、後へあなたを殘して行つたら、無殘念でありませう。

4007 あなたが玉であれば好い。さうすれば、此四五月頃に鳴く子規の聲と一處に、藥玉を插し合せて、手に纏きつけて旅に參りませう。

しみ、腸を斷つこと、萬回にして、怨むる緒禁め難し。

些か懷ふ所を奉ずる歌。一首竝びに二絶

4008 青丹よし奈良を來離れ、天離る鄙にはあれど、吾が夫子を見つゝしをれば、思ひやることもありしを、大君の命畏み、食す國のことゝりもちて、若草の足結手作り、群鳥の朝立ち去なば、後れたる我や悲しき。旅に行く君かも戀ひむ。思ふそら易くあらねば、嘆かくを留めもかねて、見渡せば卯の花山の霍公鳥哭のみし泣かゆ。朝霧の亂るゝ心言に出でゝ言はばゆゝしみ、礪波山たむけの神に、

4008 奈良の都を離れて來て、地方の田舍にはをるのだが、あなたと顏を合せ〳〵して居るので、思ひを晴すこともあつたのに、あなたは、天皇陛下の仰せを畏つて、天皇のお治めなさる國の政を取り行ふ爲に、脚胖を手で整へて、朝旅立ちしてお出かけなされたならば、取り殘された私が、悲しむことでせうか。それとも旅に出るあなたが、お焦れになることでせうか。かういふ風に思つて居る心持ちが落ち著きませんので、嘆くことを止めかねて、表をずつと眺望致しますと、頃しも卯の花の盛りで、其咲いた山に鳴く子規ではないが、只泣かずには居られません。煩悶する心持ちをば語に出して申せば、緣起の悪いことだと思うて申さずに、礪波山の峠に居られる神に、捧げ物をして私が祈りますに、どうぞいとしいあなたの御樣子をば、無事にさうして年月をやり過して、此月が過ぎて來月が來たら、時も移さずに、直接撫子の花の盛りの時分に、逢はせて下さい、とお願ひすることだ。

幣奉り我が請ひ祈まく、はしけやし君がたゞかを、まさきくもありたもとほり、月立たば時もかはさず、撫子が花の盛りにあひ見しめとぞ

反歌

4009 玉桙の道の神たち。賄はせむ。吾が思ふ君を、懷しみせよ

4010 うら戀し。我が夫の君は、撫子が花にもがもな。朝な朝な見む

右、大伴ノ池主が和せた歌。（五月二日）

放逸鷹を偲んで、夢に見て悅んで作つた歌。一首竝びに短歌。四首

4011 大君の遠の御門ぞ。み雪降る越と名

4009 道中の神樣達よ。お駄賃を致しませうから、私の思うて居るお方を、大事にして下さい。

4010 戀しいことだ。せめてあなたが撫子の花であれば好い。さうすれば、朝々毎に見てをらうに。

4011 天皇陛下の遠い御料地であることだ。此雪の降る、越の國

に負へる、天離鄙にしあれば、山高み川遠著し。野を廣み草こそ繁き。年魚走る夏の盛りを、島つ鳥鵜飼ひが輩は、逝く川の清き瀬毎に、簗さしなづさひ上る。露霜の秋に至れば、野もさはに鳥すだけりと、健男の輩誘ひて、鷹はしも許多あれども、屋形尾の我が大黒に、白塗の鈴取り附けて、朝狩りに五百つ鳥立て、夕狩りに千鳥蹈み立て、追ふ毎に緩すことなく、手離れも、をちもか易き。此を置きて又はあり難し。さ竝べる鷹はなけむと、心には思ひ誇りて、笑ひつゝ渡る間に、狂れたる醜つ翁の、言だにも我には告げず、との曇

と言ふ、評判通りの邊鄙な地方であるから、山が高くて、川が、遠目に見ても、はつきり見える程大きなのが、流れて居る。野が廣いので、草が澤山茂つて居る。（と鷹養ひに、適當な場所であることを示したのである。）年魚の早く泳ぐ夏の頂上だと言ふので、鵜養ひの漁夫連衆は、流れる川の爽やかな淺瀬々々に簗を立て乍ら、水につかつて川を登つて行く。（暗に鷹を起す爲に、同じ鳥の鵜を出したのである。）扨、冷たい露が降る秋になると、野一杯に、鳥が集つて居ると言ふので、立派な男の人達を誘ひ出して、自分は鷹は澤山あるが、其中でも屋形尾の緒を持つた、自分の鷹である、眞黒な大黒と言ふ鷹に、銀鍍金の鈴をつけて出て、朝の狩りには澤山の鳥を追ひ立て、日暮れの狩りには、澤山の鳥を蹈み立たして追ひ立てる度毎に、此鷹は油斷することなく、此鷹は手元を離れて、飛び出すことも引き返すことも易々とする。鷹は、此鷹をさし置いては、二つとは有り難い。肩を比べる鷹はなからう、と心の中では自慢に思うて、會心の笑みを洩し乍ら暮して居る中に、馬鹿な狂親父奴が、一言も自分に言はないで、空の一面に曇つて、雨の降つて居る日に、鷹狩りをしようと思つて、お前許りを追ひ立てゝ狩りに出かけて。後にあの大黒は、三島野をば後に見乍ら、二上山をば飛び越えて、雲の影に飛んで行つて了ひました、と咳きし乍ら、咽せ返つて申し

り雨の降る日を、鷹狩りすと、汝のみを、呵りて、三島野を後に見つゝ二上の山飛び越えて、雲隱りかけりいにきと、歸り來て、しはぶれ告ぐれ、招ぐよしのそこになければ、言ふ術の便を知らに、心には火さへ燃えつゝ、思ひ戀ひ息づき餘り、蓋しくも逢ふことありやと、足引きの彼面此面に、鳥網張り守部を据ゑて、千早振る神の社に、照る鏡倭文に取り添へ、請ひ祈みて吾が待つ時に、處女等が夢に告ぐらく、汝が戀ふる其秀鷹は、松田江の濱行き暮らし、鯛捕る氷見ノ江過ぎて、多胡の島飛びたもとほり、葦鴨のすだく古江に、

出たので、呼び歸す手段がもうないから、何と悲しい心持ちを表して好いか訣らない程、心はいらち焦れて思ひ、溜め息を無暗にして、若しひよつと出くはすこともあらうか、と二上山の彼方側此方側に、鳥の網をかけて番人ををらせておいて、又一方神樣の社に澄み切つた鏡をば、倭文の幣に添へて奉納して、お祈り申して歸つて來るのを、自分が待つて居た最中に、（神の）處女が、夢に現れて告げたことには、お前が焦れて居る其秀れた鷹は、逸れてから後、松田江の海岸をば行く中に、日が暮れてつなしを取つて居る氷見の入り江を通つて、多胡の島の邊を飛び廻つて、葦鴨の寄りたかつて居る古江に、一昨日も昨日も居たことだ。まあ近くば二日の間、長ければ七日の間は、過ぎることはなからう。追つて歸つて來よう。だからあなたよ、そんなにくよ〳〵と焦れなさるな、とつい一寸、とろ〳〵と假睡んだ間に、其處女が告げたことだ。

一昨日も昨日もありつ。近くば今二日だみ、遠くあらば、七日の中は過ぎめやも、來なむ。吾が夫子、ねもごろにな戀ひそよとぞ、寢間に告げつる

反歌

4012 屋形尾の鷹を手に据ゑ、三島野に狩らぬ日多く、月ぞ經にける

4013 二上のをてもこのもに、網さして、吾が待つ鷹を、夢に告げつも

4014 待つ歸り、しびにてあれかも。さ山田の爺が、其日に覓め逢はずけむ

4015 心には弛ぶことなく、須河ノ山すかなくのみや、戀ひ渡りなむ

右、射水郡古江ノ村にて、蒼鷹を獵り獲たり。形容美麗にして、雉を鷙ること群に秀でたり。時に、養吏山田ノ史君麿調試節を失ひ、野獵候に乖く。風を搏つて之に翔り、高く翔つて雲に匿る。腐鼠の餌して、呼び留むれども、驗靡し。之に繩網を張り設けて、非常を窺ひ、幣を神祇に奉つて、不慮を賴む。嘗に夢裡に、娘子あり。喩して曰はく、使君苦念を作して、空しく精神を費すこと勿れ。放逸せる彼鷹獲得むこと、幾何もあらざらむかてへり。須臾にして覺寤し、懷に悅ぶことあり。由りて恨を却くる歌を作り、式ちて感信を旌しぬ。守大伴ノ宿禰家持、九月廿六日 作りぬ。

高市ノ黒人の歌。一首（年月日詳ならず）

4012 屋形尾の鷹をば手の上にすわらせて、あの三島野で狩りをしない日が多く重つて、もう月日がたつたことだ。

4013 二上山の彼方側此方側に網を設けて、自分が待ちうけて居た鷹の在所をば、夢で知らせがあつたことだ。

4014 鷹の歸るのを待つて居るのに、歸り遲つて居たからか、あの山田の老人が逃した日に、幾ら探しても、つき止めることが出來なかつたのであらう。

4015 心の中では、少しも心持ちが弛んで來ることなく、須河の山ではないが、すかねて（物も手に著かず）、呆やりと屈託して許り、かうして焦れねばならんだらうか。

4016 婦負ノ野の薄押しなべ降る雪に、宿借る今日し悲しく思ほゆ

右、此歌を傳へたのは、三國ノ五百國である。

4017 あゆの風。いたく吹くらし。奈呉ノ海人の釣りする小舟、漕ぎ隱る、見ゆ

4018 水門風寒く吹くらし。奈呉ノ江に妻呼び交し、鶴騒ぐなり

4019 天離る鄙ともしるく、甚くも、繁き戀ひかも、なぐる日もなく

4020 越ノ海の信濃ノ濱を行き暮し、長き春日も、忘れて思へや

右四首、天平廿年春正月廿九日、大伴ノ家持。

礪波郡雄神河の傍にて作れ

4016 婦負の郡の廣い野原に、薄を押し伏せて、雪の降つて居る所で、旅寢をして、宿を借る今日は、殊に悲しう旅が思はれる。（之は黑人が、越中に旅した時に作つたものが、土地には傳へられて居たのであらう。三國姓であるところから見れば、此人は恐らく、越前越中の間に土著して居た、國府の屬僚であつたのだらう。）

4017 東風が甚く吹いて居るに違ひない、奈呉の浦の海人が、釣りをして居る舟が、風の當らない所に漕いで行く、それが見える。

4018 川口の風が、寒く吹いて居るに違ひない。奈呉の入り込みに鶴が呼び合うて、鳴き騒いで居る。

4019 茲は地方の田舍だが、成程その通り、心の悠りとする日もなく、甚く胸一杯に焦れて居ることだ。

4020 越の國の海邊の信濃と言ふ土地の海岸を、長い春の日一日、歩き廻つて日暮れになつた其樂しい日も、國のことも、思ひ忘れてをらうか。

4021 雄神河。紅匂ふ。處女らし、あしつき取ると、瀨に立たすらし

婦負郡にて、鵠坂川を渡れる時作れる歌。一首

4022 鵠坂川。渡る瀨多み、吾が馬の足搔きの水に、衣濡れにけり

潛鵠人を見て作つた歌。一首

4023 婦負川の速き瀨毎に、篝さし、八十件緒は鵜川立ちけり

新河郡延槻河を渡る時作つた歌。一首

4024 立山の雪し消らしも。延槻の河の渡り瀨、鐙つかすも

4021 雄神河に、紅の色が美しく映つて居ることだ。之は此邊の娘達が、あしつきを取らうと言ふので、あゝして、淺瀨に立つて居るからに違ひない。

4022 鵠坂川は、川一つを越すのに、彼方此方と渡る淺瀨が多いので、今、自分の乘つて居る馬の撥ねる足で、飛ぶ水の爲に、著物が濡れたことだ。

4023 婦負川の速い瀨の、何處にも彼方にも篝を立てゝ、澤山の役人達は、鵜の漁を擧行して居ることだ。

4024 立山の雪が、今消えて居るに違ひない。此延槻河の渡り場所を越えると、鐙をば水につかせることだ。

氣多ノ大神ノ宮に參るのに、海邊を行つた時作つた歌。一首

4025 之乎路から直越え來れば、羽咋ノ海朝風ぎしたり。舟檝もがも

能登郡で、香島ノ津から舟出して、熊來村さして行く時、詠んだ歌。二首

4026 とぶさ立て舟木切ると言ふ。能登の島山。今日見れば、木立ち茂しも。幾代神びぞ』

4027 香島より熊來をさして漕ぐ舟の、檝取る間なく都し思ほゆ

鳳至郡で、饒石河を渡つた

4025 之乎の里地方から、眞直に、山路を越えて來た處が、能登の國の羽咋の海は、朝風ぎがして居ることだ。玆を漕いで遊ぶ、舟や梶があれば好いが。

4026 神を祀つて、舟木を切り出す處の山よ。今日見た處が、非常に木立ちがふかぶかと繁つて居ることだ。幾代立つて、こんなに神々しく、古びたのであることだ。

4027 香島から熊來を目ざして漕いで行く舟の、梶を使ふのに、少しも手を息めないやうに、自分も少しも、心を息めないで、都が思はれることだ。

時に作つた歌。一首

4028 妹に逢はず久しくなりぬ。饒石河。清き瀬毎に水占はへてな

珠洲郡から舟を出して、大海ノ郷に歸つた時、長濱の灣に船つて、月光を見て作つた歌。一首

4029 珠洲ノ海に、朝開きして漕ぎ來れば、長濱ノ浦に月照りにけり

右、春の出擧の爲に、諸郡を巡行した時、目に屬いた所を詠んだのだ。大伴ノ宿禰家持。

4030 鶯の晩く哢づるのを恨んだ歌。一首

鶯は今は鳴かむとかた待てば、霞棚

4028 いとしい人に逢はないで、長くあつたことだ。饒石河のさつぱりとした瀬を渡る毎に、水占をやつて行かう。（そして、妹の安否を知らう。）

4029 珠洲の海で、朝出をして漕いで來た處が、長濱の浦で、月が輝り出したことだ。

4030 鶯はもう鳴くだらう、とそれ許りを待つて居た所が、春に

引き、月はへにつゝ

酒を造る歌。一首

4031 中臣の太祝辭言ひはらへ、贖ふ命も、誰が爲に。汝

右、大伴ノ宿禰家持作。

なつて霞がかゝつて、月日が經つて行くことだ。

4031 今造つた酒を神樣に奉るとて、中臣氏の神主を呼んで、立派な神樣を祀る語を申して、身の罪穢を祓うて、此奉り物で贖ふ命も、誰の爲でせうか。お前さんの爲に過ぎないのだ。（上の二節は、何時作つたもの、と知ることが出來ぬ。恐らく、越中での作ではなからう。）

萬葉集　卷第十八

天平廿年三月廿三日、左大臣橘家の使者造酒司ノ令史田邊ノ福麻呂を大伴ノ家持の官舍に饗應した時の歌。竝びに古歌

4032 奈兒ノ海に舟暫し寄せ、沖に出でゝ浪立ち來やと、見て歸り來む

4033 波立てば奈呉ノ浦曲に寄る貝の、間なき戀ひにぞ、年は經ける

4034 奈兒ノ海に潮の早干ば、漁りしに出で

4032 此奈兒の海で漕ぎ廻りたいから、暫時舟を拜借したい。沖の方に出掛けて、浪がどう言ふ風にやつて來るか　見て來ようと思ふ。

4033 奈呉の海では波が立つて居るので、始終海岸に貝が寄つて來る。それではないが、間斷ない戀ひの爲に、歳月はたつことだが。（今やつと、お逢ひ申すことが出來ました。）

4034 奈兒の海に早く潮が引いたら、餌を探しに出かけようと言

むと、鶴は、今ぞ鳴くなる

4035 霍公鳥。厭ふ時なし。菖蒲草蘰にせむ日、此從鳴き渡れ

右四首、田邊ノ福麻呂。（中、霍公鳥の歌は、古歌である。）

其時、明日、布勢ノ水海を見よう、と約束して、てんでに作つた歌

4036 如何にせる布勢ノ浦ぞも。甚くに、君が見せむと、我を止むる

右、田邊ノ福麻呂。

4037 麻生ノ崎。漕ぎたもとほり、終日に見とも、飽くべき浦にあらなくに

右、國守大伴ノ家持。

4038 玉櫛笥何時しか明けむ。布勢ノ海の

ふので、今鶴が鳴いて居ることだ。

4035 霍公鳥は、何時鳴いたと言うて、面白くない時と言ふ時はないが、追つゝけ、菖蒲を頭に纏きつける端午の節供が來るが、其時は、茲を鳴いて通つてくれ。

4036 一體どう言ふ風になつてる、美しい布勢の浦なんでせう。あなたが非常に見せたがつて、京都へ出發しよう、と思ふ私を引き止めなさることだ。

4037 どんな所だと仰つしやつたが、非常に善い所です。其所にある、麻生の崎と言ふ崎を漕ぎ廻つて、一日中見て居ても、滿足するやうな景色の浦ではないのです。

4038 夜が早く明けて欲しいものだ。布勢の海の入り込みを歩き

浦を行きつゝ、玉藻ひりはむ

4039 音のみに聞きて目に見ぬ、布勢ノ浦を見ずば上らじ。年は經ぬとも

4040 布勢ノ浦を行きてし見てば、百敷の大宮人に、語りつぎてむ

4041 梅の花咲き散る園に、我行かむ。君が使ひをかた待ちがてら

4042 藤波の咲き行く見れば、霍公鳥鳴くべき時に、近づきにけり

右五首、福麻呂。

4043 明日の日の布勢の浦曲の藤波に、けだし來鳴かず、散してむかも

右一首、家持。

右八首、廿四日の宴會に吟じたものである。

ながら、玉藻を拾はうと思ふ。

4039 評判許りに聞いて、實際目ではまだ、見たことのない布勢の海の、入り込みの景色を見なければ、幾ら歳月がたつても、都へは上るまい。

4040 布勢の入り込みをば歩いて、其景色を見て來たならば、其上は、御所に仕へて居る人達に、語り傳へようと思ふ。（都に歸つて。）

4041 あの方の使ひが遲いことだ。使ひの來るのを待ち旁、梅の花の咲いて居る其庭へ、出て待つて居よう。（此も、古い歌である。）

4042 藤の花が、段々咲いて行くのを見ると、霍公鳥が鳴く筈の時候に、近寄つて來たことだ。（此も、古い歌らしく思はれる。）

4043 あなたの仰つしやつた其霍公鳥が、明日見る所の布勢の入り込みの所に咲いて居る藤の花に、若しも來て鳴かず、無駄に花を散して了ひはすまいか、とそれが案ぜられます。（此は、大伴ノ家持の和せたものである。）

□廿五日、布勢ノ水海へと出かけた途中に、馬の脊の上で口ずさんだ歌。二首

4044 濱邊より我が打ち行かば、海邊より迎へも來ぬか。海人の釣り舟

4045 沖邊より滿ち來る潮の、彌益しに我が思ふ君が御舟かも。彼

右二首、大伴ノ家持。

□水海に著いて遊んだ時に、てんでに作つた歌

4046 神さぶる垂妃ノ崎漕ぎ廻り、見れども飽かず。如何に我せむ（福麻呂）

4047 垂妃ノ浦を漕ぎつゝ、今日の日は樂しく遊べ。言ひつぎにせむ（遊行女婦土師）

4044 これから、此濱邊をば、馬に乘つて私が行つたら、海の方から、海人の釣り舟が、迎へに來てくれゝば好いが。

4045 沖の方からさして來る潮ではないが、彌烈しく、私が思うて居るお方の、舟か知らん。あれは。

4046 神々しく物古りた、此垂妃のみ崎よ。漕ぎ廻つて、幾ら見ても見飽かない。どうすれば、滿足出來るのだらう。

4047 垂妃の入り込みを漕ぎ乍ら、今日の間は、愉快に遊んで入らつしやい。あなたのやうな貴い方々が、茲を見物なさつたと言ふ事を、後々迄も語り傳へに致しませう。

4048 垂妃ノ浦を漕ぐ舟。檝間にも奈良の我家を忘れて思へや（家持）

4049 おろかにぞ我か思ひし。麻生ノ浦の荒磯のめぐり、見れど飽かずけり（福麻呂）

4050 珍しき君が來まさば、鳴けと言ひし山霍公鳥。何か來鳴かぬ（廣縄）

4051 多胡ノ崎。木の暗繁に、霍公鳥來鳴きとよまば、はた戀ひめやも（家持）

□越中ノ掾久米ノ廣縄の官舍で、田邊ノ福麻呂を饗した宴會の時、てんでに作つた歌。四首

4052 霍公鳥。今鳴かずして、明日越えむ山に鳴くとも、驗あらめやも

4048 垂妃の入り込みを漕いで行く舟よ。其艪を漕ぐ手の、一寸の休む間でも、奈良にある、自分の家のことを忘れようか。

4049 今迄は好い加減に、自分が思うて居たことだ。麻生の浦の荒い石濱の邊を、漕ぎ廻つて遊覽することは、幾ら眺めても、飽かないことであることよ。

4050 珍しいあなたがお越しになつたら、きつと鳴くんだ、と言ひつけておいた山霍公鳥が、どうして鳴きに來ないのだらう。

4051 多胡の崎の木の眞暗に茂つた茂みに、霍公鳥がやつて來て、邊を震動さして鳴いたなら、こんなに焦れようか。（それに、鳴かないことだ。）

4052 霍公鳥よ。こんなに待つて居るのだ。今鳴かないで、明日越える山で、明日鳴いた所で、何の甲斐があるものか。

右、田邊ノ福麻呂。

4053 木の暗になりぬるものを。霍公鳥、何か來鳴かぬ。君に逢へる時

右、久米ノ廣縄。

4054 霍公鳥。玆從鳴き渡れ。燈を月夜に淮へ、其影も見む

4055 鹿蒜灣の道行かむ日は、五幡ノ坂に袖振れ。我をし思はゞ

右二首、大伴ノ家持。

右四首、二十六日に作つたもの。

□太上（元正）天皇、難波ノ宮に御駐輦あらせられた時の歌。七首

左大臣橘ノ諸兄の歌

4056 堀江には玉敷かましを。大君の御舟

4053 木が暗くなつて茂つて居るのに、あなたに逢うて居る此時に、何故霍公鳥は、來て鳴かないのか。

4054 今夜は月は出て居ないが、火を澤山點して、月に淮へる程、明るく點して居る。其所をば、霍公鳥よ、鳴いて通れ。火の光りで、お前の姿が見たい。

4055 鹿蒜の浦の入り込みの道を通つて行く時分には、五幡山の坂で、此方へ向いて袖を振つて下さい。私をば思うて入らつしやるならば。

4056 天皇陛下の御舟をば、漕ぐことになると前から知つて居た

漕がむと、かねて知りせば

右に和せられた御製。一首

4057 玉敷かず、君が悔いて言ふ堀江には、玉扱き敷きて、續ぎて通はむ

右二首は、御舟が堀江を遡つて、遊宴せられた日に、出來たものである。

御製歌。一首

4058 橘の豐の橘。八峯にも、我は忘れじ。この橘を

右は橘の實を見て、其に寄せて、諸兄卿の忠勤を褒められたのである。

河内ノ女王の歌

4059 橘のした照る庭に、殿建てゝ、さかみづき在す。我が大君かも

4057 玉を敷いて置かなかつた爲に、お前さんが後悔して、敷いておいたら好かつた、と言ふ難波の疏水には、今から、皆首にかけた玉をしごき落して、敷きつめて、續けて通はうと思ふ。（此が、一度限りでないから、安心せよ。）

4058 此橘よ。見事な橘よ。其が山の幾峯にも廣がり榮えて居る樣に、自分は、何時々々迄も忘れはすまい。此橘よ。

4059 橘の實が色著いて、木影が輝いて居る庭に御殿を拵へて、其所で、お酒に醉うて入らつしやる、我が太上天皇よ。

粟田ノ女王の歌

4060 月待ちて家には行かむ。我がさせる
あから橘。影に見えつゝ

右三首、左大臣橘ノ諸兄の家に御
幸せられた時の宴會の歌。

4061 堀江より水脈引きしつゝ、御舟さす
賤男の輩は、川の瀬まをせ

4062 夏の夜は道たづゞし。舟に乘り、
川の瀬毎に棹さし上れ

右の歌は、御舟に綱手をつけて、
堀江を遡つて遊ばれた日に、出來
たものである。田邊ノ福麻呂が此
歌を諳誦して居たのである。

後から、橘の歌に和せた歌。

二首

4063 常世もの此橘のいや照りに、吾大君

4060 月の出るのを待つて、家へ歸りませう。それ迄は玆に、遊んで居れば好いでせう。さうすれば、私の頭に插して居る、眞赤に色著いた橘の實が、月の影に見え乍ら、面白いことでせう。

4061 疏水をば、水前案内をし乍ら、御舟をさして上つて行く、賤しい男達は、よく注意して、川の瀬をお知らせ申し上げよ。

4062 夏の夜は月が出ないで、道がはかどらない。だから、川の瀬毎に注意して、竿をさし乍ら、舟に乘つて遡るがよい。

4063 常世の國から舶來した、尊い品物なる此橘が、益色が赤く

は、今も見る如

4064 大君は常磐に在さむ。橘の豐の橘。
直照りにして

右二首、大伴ノ家持。

□射水郡の驛館の柱に書いて
あつた歌

4065 朝開き、入り江漕ぐなる楫の音の、
つばらくに、吾家し思ほゆ

右、山ノ上ノ某の歌（憶良の子とも
言ふ。）

□四月一日、越中ノ掾久米ノ廣
縄の官舍で、宴會のあつた
時の歌。四首

4066 卯の花の咲く月たちぬ。霍公鳥、來
鳴きとよめよ。含みたりとも

輝いて來るやうに、我が天皇陛下は、又目の前に拜し奉つて居るやうに、何時々々迄も御盛んで入らつしやることだらう。

4064 天皇陛下は、何時迄もお盛んで入らつしやるだらう。見事な橘が、すつかり眞赤に輝いてる樣な鹽梅に。

4065 朝出に、入り海を漕ぐ所の舟の艣の音が、ずぶ〳〵と音がする、それではないが、つばら即、念入りに、家のことが一々思はれることだ。

4066 卯の花の咲く月がやつて來た。霍公鳥よ。邊を震動さして鳴きに來い。譬ひ、花は蕾んで居ても。

右、國守大伴ノ家持。

4067 二上ノ山に隱(コモ)れる霍公鳥。今も鳴かぬか。君に聞かせむ

右、遊行女婦土師(ウカレメハニシ)ノ處女。

4068 起き明し今夕(コヨヒ)は飲まむ。霍公鳥明けむ朝(アシタ)は、鳴き渡らむぞ

二日は、立夏の節に當つて居た。それで、かう言うたのである。

右、國守大伴ノ家持。

4069 明日よりは續ぎて聞えむ。霍公鳥一夜のからに、戀ひ渡るかも

右、羽咋郡ノ擬主帳能登ノ乙美(オトミ)。

□庭中の撫子(ナデシコ)の花を詠んだ歌

4070 一本(ヒトモト)の撫子(ナデシコ)植ゑし其心、誰に見せむと思ひそめけむ

4067 二上山に隱れて居る、霍公鳥よ。今直に、鳴いてくれないか知らん。かのお方に、お聞かせ申さうと思ふが。

4068 起きて居て夜を明して、今夜は、酒を飲んで居よう。明日は立夏だから、きつと霍公鳥が、朝早くから鳴いて通るだらうよ。

4069 明日からは立夏だから、續いて、其聲が聞えるであらう。霍公鳥の聲が、只一晩だけであるのに、焦れ續けて居ることだ。

4070 一本の撫子を彼此と、世話を燒いて植ゑた私の意中では、外の人に見せよう、と深く思ひ込んで居たのではなかつた筈だ。私は訣つて居るが、あなたには訣りますか。

右、家持が、清見と言ふ若い僧を愛して居た處が、それが國師に從うて、上京するのを、惜しんだのである。

更に詠んだ歌。二首

4071 しなさかる越の君のと、かくしこそ、柳かづらき、樂(タノ)しく遊(アソ)ばめ

右は、僧清見送別の宴の時に、郡司以上の子弟が、澤山此席に臨んで居たので、家持が作つたのである。

4072 ぬば玉の夜渡る月を、幾夜經(フ)と數(ヨ)みつゝ、妹は吾待つらむぞ

右、此夕、月光遲く流れ、和(ナゴ)やかなる風稍扇(ヒルガヘ)りぬ。卽目に屬(ツ)きたるものに因せて、聊か、此歌を作りぬ。

4071 遠い地方の越の國のあなた達と、かうして柳を纏として、頭に著けて、樂しく何時迄も、遊びたいことだ。

4072 夜空を運行して行く月を見乍ら、毎晩此で、幾夜たつたと勘定し乍ら、いとしい人は、待つて居るだらうよ。

□越前國ノ掾大伴ノ池主の贈つて來た歌。三首

今月十四日を以ちて、淫見村に到來して、彼の北方を望拜す。常に芳德を念ふこと、何の日か能く休まむ。兼ねて隣近なるを以ちて、戀を增す。先書を以て曰はく、暮春惜しむべし。膝を促すこと期あらず。生別の悲しきこと、夫、復何をか言はむ。紙に臨みて悽斷しぬ。奉狀不備。

三月十五日　　大伴ノ池主一

一、古人曰く

4073 月見れば同じ國なり。山こそは、君が邊を隔てたりけれ

一、物に屬(ツ)けて思ひを發(オコ)す

4074 櫻花、今ぞ盛りと人は言へど、我は

4073 月を見ると、之を同じ國で眺めて居る、と言ふことが感ぜられる。成程山は、あなたの住んで入らつしやる邊を、隔てゝをることだ。が、しかし。

4074 櫻の花は、今が頂上だと人は申しますが、私は一向、面白

寂しも。君としあらねば

一、思ふ所を陳べたる歌

4075 相思はずあるらむ君を、あやしくも、嘆き渡るか。人の問ふ迄

□越中ノ國守大伴ノ家持の答へて贈つた歌

一、古人の言へるに答へたる歌

4076 足引きの山はなくもが。月見れば同じき里を、心隔てつ

一、物に屬けて懷ひを發(オコ)し

たるに答へ、兼ねて、遷任せる舊宅の西北の隅(スミ)の、櫻の木を詠める歌

4077 吾が夫子(セコ)が古き垣(カキ)內の櫻花。未含(イマダフ)め

く思ひません。あなたと一處に、居るのではありませんから。

4075 私許りが片思ひで、あなたは思うて居て下されさうにもない。あなたを不思議にも思ひこんで、溜め息を吐(ツ)き通しに、吐(ツ)いて居ます。如何したのだ、と人が問ふ程に。

4076 山がなければ好いのだ。月を見ると、一層さう思はれる。同じ里に居る我々だのに、思ふ心を隔てゝ、山が邪魔をして居ることだ。

4077 あなたの以前の屋敷內の櫻が、まだ莟(ツボ)んで居ます。せめて

り。一目見に來ね

一、懷ふ所を陳べたる歌に答ふるに、古人の跡を以ちて、今日の意に代へぬ

4078 戀ふと言ふは、えも名づけたり。言ふ術の便もなきは、我が身なりけり

一、更に目に屬れたることを詠める歌

4079 三島野に霞棚引き、しかすがに、昨日も、今日も雪は降りつゝ

三月十六日（大伴ノ家持）

姑大伴ノ坂上ノ郎女が、越中ノ守大伴ノ家持に、都からよこした歌

4080 常人の戀ふと言ふよりは、あまりに

一目、見に入らつしやい。

4078 人が焦れて居ると言うたのは、よくも言うたものだ。どう言ひ表して好いか、表し方の目的もない程、苦しんで居るのは、私の身である。

4079 三島野に霞が懸つて居るのに、それはそれで、又雪は、昨日も今日も、どん〳〵降つて居ますことだ。此越中の國では。

4080 普通の人が戀ひ焦れる、と言うて居るよりも以上になつて

て、吾は死ぬべくなりにたらずや

4081 片思ひを、馬にふつさに負せ持ちて、越邊に遣らば、人かたはむかも

越中ノ守大伴ノ家持の答へた歌。二首並びに、懷ふ所を陳べた歌。一首

4082 天離る鄙の奴隷に、天人しかく戀すらく、生ける驗あり

4083 常の戀ひ未止まぬに、都より、馬に、戀ひ來ば、擔ひあへむかも

4084 明時に名告り鳴くなる霍公鳥。いや珍しく思ほゆるかも（四月四日、京へやつた歌。）

天平感寶元年五月五日、東大寺の占墾地使平榮等を饗

來て、私はどうやら、死ぬやうになつて居るのではなからうか。

4081 自分だけが、片思ひして居る心をば、馬に十分ふつさりと負はせ持たして、越の國の邊へ遣りたいのだが、遣つたら、他人がそれを持ち逃げをするかも知れんから、えうやらない。（と戲れたのである。）

4082 地方の田舍に居る賤しい奴隷に、天人がこんなに焦れて入らつしやる、と言ふことを思へば、生きて居るかひが御座います。

4083 何時も〳〵して居る戀ひさへも、まだ止りませぬのに、此上、都から馬で、戀ひがやつて參りましたら、擔ひ切れるでせうか。とても堪らない。

4084 夜の引き明け方に、霍公鳥が自分は茲に居る、と知らせ乍ら、鳴いて行くのが珍しいやうに、あなたの便りを聞いて、懷しく思うて居ます。

應した時に、國守大伴ノ宿禰家持が、酒を僧にさして歌うた歌

4085 燒大刀を礪波ノ關に、明日よりは、守部やり添へ君を止めむ

同月九日、國司の官吏達が少目秦ノ忌寸石竹の官舍に集つて宴會した時、主人が百合の花蘰三個を拵へて、燈臺の豆器の上に重ねて置いて賓客に贈つた時に、てんでに作つた歌

4086 油火の光りに見ゆる吾が蘰。さ百合の花の笑はしきかも

右、大伴ノ家持。

4085 礪波の關所へ、明日からは番人を、もつとふやし遣して、あなたを他へはやらずに、止めて置かうと思ふ。

4086 油の火の光りで見えて居る、あなたに貰つた蘰なる百合の花が、見事で嬉しく思はれることだ。

4087 燈の光りに見ゆるさ百合花。ゆりも逢はむと、思ひ初めてき

右、越中ノ介内藏ノ繩麿。

4088 さ百合花。ゆりも逢はむと、思へこそ、今のまさかもうるはしみすれ

右、大伴ノ家持の答へた歌。

獨り寢床の帳臺の裡に居て、遠く霍公鳥の鳴くのを聞いて作つた歌。並びに短歌。

三首

4089 高御座天つ日嗣と、皇祖の神の命の聞し食す國のまほらに、山はしもさはに多みと、百鳥の來居て鳴く聲、春されば聞きの悲しも。何れをかわきて偲ばむ。卯の花の咲く月立て

4087 火の光りで照されて見える、百合の花ではないが、ゆり卽、將來は必逢はう、と前から思うて居たことだ。（之は、戯れに百合を詠みこんで、戀ひ歌にしたに過ぎぬ。）

4088 百合の花ではないが、ゆり卽、將來必逢うて語はうと思つて居ればこそ、今さし當つて語うて居る現在も、こんなにいとしがつて居るのだ。

4089 高い御座にお坐りになつて、尊い御系統とて、天皇陛下の治めて入らつしやる國の廣い場所に、山が澤山あると言ふので、色々の鳥がやつて來て鳴く聲が、春になると、聞耳が可愛ゆいことである。どの鳥をば、取り分けて慕はうか。處が卯の花が咲く月がやつて來ると、霍公鳥が珍しく鳴いて、芦蒲の花をば藥玉に通す迄も、晝は日の暮れる迄、夜は朝迄、續いて聞いて居ても、聞く度毎に、心が感動され

ば、珍しく鳴く霍公鳥。菖蒲草玉貫(ヌ)く迄に。晝暮し夜渡(ワタ)し聞けど、聞く毎に心動きて、うち嘆き、あはれの鳥と、言はぬ時なし

反歌

4090 行方(ユクヘ)なくあり渡るとも、霍公鳥。鳴きし渡らば、かくや偲(シヌ)ばむ

4091 卯の花の咲くにし鳴けば、霍公鳥。いや珍しも。名告り鳴くなべ

4092 霍公鳥。いとねたけきは、橘の花咲く時に、來鳴きとよむる

右、五月十日、大伴ノ家持。

英遠ノ浦に行つた日の歌

4093 英遠(アヲ)ノ浦に寄する白波。いや益(マ)しに立ち頻(シ)き寄せ來(ク)。あゆをいたみかも

4090 かうしてとり止めもなく、あり續けて居ても、それでも、霍公鳥が始終鳴いてさへくれゝば、こんなに迄焦れようか。

4091 卯の花が咲くにつけて鳴くので、霍公鳥が悲常に、珍しく感ぜられることだ。其上、搗(カ)てゝ加へて、大聲で鳴くのだもの。

4092 霍公鳥は好い鳥だが、非常に氣に食はない所が一つある。それは、橘の花が咲く時分にやつて來て、邊(アタリ)を震動さして鳴くことだ。

4093 英遠の浦に寄せて來る波が、彌甚(ヒド)く、間斷(シキリ)に高く立ち續けて、寄せかけて來る。東風が、甚いからだらうか。

右、大伴ノ家持。

陸奥ノ國から、金が出たのについて、出された詔書を拜して、賀し奉つた歌。竝びに短歌。三首

4094 葦原ノ瑞穗(ミヅホ)の國を天降り知(シ)らしめしける、皇祖(スメロギ)の神の命の、御代重ね、天つ日嗣(ヒツギ)と知(シ)らし來る君の御代々々、敷き座(マ)せる四方の國には、山川を廣み、厚みと。奉る御調寶(ミツキタカラ)は、數へ得ず、盡しもかねつ。然れども、我大君の諸人を誘(イザナ)ひ給ひ、よきことを始め給ひて、黃金(クガネ)かも樂しけくあらむと思ほして下悩ますに、鳥が鳴く東(アヅマ)の國の陸奥(ミチノク)の小田なる山に、黃金(クガネ)あ

4094 此日本の國をば、天降つて治めて入らつしやつた代々の皇祖皇宗達の御治世々々を重ねて、尊い御系統として、治め續いで入らつしやる天皇陛下の御代毎に、治めて入らつしやる方々の國には、川が廣々として流れ、山が幾重にも厚く重つて居ることゝて、諸國から獻上する貢物(ミツギ)の、立派な品物は數へることも出來ず、それから、後からどん〴〵來るから、かくしかねる次第である。處が、我が天皇陛下が、澤山の人間を率き連れ、指圖して善い行ひ(盧舍那佛を建立する事を、佛教道德から見て善事と言うたのである。)をなし始められて、茲へ黃金が出て來たら、どんなに愉快に、人々も悦ぶことだらうと思はれて、心中に煩悶(ハテ)して入らつしやつた處が、此頃になつて、東の國の地方の極(ハテ)の、其陸奥の國の小田郡にある山で、黃金があつた、と大臣が復奏せられたので、お心がお晴れなされて、之は天地間の神樣も、自分の願ふ心をば御承知下され、皇祖皇宗の御魂

りと申し給へれ、御心をあきらめ給ひ、天地の神あひうづなひ、皇祖の御靈助けて、遠き世にかゝりしことを、我が御代に顯してあれば、食す國は榮えむものと、神ながら思ほし召して、ものゝふの八十伴緒をまつろへの、任のまに〳〵、老人も、女、童も、然願ふ心滿足に、撫で給ひをさめ給へば、玆をしもあやに尊み、嬉しけく彌思ひて、大伴の遠つ神祖の其名をば、大來目主と負ひ持ちて、仕へし官、海行かば水漬く屍。山行かば苔生す屍。大君の邊にこそ死なめ。顧みはせじと言立て、健男の清き其名を、古從今のをつゝに、流さ

が御助力下されて、久しい時代の間、日本の國から黄金が出る、と語り傳へて來たことをば、私の御代に初めて實現した次第であるから、此治めて居る國は、之より盛んになることだ、と天皇陛下の御心でお思ひなされて、澤山の武人の官吏達も、天皇陛下が服從おさせなさる御心の通りに、世の中にありとある老人も、子どもゝ、女も、銘々自身の思ふ心通り滿足する程に、御愛しなされ、お治めになるので、其御意志をば非常に尊く思ひ、益嬉しく思うて、職務に從事することだ。それで我々の方で申すと、大伴家の遠い先祖の其名を大來目主とつけて、お仕へ申してをつた役人であつた人が、我々は、天皇陛下の御命令通り、海へも山へも行かう。それで、海では水に漬る屍となり、山では、草の生えて居る屍となつて、朽ち果てゝ了うても、天皇のお側で、死ねば滿足だ。決して、後も振り向くことはすまい、と主張し盟つて、立派な男と言ふ其名を、昔から今の此時代迄、盛んに傳へて居る先祖の子孫で、我々はある。此大伴氏と、それから佐伯氏とは、一體祖先が立てゝおいた主張は、其子孫たる者は、祖先の評判を絶やさないやうに、天皇陛下に服從するものだ、と言ひ續いで來て居る所の役人であるぞ。梓の弓を手に取り上げて、刀をば腰にとりつけ、御所の朝の番、夜の番に、天皇陛下の御所を御守り申すことに、我々を差し置いては、又と人はあるまい、

へる親の子どもぞ。大伴と佐伯の氏は、人の祖の立つる言立て、人の子は祖の名絶たず、大君に從ふものと、言ひ續げる事の官ぞ。梓弓手に取り持ちて、劍太刀腰にとり佩き、朝守り夕の守りに、大君の御門の守り、吾を置きて又人はあらじと、彌立ちて思ひしまさる。大君の御言の幸を聞けば、尊み

反歌

4095 健男の心思ほゆ。大君の御言の幸を聞けば、尊み

4096 大伴の遠つ神祖の奥つ城は、著く標立て。人の知るべく

4097 皇祖の御代榮えむと、東なる陸奥山

と彌主張を立てゝ、彌深く思ひ込むことだ。此度出た、天皇陛下の仰せ言の御寵命を聞いたので、尊さに彌思ひ込むことだ。

4095 立派な男の心持ちが、奮ひ起つて來るやうに、思はれることだ。天皇陛下の御寵愛の御語を承ると、尊さに。

4096 大伴の家の古い、尊い御先祖の御墓場は、人が之と合點するやうに、明白と標を立てよ。

4097 天皇陛下の御代が、榮えて行くに違ひないと言ふので、東

に、黄金花咲く

右、感寶元年五月十二日、越中ノ國守の官舍で、大伴ノ家持が作つたもの。

吉野の離宮に行幸せられた時、前から作つて置いた歌。

二首

4098 高御座天の日嗣と、天の下治しめしける皇祖の神の命の、畏くも始め給ひて、尊くも定め給へる、み吉野の此大宮に、あり通ひ見し給ふらし。ものゝふの八十伴緒も、己が負へる己が名負ひて、大君の任けのまにまに此川の絶ゆることなく、此山の彌遠長に續ぎ〳〵に、かくしこそ仕へ奉らめ。

國の地方の果ての陸奥の山に、黄金の花が咲いたことだ。

4098 天子の御位にお即きなされて、尊い御系統とて、天下を治めて入らつしやつた、昔の皇祖の尊いお方が、畏れ多くも、其所をお開きになつて、お定めになつた吉野の此御所に、天皇陛下は、始終お越しになつて、邊の景色を御覽なされるのは、昔の天子の德を、お偲びになるのに違ひない。それで軍人の役人連も、自分が受けて居る、自分の家の名に反かず、(大伴なることを、暗示して居る。)そして、天皇陛下の御命令通りに、此川のやうにと切れることなく、此山が何時迄も續いて居るやうに、何時迄もかうして、お任せ申して居よう。幾久しい間。

反歌

4099 古を思ほすらしも。吾が大君、吉野の宮をあり通ひ見す

4100 ものゝふの八十氏人も、吉野川絶ゆることなく、仕へつゝ見む

都の家に贈らう、と思ふ眞珠を、手に入れたくて作つた歌

4101 珠洲ノ海人の沖つみ神に、い渡りて潛き取るとふ、鰒玉五百千もがも。はしきやし妻の命の、衣手の別れし時よ、ぬば玉の夜床片去り朝寢髪搔きも梳らず、出でゝ來し月日數みつゝ、嘆くらむ心和さに、霍公鳥來鳴く五月の菖蒲草、花橘に貫き雜へ、蘰に

4099 我が天皇陛下は、吉野の御所をば、始終通うて御覽になる。之は、昔をお慕ひになつて居るからに違ひない。

4100 澤山の氏に屬する役人達も、此吉野川がと切れないやうに、と切れることなく、天皇陛下にお伴して、茲を見ることだらう。

4101 鈴の浦の海人が、沖の神即、海神の入らつしやる邊へ渡つて行つて、潛つて取り出すと言ふ所の鰒の眞珠の、五百も千も欲しいものだ。可愛ゆいいとしい人が別れた時から、二人竝んで居た床の片方が空いて、其處に小さくなつて寢た朝の、寢亂れた髮を梳きもせず、私が出發してやつて來た月日を、あれからもう、幾日たつたと數へ乍ら、嘆息を吐いて居る筈の、其心の紛はしに、霍公鳥が鳴いて來る五月の菖蒲を、橘にさし雜ぜて、頭飾りにせよ、と物に入れて、贈つてやりたいものだ。

せよと、裏みてやらむ

反歌

4102 白玉を裏みてやらな。菖蒲草、花橘にあへも貫くがね

4103 沖つ島い行き渡りて、潜くちふ鰒玉もが裏みてやらむ

4104 吾妹子が心なぐさにやらむ爲、沖つ島なる白玉もがも

4105 白玉の五百つ集ひを、手に結び、おこせむ海人は、むかしくもあるか

右、五月十日、大伴ノ家持、興に乘じて作つたもの。

史生 尾張ノ少昨を教へ喩す歌。一首竝びに短歌

七出例には云はく、但一條を犯さ

4102 白玉を、物に入れて贈つてやらう。菖蒲や橘の花に、合せて插すやうに。

4103 沖の方の島へ渡つて、潜り込んで採つて來るのだ、と言ふ鰒の眞珠があれば好いが。荷造りをして贈つてやらうのに。

4104 いとしい人の心を、慰める種に遣る爲に、沖の島にある、白玉が欲しいことだ。

4105 白い玉の、幾百と知れん程集めて插いた玉の緒を、手で掬ひ上げて、自分の方へ持つて來てくれる海人が、あれば好いが。奥ゆかしいことだ。

ば、即、合に之を出すべし。七出なくして、輙、棄てたる者は、徒一年半とすてへり。三不去に云はく、七出を犯すと雖も、合に棄つべからず。違へる者は、杖一百とす。唯、奸と惡疾とを犯さば、之を棄つることを得しめよてへり。兩妻例に云はく、妻ありて、更に娶れる者は、徒一年とす。女家は杖一百して離てゝへり。

詔書に云はく、義夫節婦を愍み賜ふてへり。謹しみて案ふに、先の件の數條は、建法の基にして、化道の源なり。然れば則、義夫の道は、情別なきに存す。一家財を同じくせば、豈、舊を忘れ、新しきを愛するの志あらめやてへり。所以に數行の歌を綴り作りて、舊きを棄つる惡ひを悔いしむ。其詞に曰はく、

4106 大汝少彦名の神代より言ひ繼ぎけらし。父母を見れば尊く、妻子見ればかなしく愛し。うつそみの世のことわりと、かく様に言ひけるものを、世の人の立つる言證。ちさの花咲ける盛りに、はしきよし其妻の如、朝夕に笑みも笑まずも打ち嘆き語りけまくは、永久にかくしもあらめや。天地の神ことよせて、春花の盛りも、あらたしけむ時の盛りぞ。離り居て嘆かす妹が、何時しかも使ひの來むと、待たすらむ心寂しく、南吹き、雪解は溢りて、射水川流るゝ水泡の、寄るべなみ、さぶる其子に、紐の緒のいつがり合ひて、にほ鳥の二人竝び居、奈胡ノ海の奥を深めて、迷はせる君が心の、術も術なさ

反歌

4107 青丹よし奈良にある妹が、高々に待つらむ心。しかにはあらぬか

4108 里人の見る目恥し。さぶる子に迷はす君が、寢屋出後ぶり

4109 紅はうつらふものぞ。橡のなれにし衣に、なほ及かめやも

右、五月十五日、國守大伴ノ家持。

少咋の先妻、夫の迎へを待たないで、勝手にやつて來た時の歌

4110 さぶる子がいつきし殿に、鑼かけぬ驛馬下れり。里も轟ろに

4106 此日本の土地に、未、天孫のお降りにならない先、大汝少彦名神が入らつしやつた大昔から、此ことは言ひ續けて來たことに違ひない。お父さんやお母さんを見ると尊いし、女房子を見ると可愛ゆくいとしい。之が人間世界の道理だ、とかう言ふ風に言うて來たのだよ。世間の人の主張する教訓は。處がお前さんは、山ちさの花が咲いて居るやうに、仲の好い頂上に、可愛いゝ其女房である人と、朝晩笑うて居る時も、さうでない時も、感じ入つて話し合うたことは、人間と言ふものは、何時々々迄も、かうして居られようか。天地間に有らゆる神樣が、かうした女房を自分に與へて下され、そんなに嘆く必要がない。旅に行くからと言うて、何時もそんなに離れて居ようか。其中には、天地間の所有神樣で、惠みをお垂れ下さつて、春の花が咲き盛るやうな、慶たい時もあるだらうと言うて、家を出發せられた其嘆きの頂上で、今はある筈だ。（奈良の方では）それに別れて居る爲に、嘆いて居られる奥さんが、早く使ひが來れば好いと待つて居るだらう心も、氣の毒に思はれるのに、此方では、春の南風が吹いて、雪解けの水が溢れ出て、射水河に流れる水の泡が、寄る所がないやうに、定つた目的もなく、漂浪する所の、其遊女にひつゝき寄つて、二人竝んで居て、此奈胡の海ではないが、奥深く心の底迄も迷ひ込んで入らつしやるあなたの心が、思へば遣る瀬ないこと、と言うたゞけでも足りない程、遣る瀬ないことだ。

4107 奈良にをるいとしい人が、鶴首して待つて居る心は、お前さんのやうな、さうしたものではありますまいよ。

4108 近所の人の見る目も恥しい。さぶる子に迷うて入らつしやるあなたが、寢屋を出て行きなさる後姿が。

4109 華美ではあるが、紅染めは褪せるものでありますぞ。それよりは、やはり、よれ〳〵になつても、橡のなれた著物には、如何して及ぶことでありませうか。（と遊行女婦の薄情なことゝ、いくらきたなくなつて居ても、なれた妻が好い、と言ふ心持ちとを說いたものである。）

4110 さぶる子が、大事に仕へて居た御殿の所に、鑼をつけて居ない、飛脚馬が下つて來た。近所も響く許りに、甚い音で。（鈴もかけて居ないのに、里も轟ろにやつて來た、と言ふ處に、面白味があるのである。）

右、同月十七日、大伴ノ家持。

橘の歌。竝びに短歌

4111 かけまくもあやに畏し。皇祖の神の大御代に、田道間守常世に渡り、八竿持ち參出來し時、時じくのかぐの樹の實を、畏くも殘し給へれ、國も狹に生ひ立ち榮え、春されば孫枝萌えつゝ、霍公鳥鳴く五月には、初花を枝に手折りて、處女らに裏にもやりみ、白栲の袖にも扱き入、かぐはしみ置きて枯らしみ、熟ゆる實は玉に貫きつゝ、手に纏きて見れども飽かず、秋づけば時雨の雨降り、足引きの山の梢は、紅に匂ひ散れども、橘のなれる其實は、ひた照りに彌見

4111 口に言ふのも非常に畏れ多いことだが、皇祖の神樣の御代に、田島守と言ふ人が、常世の國へ渡つて行つて、澤山の枝を持つて參上した時に、其時じくの香具の樹の實をば、畏れ多くも植ゑ附けて、種をお殘しになつたので、後には、國中一杯に生成し、立派になつて、春が來ると、枝に出る枝が、生え出すことだし、霍公鳥の鳴く五月頃には、初花をば枝ぐるめに折りとつて、娘達に土産にもやつて見たり、或は其花を、袖の中へも扱き入れ、香を懷しがつて、樹の儘に打つちやつておいて、すがれるに任せたり、又藥玉に插し乍ら、手に捲き著けて、幾ら見ても滿足しない。秋が近附くと、時雨の雨が降つて、山の樹の梢は、一樣に紅色に色が出て散つて了ふが、其樹になつた橘の實は、非常に輝いて、幾ら見ても、彌見て居たくあるし、雪の降る冬になると、霜が降るけれども、其葉も枯れないで、しつかりとした岩の樣に、愈繁榮になつて行くさうだからして、古い神樣の時代から、橘をば時じくの香具の樹の實、即、じやうべつたりある匂ひの好い果物、と申し名を附けたに違ひないことだ。

が欲しく、御雪降る冬に至れば、霜置けども其葉も枯れず。常磐なす彌さかばえに、しかれこそ、神の御代より置きしなべ、此橘を、時じくのかぐの木の實と、名づけゝらしも

反歌

4112 橘は、花にも、實にも見つれども、いやときじくに、尙し見が欲し

閏五月廿三日、大伴ノ家持庭中の花を詠んだ歌。竝びに短歌。二首

4113 大君の遠の御門とまけ給ふ司のまにま、み雪降る越には下り來、あら玉の年の五年、敷栲の手枕かず、紐解かず假寢をすれば、いぶせみと心

4112 橘は花としても見、實としても見て居たことであるが、もつとじやうべつたりに、幾らでも眺めて居たいことだ。

4113 天皇陛下の遠い御領地を治める役人として、任命せられた役目に從うて、雪の降る越の國へ下つて來て、五年と言ふ年の間、いとしい人の手枕を枕せず、下裳の紐も解かず、一人轉寢をして居るので、退屈だと言ふので、氣紛しに、撫子を屋敷内に蒔いて育て、又夏の野に生えて居る、百合の花を引いて來て植ゑて、それらの咲いた花を、室を出て

なぐさに、撫子を宿に蒔き生し、夏の野のさ百合引き植ゑて、咲く花を出で見る毎に、撫子が其花妻に、さ百合花ゆりも逢はむと、なぐさむる心しなくば、天離る鄙に一日もあるべくもあれや

反歌

4114 撫子が花見る毎に、處女等が笑ひの匂ひ思ほゆるかも

4115 さ百合花ゆりも逢はむと、したはふる心しなくば、今日も經めやも

同閏五月廿六日、大伴ノ家持。

越中ノ掾久米ノ廣縄、天平二十年朝集使に從つて都に上つたが、それが濟んで、天

見る度毎に、其撫子の懷しい妻とも思はれる、花ではないが、あの家にをる妻に、百合の花ではないが、即、將來は逢はう、となだめる心持ちがなかつたら、地方の田舍に、一日だつてをられる筈があらうか。

4114 撫子の花を見る度毎に、娘達の莞爾した樣子が、思はれることだ。

4115 百合の花ではないが、ゆり即、將來は逢はう、と心の中で思ひ續けて居ることがなければ、安心して暮されようか。其自信があればこそ、今日かうして居られるんだ。

平感寶元年閏五月廿七日、任地に歸つて來たので、長官の官舍で、賜酒の宴が催された其時に、主の大伴ノ家持の作つた歌。竝びに短歌。二首

4116 大君の任けのまに〳〵、取り持ちて仕ふる國の、年の中の事かたね持ち、玉桙の道に出で立ち、岩根蹈み、山越え、野行き、都邊にまゐし我が兄を、あら玉の年行きかへり、月重ね見ぬ日さまねみ、戀ふるそら易くしあらねば、霍公鳥來鳴く五月の菖蒲草、蓬かづらき沈醉遊びなぐれど、射水河雪消溢りて、行く水の彌益

4116 天皇陛下の御命令通りに、政を引き構へてなし奉つて居る國の、一年中の爲事を、引き纏めて持つて、道中に出掛けて、岩を蹈み通つて、山を越えたり、野を通つたりして、都の方へ參上したあなたをば、年が來復し、月を重ねて待つて居ても、逢はない日が多いので、焦れて居る心持ちが安らかでないので、霍公鳥の鳴いて來る、五月の菖蒲蓬を頭に纏として、酒に醉ひ潰れて、心を紛はして遊んで居るけれども、此射水河の雪解けの水が漲つて、どん〳〵と烈しうなつて許り行くやうに思ひ込み、あの鶴の鳴いて居る、奈胡の入り江の菅ではないが、勤即、しみ〳〵と鬱結して思ひ込み、溜め息を吐き乍ら、私の待つて居たあなたは、退出して宮を下つて歸られて、夏の野の百合の花が笑み出したやうに、晴れ〴〵とした笑顔で、莞爾と笑みを含んで、

しにのみ、鶴が鳴く奈胡江の菅の、
ねもごろに思ひ結ぼれ、嘆きつゝ我
が待つ君が、事終り歸り退りて、夏
の野の早百合の花の、花笑みに、に
ふゞに笑みて、逢はしたる今日を始
めて、鏡なすかくし常見む。面變り
せず

反歌

4117 昨年の秋相見し儘に、今日見れば、
おもや珍し。都方人

4118 かくしても、相見るものを。尠くも、
年月經れば、戀しけれやも

霍公鳥の鳴くのを聞いて作
つた歌

4119 古從偲びにければ、霍公鳥鳴く聲

自分に逢うて下さつた今日をば始めとして、之からは何時
もかうして、鏡を見るやうに眺めて居ませう。何時迄も容
子變らずに。

4117 去年逢うて見た儘であらう、と思うて今日見ると、顏がす
つかりと目立つて變つて居られる、都の方の御方よ。

4118 こんなに焦れ〳〵て、末に逢ふことだ。年月が長く立つた
ので、焦れるだけでをられたゞらうか。非常に焦れて居た。

4119 昔から霍公鳥をば心の中で、慕うて居たのであるから、其

聞きて、戀しきものを
上京した節、貴人や美人を
見て、宴會することがあら
うと言ふので、豫め作つて
おいた歌

4120 見まく欲り、思ひしなべに、かづら
かげかぐはし君を、相見つるかも

4121 朝參の君が姿を、見ず久に、鄙にし
住めば、吾戀ひにけり

同五月廿八日、大伴ノ家持。

天平感寶元年閏五月六日以
來、ちよつとした干魃があ
つて、田畑が凋れる樣子が
見えて來た。所が、六月朔
日になつて、不意に雨雲が

鳴き聲を聞いたので、彌思ひが募つたことだ。

4120 逢ふことを願うて、慕うて居た以上に、立派なあなたをば、
逢うて見たことだ。

4121 御所へお上りの、あなたの御姿をば見ないで、早く地方の
田舍に住んで居たので、私は焦れて居ましたことです。

顯れたので作つた歌。竝び
に短歌

4122 皇祖の領きます國の、天の下四方の
道には、馬の蹄い盡す極み、舟舳の
い果つる迄に、古ゆ今の現に、萬調
まつるつかさと、作りたる其生業を、
雨降らず日の重れば、植ゑし田も、
蒔きし畑も、朝毎に凋み枯れ行く。
そを見れば心を痛み、幼兒の乳乞ふ
が如く、天つ水あふぎてぞ待つ。足
引きの山のたをりに、この見ゆる天
の白雲、わたつみの沖つ宮邊に立ち
渡り、との曇り合ひて、雨も賜はね

反歌

4123 この見ゆる雲ほびこりて、との曇り、

4122 天皇陛下の治めて入らつしやる國なる、天下中の、地方の
國々では、馬の蹄で行き盡す範圍内、又は海では舟の舳先
が止まる迄の間、昔から現在の今迄、澤山の奉り物を奉る
爲事と言ふので、拵へた其農作の爲事を、雨が降らないで
幾日にもなつたので、苗を植ゑた田も、種を蒔いて育てた
畑も、毎朝見る度毎に、凋んで枯れて行く。それを見ると
心が辛いので、小さな兒が乳を欲しがるやうに、天から降
つて來る水を焦れて、待つて居ることだ。山の峠の邊に今
見えて居る空の白雲が、どうか海の神の方の沖の宮のある
邊迄、ずつと一杯に立つて、一面にすつかり曇つて、雨を
ば下されよ。

4123 今見えて居る雲が蔓延つて、天一面曇つて、雨が降つてく

雨も降らぬか。心だらひに

右、六月朔日、日暮に作る。大伴ノ
家持。

雨の降つたのを賀うた歌

4124 吾が欲りし雨は降り來ぬ。かくしあ
らば言擧げせずとも、年は榮えむ

六月七日、大伴ノ家持。

□七夕の歌。竝びに短歌。二
首

4125 天照す神の御世より、安の川中に隔
てゝ、向ひ立ち袖振り交し、息の緒
に嘆かす子ら、渡り守る舟も設けず、
橋だにも渡してあらば、その上從も
い行き渡らし、携り頸がけり居て、
思ほしきことも語ひ、慰むる心はあ

れゝば好い。心が滿足する樣に。

4124 自分が願うて居た、雨が降つて來た。かうなつた上は、も
う米の稔りが、盛んであらうことは確かで、口に出して言
はないでも、訣つて居るだらう。

4125 天照大神の入らつしやつた頃から、天の安川を中に隔てゝ、
向ひ合うて立つて、互ひに袖を振り合ひ、命掛けで嘆いて
居る人は、渡し守が、舟も拵へてくれないので、せめて、
橋だけでも渡してあつたら、其上をば、通つてお渡りなさ
れ。手を連ぎ首に手をかけて居て、言ひたいと思ふことも
話し合ひ、心を宥めることもあらうのに、秋でないからと
言ふので、何故か、話をし合ふことも尠い人々であらう。
人間世界の人の私も、それが無性に不思議に思はれて、來
復する年の度毎に、大空を振り仰いで見乍ら、七夕の儚い

らむを、何しかも秋にしあらねば、
言問ひの乏しき子ら、うつそみの世
の人我も、こゝをしもあやに奇しみ、
行き代る年のは毎に、天ノ原振り離け
見つゝ、言ひ續ぎにすれ

4126 天ノ川橋渡せらば、其上從も、い渡ら
さむを。秋にあらずとも

4127 安ノ川。是向ひ立ちて、年の戀、け長
き子らが、妻どひの夜ぞ

右七月七日、天の川を仰いで作る。
大伴ノ家持。

□越前ノ國ノ掾大伴ノ池主の來
贈したる戲歌。四首

忽に恩賜を辱くして、驚欣すること已に深し。心中に咲みを含みて、獨座稍開けぬ。表裏同じからず、戀ひを語り傳へにすることだ。

4126 天の川に橋を渡しておいたら、逢ふ爲に其上をば、秋でなくても、渡つて入らつしやらうのに。

4127 あの天の安の川よ、其處で向ひ合うて、立つて居乍ら、一年中焦れて居る、長く逢はない人が、妻を訪ねて行く處の夜である。

相違すること何ぞ異ならむ。所由を推量するに、卒爾にして策を作せるか。明らかに加ふるを知りぬ。豈他意あらめや。凡本物を貿易すること、其罪輕からず。正贓倍贓宜しく急に并せて滿つべし。今風雲に勒し、微使を發遣す。早速に返報せられよ。須くも延回すべからず。

勝寶元年十一月十二日

物貿易せられたる下吏、謹みて貿易したる人を斷ずる官司の廳下に訴ふ。

別白。可怜の意默し止むこと能はず、聊か四詠を述ぶ。唯睡覺に擬しつ。

4128 草枕旅の翁と思ほして、針ぞ賜へる。
縫はむ物もが

4129 針袋取り上げ、まへにかへさへば、

4128 私をば旅の翁だ、とお思ひなされて、針を下さつたことだ。
縫ふ布が頂きたいものです。

4129 あなたの下さつた針袋を手に取り上げて、引つくり返して

おのともおのや。裏も綴ぎたり

4130 針袋縫ひ續け乍ら、里毎に衒ひ歩けど、人も咎めず

4131 鳥が啼く東を斥して、ふさへしに行かむと思へど、由もさねなし

右の返歌は、紛失して探し出すことが出來ない。

□更に來贈したる歌。二首

驛使を返すことに依りて、今月十五日、部下の加賀郡の境に到來しぬ。面蔭に射水の郷を見て、戀の緒は深海ノ村に結ぼれぬ。身は胡馬と異なれど、心は北風に悲しぶ。月に乘じて徘徊すれど、曾て所爲なし。稍して來封を開けば、其辭に云はく、著者先に奉る所の書、返畏疑を度るか。僕囑囉を作して、

見ると、裏迄も綴いである。此には見覺えがある。私の物に定まつて居る。

4130 自分の針袋は破れて居ますが、それを縫ひ綴つて、何處の里も何處の里も、衒耀して歩いては居るが、誰も目を立てて見ない。

4131 東國の方を斥して、破れた針袋の修繕に行かうと思ふが、行く手段がないことです。ほんに。

且使君を惱ましぬ。夫水を乞ひて酒を得たり。從來能口にして、時を論じて理に合せしこと、何ぞ、强吏として題せむ。尋いで、針袋の詠を誦するに、詞泉は酌めども竭きず、膝を抱きて獨り咲ひ、能く旅の愁へを鐲ぎ、陶然として日を遣る。何をか慮り、何をか思はむ。短筆不宣。

勝寶元年十二月十五日　　微物下司

謹みて不仗使君紀室に上る。

別に奉る歌。二首

4132 堅さにも、かにも、横さも、やつことぞ我はありけり。主の殿戸に

4133 針袋此は賜りぬ。鑽袋今は得てしが。翁さびせむ

右、二首、大伴ノ池主の歌である。

4132 堅にでも横にでも、どうにでもかうにでも、あなたの言ひ付けに叛かない奴隷として、お仕へ申して居ることであります。あなたの御殿の戸の邊について。

4133 老人らしい風をするには、針袋と燧袋がいります。其針袋は頂きました。此上は、燧袋が欲しいものです。さうして、親父らしい風を致しませう。

宴會の席で、雪月梅花を詠んだ歌

4134 雪の上に照れる月夜に、梅の花折りて贈らむはしき兒もがも

右、十二月、大伴ノ家持。

4135 吾が夫子が琴取るなべに、常人の言ふ嘆きしも、彌しき益すも

右、越中ノ少目秦ノ石竹の官舍の宴會で、大伴ノ家持の作つたもの。

天平勝寶二年正月二日、國廳で郡司たちを饗應した、宴會の歌

4136 足引きの山の樹末のほよ取りて、かざしつらくは、千年祝ぐとぞ

右、國守大伴ノ家持。

4134 今夜は、雪の上に照つて居る、月の好い晩だ。梅の花を折つて、贈つて好いやうな、可愛ゆい人があれば好いが。

4135 琴の音を聞くと、嘆く心持ちが起ると言ふが、況てあなたが、琴を御引きなさるのだもの。世の人の言ふ嘆きが、彌頻りに益して起つて來ることだ。

4136 山の木立ちの梢に生えて居る、ほやの寄生木を取つて、かうして頭に簪して居るのは、老木に出來たものだから、それにあやかつて長生きをしたい、と千年の齡を、祈らうとてするのである。

越中ノ掾久米ノ廣縄の官舍の宴會の歌

4137 睦月立つ春の始めにかくしつゝ、あひし笑みてばときじけめやも

同月五日、大伴ノ家持。

墾田の地を視察する爲に、礪波郡の主帳多治比部ノ北里の家に泊つた所が、遽かに風雨が起つて、歸ることが出來なくなつて作つた歌

4138 やぶなみの里に宿借り、春雨に隱りつゝむと、妹に告げつや

二月十八日、國守大伴ノ家持。

4137 正月が來た春の始めに、かうして笑ひ合うて來たならば、何時迄も、長壽することであらうよ。

4138 やぶなみの里で宿を借つて、春雨に引き籠つて謹んで居る、といとしい人に告げたか、どうか。